

# 上伊田遺跡

2005年2月

岡山県保健福祉部生活衛生課  
岡山県御津町教育委員会

# 例 言

- 1 本書は、岡山県動物愛護センター建設に伴い、御津町教育委員会が岡山県の委託を受けて実施した、「上伊田遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 上伊田遺跡は岡山県御津郡御津町大字伊田字大谷に所在する。
- 3 発掘調査は1994年度と96年度に御津町教育委員会 長谷川一英が担当して実施し、その後、断続的に遺物整理を行った。
- 4 本書の作成は、御津町教育委員会が岡山県の委託を受け、2004年度に実施した。
- 5 本書に関連する出土遺物、図面、写真等は御津町教育委員会に保管している。
- 6 本書の執筆、編集は長谷川があたった。

# 凡 例

- 1 本書の高度値は海拔高である。  
方位は図1～4・51が真北、他が磁北である。上伊田遺跡付近の磁針方向は西偏約6°40'である。
- 2 遺物実測図の縮尺率は土器1/4、石器2/3、金属製品1/1である。  
土器実測図の断面が白色のものは弥生土器、土師器を、黒色のものは須恵器、陶器、磁器を、網点のものは瓦器、瓦質土器を示す。また、石器にはSを、金属製品にはMを付している。
- 3 実測図等の遺跡名称は上伊田(KaMiTa)、略号はKMIとし、その後に調査年度の西暦の下2桁を示した。
- 4 調査に際して、1つの調査単位を1つのトレンチとし、調査開始順に1から順にトレンチ番号を付与した。2年次の調査においても、トレンチ番号は続き番号とした。
- 5 遺物は、取り上げ単位ごとに、取り上げ年月日を優先して、01から番号を付与し、遺物台帳に遺物番号順に出土トレンチ、層位、遺構、年月日を記録した。  
遺物への注記は略号、調査年度、遺物番号のみとしている。
- 6 遺物の取り上げ、本書の記述に際して、以下の略号を使用した。

SA…ピット列

SB…建物

SD…溝・流路

SK…土壤

SP…ピット

各遺構種別ごとに、検出順に01から遺構番号を付与し、略号の後に示したが、SD、SK、SPに関しては、年度ごとに01から遺構番号を付与した。そのため、同じ略号、遺構番号のものが複数ある。本来ならば、整理すべきであろうが、新旧番号を対照する際の齟齬を避けるため、調査時に付与したままとしている。本書の記述に際しては、遺構番号の前に調査時のトレンチ番号を付して、略号、トレンチ番号、遺構番号として識別している。

# 目次

例　　言

凡　　例

目　　次

I 地理的・歴史的環境 .....	1
II 調査の経緯と経過 .....	4
1 調査に至る経緯 .....	4
2 調査日誌（抄） .....	6
III 調査成果 .....	10
1 はじめに .....	10
2 I 区の調査 .....	10
1) 上段第1層 .....	11
2) 上段第1遺構面 .....	14
3) 上段第2層 .....	18
4) 上段第2（最終）遺構面 .....	18
5) 下段第1層 .....	25
6) 下段第1遺構面 .....	26
7) 下段第2層 .....	26
8) 下段第2（最終）遺構面 .....	28
3 II 区の調査 .....	29
1) 第1層 .....	29
2) 第1遺構面 .....	30
3) 第2層 .....	33
4) 第2（最終）遺構面 .....	34
4 III 区の調査 .....	39
1) 第1層 .....	39
2) 第1遺構面 .....	40
3) 第2層 .....	46
4) 第2遺構面 .....	48
5) 第3層 .....	53

6) 第3（最終）遺構面	56
IVまとめ	64
V立会調査の成果	66
土器観察表	69
石器観察表	75
報告書抄録	76

## 図 目 次

図1 駅津町位置図	1
図2 調査地周辺遺跡分布図	3
図3 上伊田遺跡範囲推定図	8
図4 調査区配置図	9
図5 I区東壁土層断面図	11
図6 I区西壁土層断面図	12
図7 I区上段第1層出土遺物実測図	13
図8 I区上段第1遺構面出土遺物実測図	14
図9 I区第1遺構面平面図	15~16
図10 SA501平・断面図	17
図11 SB202平・断・土層断面図	17
図12 I区上段第2層出土遺物実測図	18
図13 I区第2（最終）遺構面平面図	19~20
図14 I区上段第2遺構面出土遺物実測図	21
図15 SA502平・断面図	21
図16 SB507平・断面図	22
図17 SB101平・断・土層断面図	23
図18 SB101出土遺物実測図（1）	24
図19 SB101出土遺物実測図（2）	25
図20 I区下段出土遺物実測図	27
図21 I区下段第2遺構面出土遺物実測図	29
図22 II区西壁土層断面図	29
図23 II区第1層出土遺物実測図	30

図24 II区第1遺構面出土遺物実測図	30
図25 II区第1遺構面平面図	31~32
図26 SB303平・断・土層断面図	33
図27 II区第2層出土遺物実測図	33
図28 II区第2遺構面出土遺物実測図	34
図29 II区第2(最終)遺構面平面図	35~36
図30 SB304平・断・土層断面図	37
図31 SB304出土遺物実測図	38
図32 III区西壁土層断面図	39
図33 III区第1層出土遺物実測図	40
図34 III区第1遺構面平面図	41~42
図35 SB401・402・403平・土層断面図	44
図36 SB401・402・403柱穴土層断面図	45
図37 SB401・402・403出土遺物実測図	45
図38 III区第2層出土遺物実測図	47
図39 III区第2遺構面平面図	49~50
図40 III区第2遺構面出土遺物実測図	51
図41 SK402平・土層断面図	52
図42 SK402出土遺物実測図	52
図43 III区第3層出土遺物実測図	55
図44 III区第3遺構面出土遺物実測図	56
図45 III区第3(最終)遺構面平面図	57~58
図46 SB404・405出土遺物実測図	59
図47 SB404・405炭化材出土状況図	60
図48 SB404・405・SK403平・土層断面図	61
図49 SB408平・土層断面図	62
図50 SB408出土遺物実測図	63
図51 立会調査位置図	67~68

# 写真目次

写真1	調査地周辺航空写真	77
写真2	調査地遠景（北東から）	78
写真3	調査地遠景（南西から）	78
写真4	I区（1トレンチ）上段調査前（南東から）	79
写真5	I区（1トレンチ）下段調査前（北東から）	79
写真6	I区（2トレンチ）上段調査前（南から）	80
写真7	I区（2トレンチ）上段調査風景（北西から）	80
写真8	I区（1トレンチ）上段第1遺構面（北東から）	81
写真9	I区（5トレンチ）上段第1遺構面（南西から）	81
写真10	I区（2トレンチ）上段第1遺構面（西から）	82
写真11	I区（1トレンチ）上段 SK101（北東から）	82
写真12	I区（5トレンチ）上段 SA501（南西から）	83
写真13	I区（2トレンチ）上段 SB202（南西から）	83
写真14	I区（1トレンチ）上段第2（最終）遺構面（北東から）	84
写真15	I区（5トレンチ）上段第2（最終）遺構面（南西から）	84
写真16	I区（2トレンチ）上段第2（最終）遺構面（西から）	85
写真17	I区（5トレンチ）上段 SA502（北東から）	85
写真18	I区（5トレンチ）上段 SB507（北東から）	86
写真19	I区（1トレンチ）上段調査風景（南西から）	86
写真20	I区（1トレンチ）上段 SB101（南から）	87
写真21	I区（1トレンチ）上段 SB101（北から）	87
写真22	I区（1トレンチ）上段 SB101（南西から）	88
写真23	I区（1トレンチ）上段 SB101土器出土状況（北西から）	88
写真24	I区（1トレンチ）下段第1遺構面（北東から）	89
写真25	I区（1トレンチ）下段第2（最終）遺構面（北東から）	89
写真26	I区（6トレンチ）下段第2（最終）遺構面（北東から）	90
写真27	II区（3トレンチ）調査前（南から）	90
写真28	II区（3トレンチ）第1遺構面（南西から）	91
写真29	II区（3トレンチ）SB303（西から）	91

写真30	II区（3トレンチ）第2（最終）遺構面（南西から）	92
写真31	II区（3トレンチ）SB304（南東から）	92
写真32	III区（4トレンチ）第1遺構面（南西から）	93
写真33	III区（4トレンチ）SB403・401・402（南東から）	93
写真34	III区（4トレンチ）第2遺構面（南西から）	94
写真35	III区（4トレンチ）SD405・SK402（北東から）	94
写真36	III区（4トレンチ）調査風景（北西から）	95
写真37	III区（4トレンチ）第3（最終）遺構面（南西から）	95
写真38	III区（4トレンチ）SB404炭化材出土状況（南西から）	96
写真39	III区（4トレンチ）SB404炭化材出土状況（東から）	96
写真40	III区（4トレンチ）SB405炭化材出土状況（南西から）	97
写真41	III区（4トレンチ）SB405炭化材出土状況（南東から）	97
写真42	III区（4トレンチ）SB404・405（南東から）	98
写真43	III区（4トレンチ）SB404（北東から）	98
写真44	III区（4トレンチ）SB405（北西から）	99
写真45	III区（4トレンチ）SB408（南東から）	99
写真46	III区（4トレンチ）SB408土器出土状況（西から）	100
写真47	出土遺物（1）	100
写真48	出土遺物（2）	101
写真49	出土遺物（3）	102

# I 地理的・歴史的環境

岡山県下三大河川の一つである旭川は藤山山麓から瀬戸内海へ県域の中央を南流している。上伊田遺跡の所在する御津郡御津町はその旭川の中流域に位置する。1955年に誕生した、面積約114km<sup>2</sup>、人口約10,500人の町である。近年まで、水稻耕作を営む静かな農村であったが、工業団地造成による企業の進出、隣接する岡市のベッドタウンとしての宅地開発等によって、町の様相は変わりつつある。

町域の約8割は山林で、北西部には吉備高原から延びる標高400m級の山地も見られる。それらの間を流れる旭川とその支流によって盆地状の平地が形成されている。

上伊田遺跡は、金川で旭川と合流する新庄川の左岸に形成された河岸段丘上に所在している。

上伊田遺跡の存在する五城地区は、近年、圃場整備に伴う発掘調査が実施され、平地に多くの遺跡が存在することが明らかになってきた。

縄文時代の遺跡は、御津町で最も古い早期末の土器片の出土した平岡西遺跡、後・晩期の土器片の出土した寺部遺跡、鍛冶屋谷遺跡、伊田沖遺跡がある。



図1 御津町位置図

弥生時代の遺跡は、縄文時代から続いて営まれたもののに、矢知遺跡、新庄尾上遺跡、新庄原遺跡、岩井山遺跡、上伊田遺跡、宅美池遺跡等数多く存在している。中、後期になると平地や緩斜面の全てに集落が形成されているといった様相を呈していたのである。これらの遺跡は以降も引き続き営まれている。

古墳は上伊田遺跡の南に宇那山古墳が存在している。北西に瀬戸古墳、南に祇園古墳も存在していたが、消滅している。西の丘陵には古墳時代後半に築かれた岩井山古墳群が存在するが、半数は消滅している。北西の峰

越えの道の峠部に道をはさむように前方後円墳の天神鼻1号墳（全長20.5m）と八ツ塚古墳（全長33m）が存在している。八ツ塚古墳からは1970年に道路拡幅工事で形象埴輪が出土している。

古代になると、平岡西遺跡から縁鉢陶器が、寺部遺跡から円面鏡が出土している。寺部遺跡はその地名と併せ考えると古代寺院の存在が考えられる。

中世になると、御津町域が水陸交通の要衝であったことから、数多くの山城が築かれている。特に、上伊田遺跡の所在するこの地区は五城地区といわれるよう、小規模ながら多くの山城が存在している。

上伊田遺跡の名称について、「伊田大谷遺跡」とするものもあるが、調査時の最新の遺跡情報である全国遺跡地図の記載に従って、「上伊田遺跡」とする。<sup>1)</sup>  
<sup>2)</sup>

1) 神原英朗ほか「御津町埋蔵文化財一覧」『岩井山古墳群』(1976)

2) 文化庁『全国遺跡地図 西山県』(1985)

1 須道山古墳	21 岩井山古墳群
2 矢知遺跡	22 岩井山遺跡
3 平岡西遺跡	23 伊田沖遺跡
4 鎌治久古墳	24 散布地
5 西谷城	25 宅美池遺跡
6 散布地	26 塚の谷遺跡
7 天狗古墳	27 上伊田遺跡
8 寺部遺跡	28 宇那山城
9 経畔古墳	29 宇那山古墳
10 熊野神社古墳	30 酒屋谷遺跡
11 新庄原遺跡	31 散布地
12 新庄尾上遺跡	32 散布地
13 鎌治屋谷遺跡	33 製銅跡
14 熊谷城	34 殿谷遺跡
15 天神鼻4号墳	35 殿谷城
16 天神鼻3号墳	36 しんのう塚古墳
17 天神鼻1号墳	37 殿谷4号墳
18 天神鼻2号墳	38 殿谷3号墳
19 八ツ塚古墳	39 殿谷2号墳
20 松撫城	40 殿谷1号墳



図2 調査地周辺遺跡分布図

## II 調査の経緯と経過

### 1 調査に至る経緯

岡山營林署五城苗畠事務所が設置されていた御津町大字伊田字大谷の西面する緩斜面には弥生時代中～後期の土器片、石器が出土する上伊田遺跡が存在し、金川高等学校生徒らによって遺物が採集されていた。

同事務所の業務が停止された後は、カヤの生い茂る荒地となっていた。

用地利用について、御津町でも種々検討したが決定を見なかつた。そのような中で、1990年、岡山県によって（仮）動物愛護センター（当時）の建設が計画された。しかし、前述のように、計画地には上伊田遺跡が存在することから、その範囲を確定するために御津町教育委員会によつて、91年6月13日に重機によって6ヶ所の試掘穴を設けた。その結果、従来考えられていた範囲以外に、谷を隔てた北側の平地にも遺跡が存在することが判明した。県ではこの結果に基づき、岡山県教育委員会とも協議し、遺跡に極力影響を与えないように設計したが、管理棟と愛護館建設については基礎を設けるため、発掘調査が必要となつた。

本来、県事業に伴う発掘調査は県教育庁、あるいは岡山県古代吉備文化財センターが担当するのだが、今回は発掘調査が必要と判明したのが93年度後半であったため、両者とも次年度に新たな調査が出来かねる状態にあった。そこで、埋蔵文化財の専門職員がいる町教委が調査を行うことになった。

また、本来ならば、既存の建物等を撤去した後に調査するのであるが、遺跡の性格を掘むため、可能な所から調査を行うことになった。まず、94年度に建物予定地のうち、空地の部分を調査し、後年に苗畠事務所関係の建物を撤去し、その部分を調査することになった。

94年10月20日付け、環衛第593号で岡山県知事長野士郎より、文化財保護法第57条の3に基づく埋蔵文化財発掘の通知が文化庁長官宛てに提出された。それを、町教委では、10月21日付け、御地教第771号で発掘調査が必要との意見を付して、県教委へ進達した。これに対して、10月24日付け、教文埋第4832号で県教委より、発掘調査を実施することとの通知が通知された。それを、町教委では、10月27日付け、御地教第868号で県知事長野士郎へ通知した。

さらに、町教委では10月27日付け、御地教第792号で保護法第98条の2に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を文化庁長官宛てに提出した。

また、11月1日付けで、県知事長野士郎を委託者、御津町長二宮基泰を受託者とし、調査に要する費用7,825千円を県が負担し、町は95年2月28日までに調査を終了するとした、上伊田遺跡発掘調査事業の委託契約を締結した。

現地での調査は、11月4日に機材を搬入してから始まり、翌年2月28日に機材を搬出して終了した。平行して、12月2日から整理作業も行い、95年2月28日付け、御地教第1821号で実績報告書を提出して終了した。

95年3月に県が用地を買収したため、既存の建物の撤去ができるようになった。建物部分の調査を行うこととなった。今回は事前に調査が必要なことは判明していて、県側で調査を行うことも可能であったが、調査が町教委以外で行われると、隣接する場所からの出土遺物等が別々の機関で保管されることとなる。また、前回の調査成果も十分に生かせれない怖れもあることから、県、県教委とも協議の結果、今回も町教委で調査を行うこととなった。

96年11月29日付け、環衛第740号で県知事石井正弘より、保護法第57条の3に基づく埋蔵文化財発掘の通知が文化庁長官宛てに提出された。それを、町教委では、12月4日付け、御教第1441号で発掘調査が必要との意見を付して、県教委へ進達した。これに対して12月16日付け、教文埋第1264号で県教委より、発掘調査を実施することとの通知が通知された。それを、町教委では、12月19日付け、御教第1482号で県知事石井正弘へ通知した。

さらに、町教委では97年1月30日付け、御教第1649号で保護法第98条の2に基づく埋蔵文化財発掘調査の報告を文化庁長官宛てに報告した。

また、1月16日付けで、県知事石井正弘を委託者、御津町長二宮基泰を受託者とし、調査に要する費用4,300千円を県が負担し、町は3月31日までに調査を終了するとした、上伊田遺跡発掘調査事業の委託契約を締結した。

現地での調査は、1月16日に既存建物撤去の立会から始まり、3月31日に機材を搬出して終了した。並行して、2月3日から整理作業も行い、3月31日付け、御教第1942号で実績報告書を提出して終了した。

この間、96年度からは計画地の造成工事も開始された。

ところが、97年11月に策定された岡山県行財政改革大綱により、98~2000年度の3年間の事業凍結が決定した。現地は造成工事が終了した段階で、以降の工事が停止となった。2000年度に、計画を縮小した上で実施することとなった。01~02年度に新計画、新設計を行い、03~04年度に建設工事を行った。

新たな工事では、建物は調査済部分に建設するが、給排水管や植栽の埋設のために掘削することになる。この部分の対応も町教委があたることとなった。

03年7月9日付け、生衛第329号で県知事石井正弘より、保護法第57条の3に基づく埋蔵文化財発掘の通知が県教委教育長宛てに提出された。それを、町教委では、7月23日付け、御教第6243号で掘削範囲が狭隘なため工事立会での対応を希望するとの意見を付して、県教委へ進達した。これに対して7月30日付け、教文埋第437号で県教委より、土木工事等について、

町教委の職員が立ち会うこととの通知が通知された。それを、町教委では、8月8日付け、御教第7029号で県知事石井正弘へ通知した。

現地での調査は、施工業者が遺跡範囲内を掘削するときは立ち会い、遺物採集、土層断面観察等を行った。

このころ、報告書作成の件が協議された。そして、94、96年度の調査成果だけでなく、工事立会とはい、一連のものである03～04年度の成果も盛り込んで作成することになった。

04年8月2日付け、御教第7284号で県知事石井正弘を委託者、町長安信治雄を受託者とし、作成に要する費用735千円を県が負担し、町は05年3月31日までに作成を終了するとした、上伊田遺跡発掘調査報告書作成業務の委託契約を締結した。これにより本書の作成を行った。

## 2 調査日誌（抄）

1994年度

- 94年11月 4日 機材搬入
- 11月 8日 1トレンチ調査開始
- 12月 2日 整理作業開始
- 12月20日 2トレンチ調査開始
- 95年 1月13日 3トレンチ調査開始
- 1月20日 2トレンチ調査終了
- 1月21日 1トレンチ調査終了
- 2月16日 3トレンチ調査終了
- 2月20日 機材搬出
- 2月28日 整理作業終了

1996年度

- 97年 1月16日 建物撤去立会
- 1月20日 4トレンチ調査開始
- 2月 3日 整理作業開始
- 2月 4日 5トレンチ調査開始
- 3月 5日 6トレンチ調査開始
- 3月 6日 5トレンチ調査終了
- 3月17日 6トレンチ調査終了

3月28日 4トレンチ調査終了

3月31日 機材搬出 整理作業終了

## 調査協力

岡山県生活衛生課・岡山県教育庁文化財課・岡山県古代吉備文化財センター・岡山大学埋蔵文化財調査研究センター・岡山市北消防署御津出張所・御津町役場

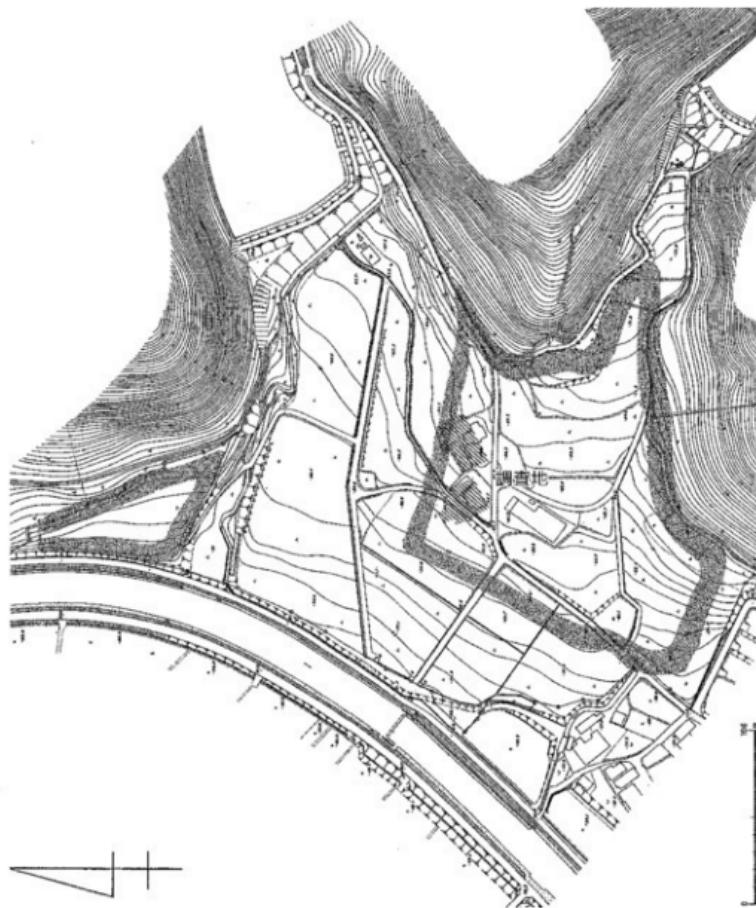


図3 上伊田遺跡範囲推定図（斜線部は建物計画(当時)位置）

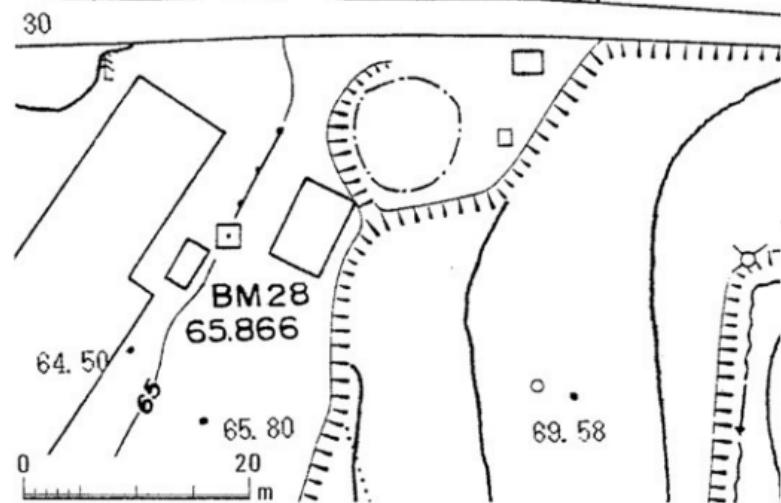
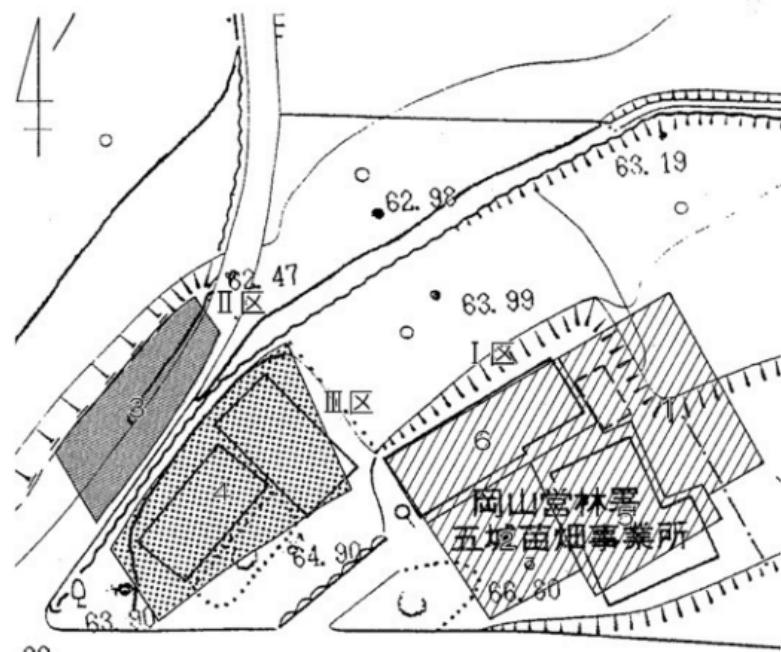


図4 調査区配置図（アラビア数字は調査時のトレンチ番号）

# III 調査成果

## 1 はじめに

上伊田遺跡は御津郡御津町大字伊田字大谷に位置する弥生時代からの複合遺跡である。土器片が出土することは知られていて、1950年に岡山営林署五城苗畠事務所が設置されてからは、育苗時の掘削に伴い土器片や石器が採集されていたが、本格的な調査がなされることもなく、詳細は不明であった。

同事務所が業務を停止した後は、廃家とカヤの生い茂る荒涼とした光景が広がっていた。

90年、岡山県によって（仮）動物愛護センターの建設が計画された。91年に県、御津町の依頼により、御津町教育委員会が遺跡の範囲を確認するために、事務所用地内に重機で試掘穴を設けて、遺物包含層の有無を確認した。県ではその結果に基づき設計を行ったが、管理棟と愛護館の建設部分については発掘調査を行うことになった。建物は遺跡への影響を考慮し、既存建物に被るよう計画された。本来ならば、これらの建物を撤去後に調査を行うのであるが、調査期間を捻出するために、空地部分と建物部分とに分けて実施した。そのため、管理棟部は四分、愛護館部は二分されることになった。

調査は、調査単位ごとに、開始順に1トレンチ、2トレンチ……とし、94年度の調査で1～3トレンチ、96年度の調査はその続番号とし、4～6トレンチを設定した。遺構面は確認することに第1遺構面、第2遺構面……とし、地山面まで掘削した。遺構面が地山面でのみ確認された場合は第1遺構面が最終遺構面となる。また、それぞれの遺構面の覆土を第1層、第2層……とした。

本書では管理棟部は隣接して調査したため1つの調査区としてI区、愛護館部は近接しているとはいえ、水路を挟むため、北側をII区、南側をIII区とした。

## 2 I区の調査

I区は1、2、5、6トレンチである。平面は約18×32mのほぼ長方形である。

調査区の北東角のみ約1m下がっていたが、2、5トレンチの北辺から6トレンチも盛土によって現在の平坦面を形成しているのであって、元来は北東角と同じ高度であった。調査区は北半と南半で段差を成していたのである。この段差を境に上下で様相を異にするので、上下段それぞれに記述する。

I区では、6トレンチ部を除いて、2面の遺構面を検出した。

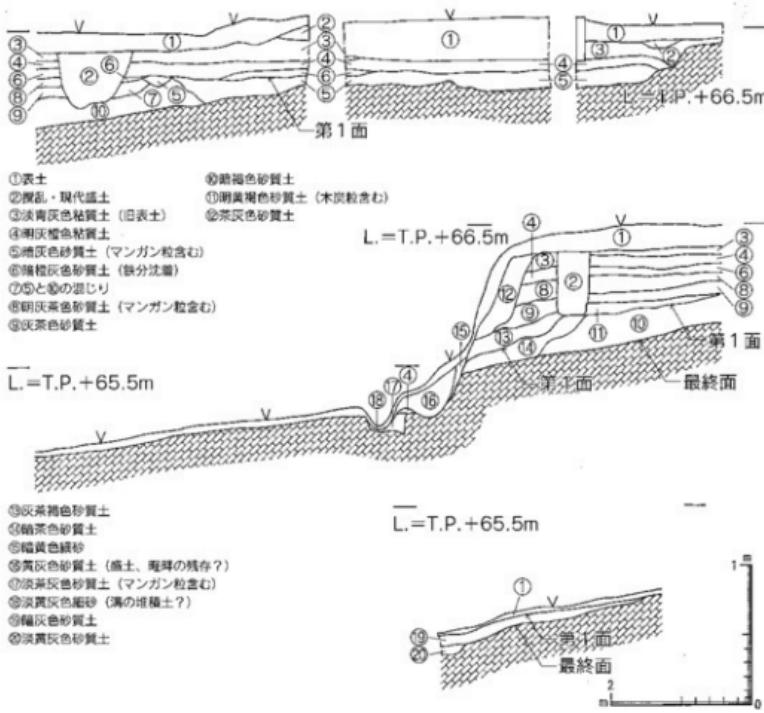


図5 I区東壁土層断面図

## 1) 上段第1層

上段第1層は、調査区南辺を除いて堆積していた茶～褐色系砂質土層である。層厚は厚い所で0.35mほどであるが、後世の影響を受けて様々である。

弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、備前焼、陶器、石器、サスカイト片と多様な遺物が出土した。

1～15は中期後葉～後期中葉の弥生土器である。壺、甕の口縁部である。1の端部は上下に拡張されている。端面には3条の凹線が施されている。胴部外面には煤が付着している。2の端部は上方に折り曲げて拡張されている。3の端部は上方に擴み出されている。4は外傾し、器壁は厚い。端部は方形に肥大している。外面には残存部で2条の断面三角形の突帯が貼り付けられている。5の端部は上下に拡張されている。端面には2条の凹線が残存している。6の

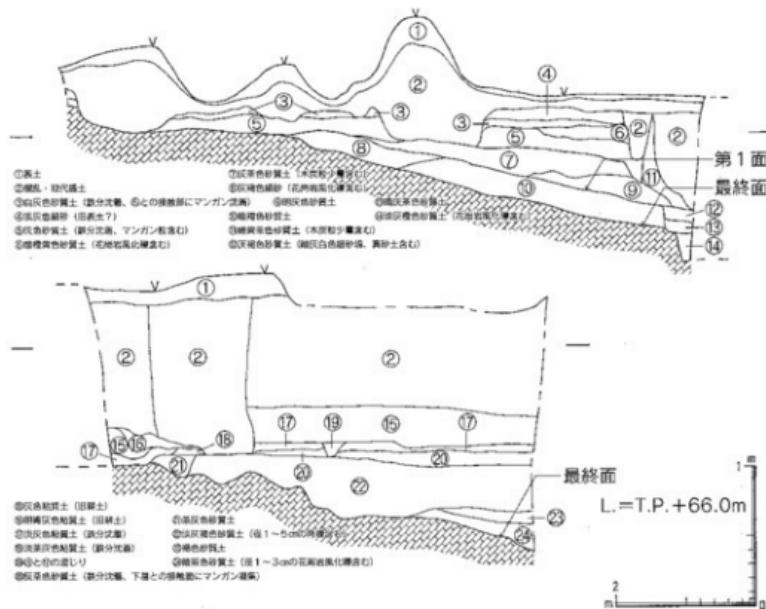


図6 I区西壁土層断面図

端部は上方に拡張されている。7の端部は斜め下方に拡張されている。8の端部は上下に摘み出されている。端面は四線状を呈している。9の端部は肥大している。10の端部は上方に摘み出されている。11~15は高杯である。11~12はボール状を呈する杯部である。端部は左右に拡張されている。13は差し込み技法の脚柱部である。わずかにエンタシス状を呈している。14~15は脚端部である。14の端部は水平に摘み出されている。15の端部は斜め上方に摘み出されている。16~18は弥生土器の口縁部であろうか。16は肥大している。端部は丸く仕上げられている。17の端部はわずかに上下に摘み出されている。方形を呈している。18はわずかに外反している。端部は丸く仕上げられている。19~20は土解器である。19は壺の口縁部である。肥大し、斜め上方に真っ直ぐに立ち上がっている。端部は斜め下方に拡張されている。頸部外面には煤が付着している。20は皿である。胎土は精良である。21~22は須恵器である。壺の口縁部である。21はわずかに外反している。端部は丸く仕上げられている。22はわずかに内湾している。端部は丸く仕上げられている。23~27は罐前焼である。23~25は杯である。23の内面には緑灰色の自然釉が付着している。底面には回転条切り痕が残在している。24の口縁部外面にも白灰色の自然釉が付着している。底面には回転条切り痕が残在している。25の口縁部に

も暗赤茶色の自然釉が付着している。26は壺の口縁部である。外反しながら立ち上がっている。端部は水平に摘み出されている。表面は暗灰色を呈する。鎌倉時代中頃に位置付けられよう。27は擂鉢の口縁部である。室町時代後半に位置付けられよう。28は瓦賈土器である。鉢の口縁部である。端部は方形を呈し、端面は面を成している。29は瓦器の口縁部である。端部は肥大している。30は瓦賈土器である。盤の口縁部である。外面には把手の剥離痕が見られる。端部は方形を呈し、端面は面を成している。内外面に成形時の指頭圧痕が残存している。31は陶器の椀である。口唇部には淡灰緑色の、体部には淡灰黄色の施釉が見られる。

S1はサスカイト製の平基式打製石鎌である。先端は欠損している。1.3gを測る。S2はサスカイト製の打製石錐である。上辺の一部に自然面が残存している。0.6gを測る。

M1は元宝通寶である。

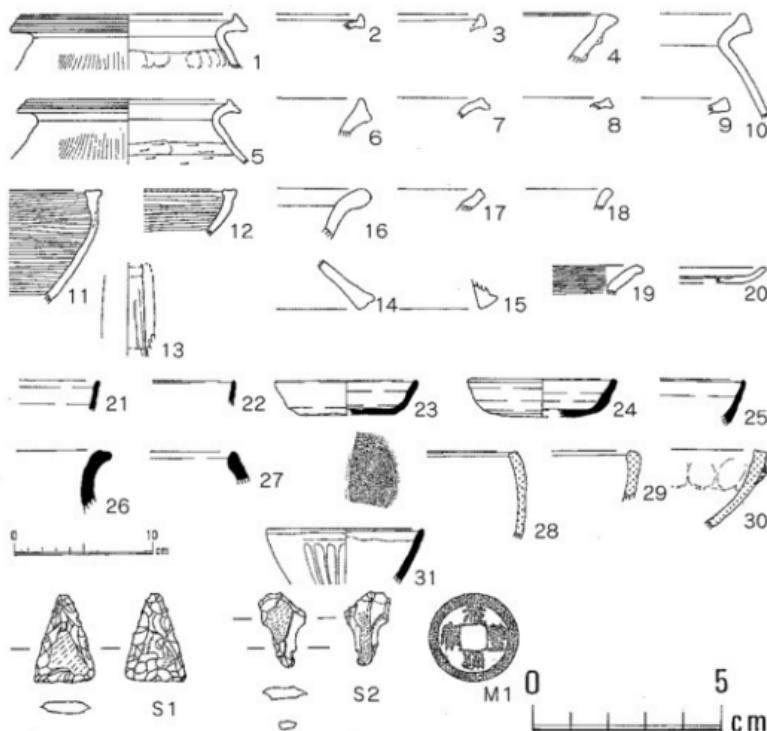


図7 I区上段第1層出土遺物実測図

## 2) 上段第1遺構面

上段第1遺構面は、上段第1層である茶～褐色系砂質土層を除いた面である。検出面は南へ傾斜している。調査区南半は比較的平坦だが<sup>5</sup>、北半は傾斜がきつくなっている。レベルは65.3～66.2mである。

遺構は調査区南半で土壤、ピット、ピット列1列、掘立柱建物1棟を検出した。

土壤は平面不定形で、深さも様々である。埋土からは弥生土器の小片を少量出土したものもあるが、磨滅が著しく、図示できない。

SK101は調査区南東角で検出した。平面隅丸長方形で、長辺約3.0m、短辺2.0m、深さ0.15mである。床面は平坦である。灰色系砂質土の埋土からは弥生土器、土師器、備前焼の小片が出土した。32は土師器の口縁部である。端部はやや肥大し、丸く仕上げられている。33は弥生土器の底部である。底面は突出し、不安定である。床面からは3基のピットを検出した。

ピットは平面梢円形で、径0.4m程度、深さ0.4～0.5mである。埋土からは弥生土器の小片等が1～3点出土した。

34はSP102から出土した。瓦質土器の鉢の口縁部である。体部は内湾している。端部は方形を呈し、端面は面を成している。13世紀後半に位置付けられよう。

ピットは主に調査区西半で検出した。平面ほぼ円形で、径0.15～0.5m、深さ0.1～0.5mである。埋土からは弥生土器の小片が出土したもののがわずかにあるが、磨滅が著しく、図示できない。

SA501は調査区南辺中央で検出した。3基のピットから成るピット列である。ピットは平面円形で、径0.3～0.4m、深さ0.25～0.45mである。西端のピットのSP513の暗灰色砂質土の埋土からは後期の弥生土器片が1点、備前焼の小片が1点、中央のピットのSP512の暗灰色砂質土の埋土からは土師器片が1点出土したが、いずれも図示できない。

SA501の南側にほぼ平行して浅い溝のSD503を検出した。長さ9.5m、幅0.4～0.6m、深さ0.03mである。底面は平坦である。暗灰色砂質土の埋土からは弥生土器の小片が2点出土したが、いずれも磨滅が著しく、図示できない。SA501と何らかの関連があるのだろうか。

SB202は調査区南辺西側で検出した。1×2間の掘立柱建物である。柱間は1.25～1.7mである。柱穴は平面円形で、径0.3～0.5m、深さ0.15～0.5mである。北辺中央の柱穴のSP209の埋土からは弥生土器の小片が1点、南辺中央の柱穴のSP207の埋土からは備前焼の甕の小片が1点出土したが、いずれも図示できない。

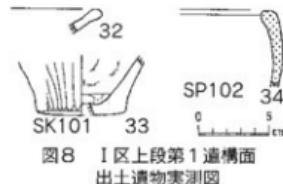


図8 I区上段第1遺構面  
出土遺物実測図

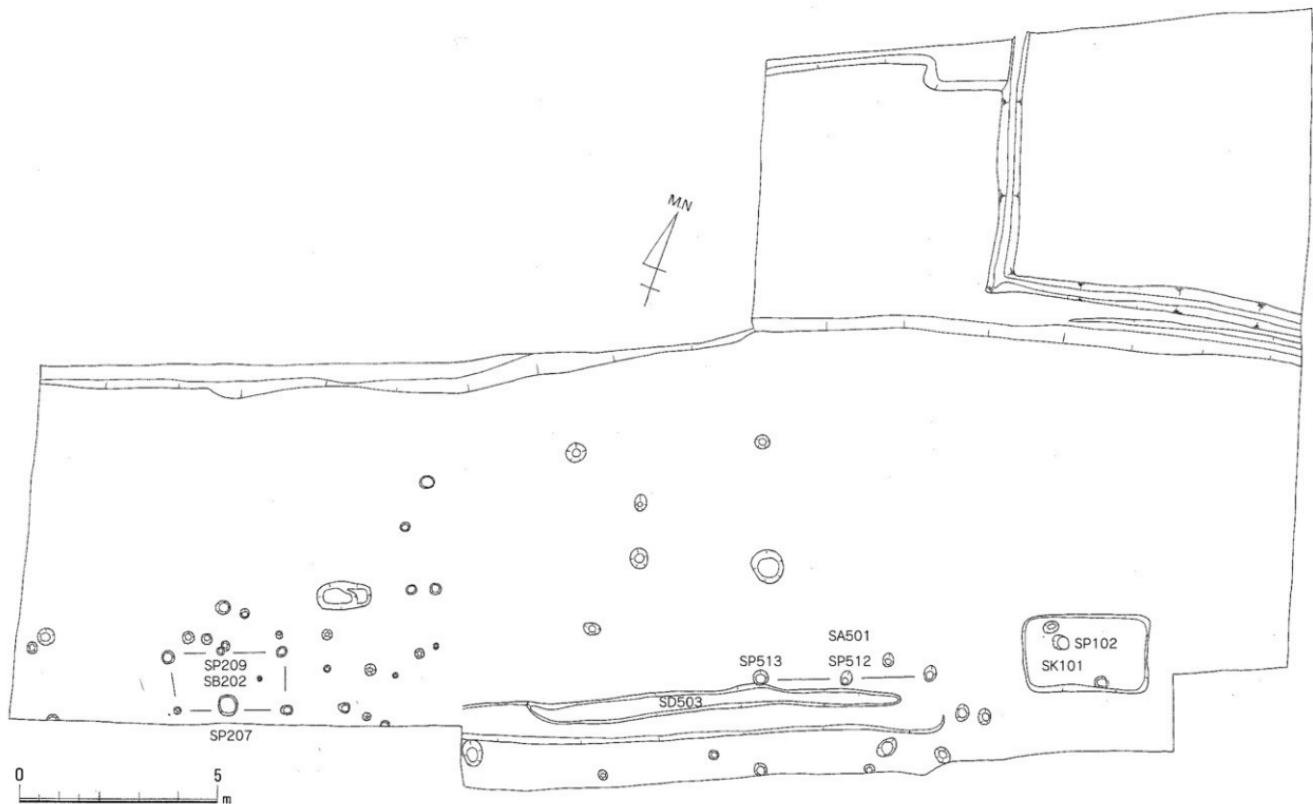


図9 I区第1遺構面平面図

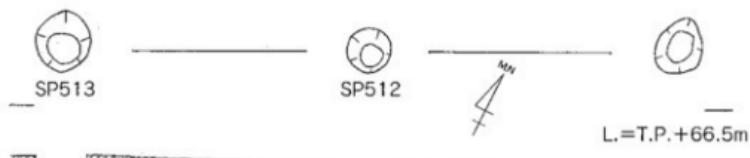


図10 SA501平・断面図

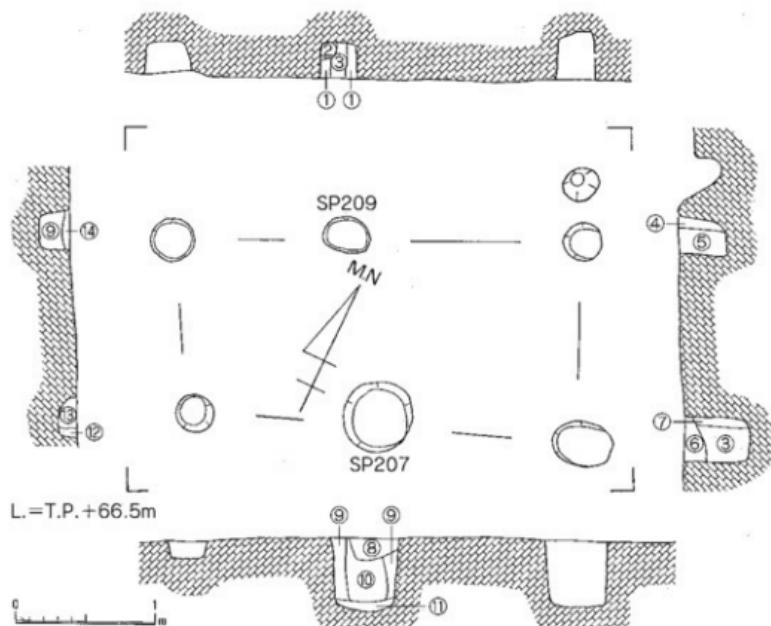


図11 SB202平・断・土層断面図

- |                             |                           |                  |
|-----------------------------|---------------------------|------------------|
| ①灰色砂質土（マンガン粒含む）             | ⑤灰色砂質土（マンガン粒、角礫多く含む、鉄分沈殿） | ⑨茶灰色砂質土          |
| ②緑色砂質土                      | ⑥淡灰黄色砂質土                  | ⑩緑灰色粗砂           |
| ③灰色砂質土（マンガン粒、灰褐色砂質<br>土壤含む） | ⑦灰色砂質土（淡灰黄色砂質土含む）         | ⑪淡灰色砂質土（マンガン粒含む） |
| ④淡黄灰色砂質土                    | ⑧灰色砂質土（木炭粒、マンガン粒含む、鉄分沈殿）  | ⑫褐灰色砂質土（マンガン粒含む） |

### 3) 上段第2層

上段第2層は、調査区北半に堆積していた暗褐色砂質土層である。層厚は0.15~0.25mである。弥生土器を主に、土師器、須恵器の小片が数点出土した。

35~39は中期後葉～後期後葉の弥生土器である。壺、甕の口縁部である。35の端部は斜め下方に拡張されている。端面には箒状工具を押し付けた綾杉文が施されている。36の端部は斜め上方に折り曲げて拡張されている。端面には2条の凹線が残存している。37は外反しながら大きく開いている。端部は水平に拡張されている。端面には串状工具による格子目文が描かれている。38の端部は上方に摘み出されている。39の端部はやや肥大し、端面は面を成している。40は弥生土器であろうか。口唇部は押圧などによって、丸く仕上げられている。41は後期中葉の弥生土器である。鉢の口縁部である。端部は肥大している。端面には2条の凹線が施されている。42~45は中期中葉～後期前葉の弥生土器である。高杯である。42はボール状を呈する杯部である。端部は左右に拡張されている。43~45は脚端部である。43の端部は水平に摘み出されている。端面に3条、外面に1条の凹線状のものが見られる。44の端部も水平に摘み出されている。刺突文が施されている。45の端部も水平に摘み出されている。外面には4条1組の多条凹線文が施されている。46は後期前葉の弥生土器である。器台の脚端部である。端部はわずかに水平に摘み出されている。外面には残存部で4条の凹線が施されている。47は古墳時代前期の土師器の壺である。胴部は丸い。頸部は屈曲し、口縁部はやや外反しながら立ち上がっている。口唇部は押圧などによって、丸く仕上げられている。

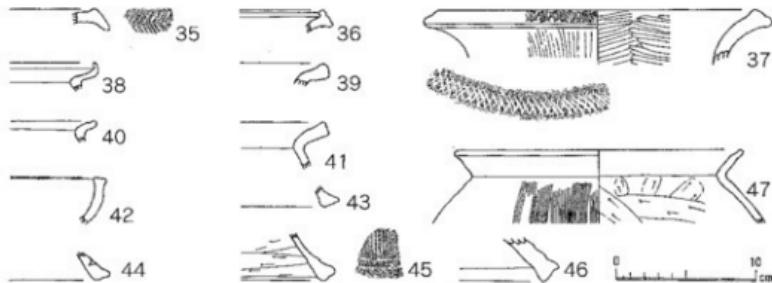


図12 I区上段第2層出土遺物実測図

### 4) 上段第2(最終) 遺構面

上段第2遺構面は、第2層である暗褐色砂質土層を除いた面で、地山面である。検出面は北



図13 1区第2(最終)道路面平面図

へ傾斜している。レベルは65.4~66.0mである。

遺構は主に調査区北半で土塹、ピット、ピット列1列、掘立柱建物1棟、竪穴建物1棟を検出した。

土壤は平面不定形で、深さも様々である。埋土からは弥生土器片を少量出土したものもあるが、磨滅が著しく、図示できない。

ピットは平面ほぼ円形で、径0.2~0.5m、深さ0.15~0.6mである。埋土からは弥生土器の小片が出土したものがある。SP214は調査区西辺中央で検出した。平面楕円形で、長径0.4m、短径0.25m、深さ0.45mである。黒灰色粘質土の埋土からは弥生土器片が出土した。48は台付壺の台部であろう。台部は外反しながら開いている。端部はやや肥大している。表面磨滅が著しい。49は甌の口縁部である。端部は上方にわずかに摘み出されている。端面は面を成している。

SA502は調査区南辺中央で検出した。4基のピットから成るピット列である。ピットは平面円形で、径0.3~0.4m、深さ0.3~0.5mである。西から2基目のピットのSP514の暗灰色砂質土の埋土からは後期の弥生土器片が1点出土したが、磨滅が著しく、図示できない。



図14 I区上段第2遺構面  
出土遺物実測図

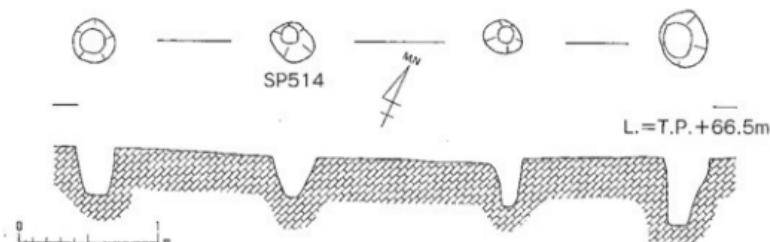


図15 SA502平・断面図

SB507は調査区南辺中央で検出した。1×2間の掘立柱建物である。柱間は1.6~2.2mである。柱穴は平面ほぼ円形で、径0.25~0.45m、深さ0.2~0.6mである。灰色系砂質土の柱穴の埋土からは遺物は出土しなかった。SB507の軸線と東側のSA502はほぼ並行する。何らかの関連があるのだろうか。

第1遺構面で検出したSA501、SA502とSB507の検出地点は近接している。構築時期が明確ではないが、覆土が薄いことからもこれらは同時期あるいは一連のものとして考える必要もあるだろう。

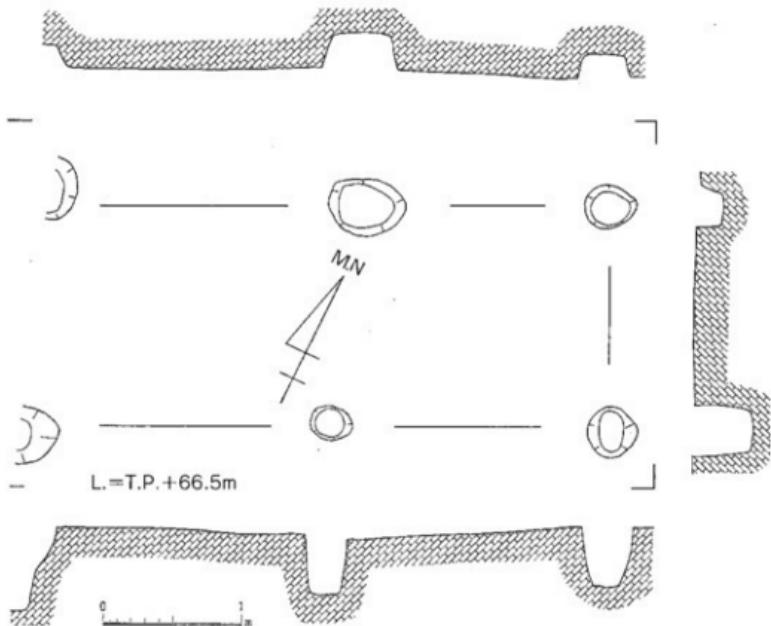


図16 SB507平・断面図

SB101は調査区北東角で検出した。平面円形の堅穴建物である。検出したのはほぼ南半部である。北半部は後世に削平され、柱穴のみ残存していた。堅穴は径3.1m、深さ0.3mである。床面はわずかに北へ傾斜している。

埋土からは中期後葉～後期の弥生土器片と磨製石包丁が出土した。50～51は壺の口縁部である。50の端部は水平に拡張されている。端面には4条の凹線が施されている。51も同様である。52は壺の上半部である。胴部は丸く、口縁端部は上方に摘み出されている。外面は2次焼成を受けて、明茶色を呈している。53～54は壺、甕の胴部下半部である。53の底面は楕円形に歪んでいる。54の器壁は厚い。外面には炭化物が付着している。55は高杯の杯部である。口縁部は押圧によってやや外反している。口唇部は丸く仕上げられている。

S3は磨製石包丁である。原石の節理に沿って破損したのであろう。上下が並行に欠損している。元の平面は長円形であろう。全体に良く研磨されている。穿孔は両側から施されている。37.1gを測る。頁岩製である。

床面からは壁体溝、中央穴、5基の柱穴を検出した。壁体溝は幅0.15m程度、深さ0.1mである。埋土からは遺物は出土しなかった。中央穴のSP106は平面円形で、径0.5m、深さ0.25m

である。2段に掘り込まれ、最深部には厚さ0.1mの白茶灰色粗砂層が見られた。埋土からは弥生土器が出土した。61は後期前葉の甕の上半部である。短い頸部は斜め上方に立ち上がり、口縁部は屈曲して開いている。口縁端部は上下に拡張され、端面には4条の凹線が施されている。柱穴は5基検出した。平面はほぼ円形で、径0.25~0.45m、深さ0.2~0.5mである。埋土からは遺物は出土しなかった。

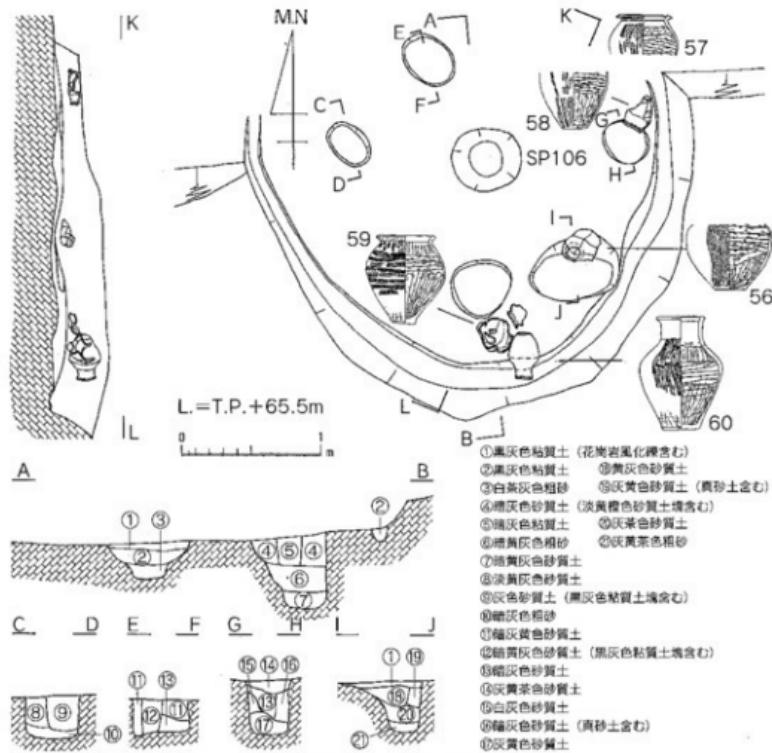


図17 SB101平・断・土層断面

SB101の床面、床面真上でほぼ完形の弥生土器が4点出土した。56は後期前葉の壺の胴部である。最大径は上半にあるやや偏平な球形である。肩部には範状工具による綾杉状の刺突文が施されている。57・58は同一個体である。後期前葉の甕である。口縁端部は水平に拡張されている。底面は上げ底である。59は後期前葉の甕である。口縁端部は方形に肥大し、端面は面を成している。胴部外面上半には粗い横方向の刷目調整が疎らに施されている。底部は突出している。胴部外面中央には煤が付着し、下半には2次焼成を受けての表面剥離が見られる。

60は後期前葉の壺である。器壁は厚く、重い。口縁端部はやや拡張され、端面は面を成している。頭部はほぼ直立している。肩部外面には粗い刷目調整が粗く施されている。

SB101の廃絶の時期は弥生時代後期前葉に位置付けられよう。

SB101は床面から完形の弥生土器が4点出土した。SB101の床面に被熱による赤変や埋土に

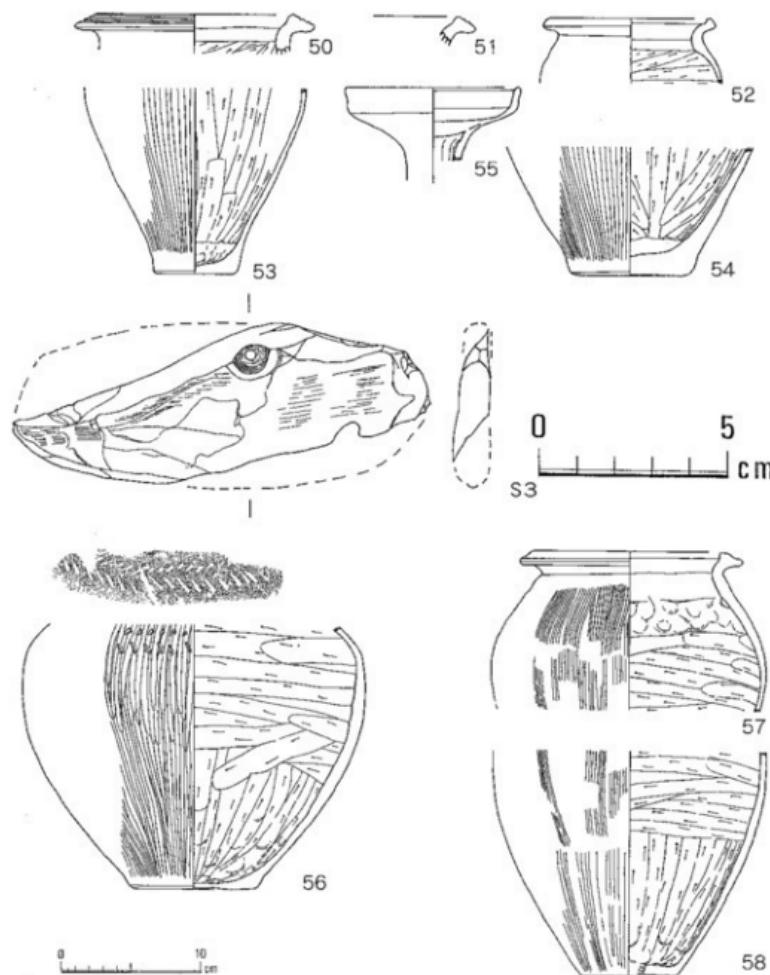


図18 SB101出土遺物実測図（1）

焼土や炭化物の混入も見られなかった。また、出土した土器にも、59に煮沸使用によるものと考えられる2次焼成が見られる他には、2次焼成等の被熱をうかがわせるものはなかった。これらより、床面の土器は火災等の突発的な事情によるものではなく、人為的な理由により放棄されたのであろう。SB101の廃棄に際して行われた何らの祭祀に伴い供獻された土器と考えられる。

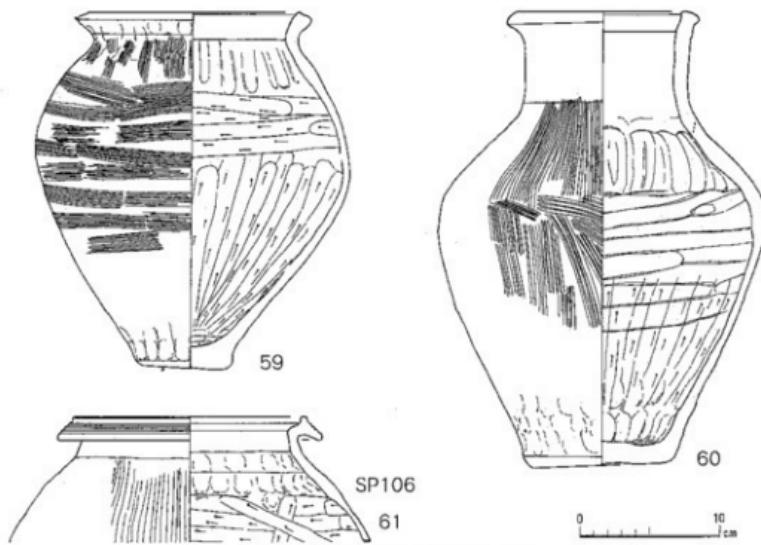


図19 SB101出土遺物実測図 (2)

## 5) 下段第1層

下段第1層は、調査区東半、1トレンチ下段部に堆積していた暗黄茶色砂質土層を主とする。層厚は既設の水路より西側で0.45m、東側は削平されていて、0.1mである。

中期中葉～後期中葉の弥生土器と須恵器の小片1点が出土した。図示できたのは西側から出土したものである。

62～65は壺、甕の口縁部である。62の頸部は外反しながら開いている。端部は水平に拡張されている。63の端部は上方に摘み出されている。頸部に残存部で1ヶ所の焼成前穿孔が施されている。64の口縁部は厚く、端部は上下に拡張されている。端面には2～3条の凹線が施されている。65の端部は押圧によって肥大し、端面は面を成している。浅い刻み目が施されている。66～67は高杯である。66はポール状の杯部である。端部はやや拡張されている。67は脚

端部である。端部は水平に擴み出されている。68～70は器台である。68は口縁部である。端部は斜め下方に拡張されている。端面は面を成している。浅い串描鋸齒文が施されている。69は完形に復元できた。実測時は別個体と考えられたが、後に接合できた。口縁端部は上下に拡張されている。脚部には復元で4ヶ所の隅丸長方形の透かし穴が、焼成前に穿かれている。脚端部は内側に拡張されている。口縁端面には6条、透かし穴の上には5条、下には最大11条の凹線が施されている。内面には接合痕や成形痕が明瞭に残存している。70は脚端部である。残存部外面には上方から鋸齒文、1条の凹線、2条の凹線が施されている。71は須恵器の椀の口縁部である。

## 6) 下段第1遺構面

下段第1遺構面は、下段第1層である暗黄茶色砂質土層を除いた面である。1トレンチの下段部である。検出面は北へ傾斜している。レベルは64.5～65.1mである。遺構は検出されなかつた。

## 7) 下段第2層

下段第2層は、調査区北半に堆積していた暗褐色系砂質土層である。層厚は東側（1トレンチ）で0.1m、西側（6トレンチ）で0.2mである。

東側では後期の弥生土器片が4点出土したのみだが、西側では中期中葉～後期中葉の弥生土器や石器が出土した。図示できたのは後者である。

72～85は壺、甕の口縁部である。72の端部はやや肥大している。口唇部には細い刻み目が施されている。外面から口縁部内面にかけて煤が付着している。73の端部はわずかに下方に突出されている。端面は面を成している。74の端部は斜め上方に擴み出されている。75の端部は上下に拡張されている。76の端部は水平に拡張されている。焼成は悪く、やや軟質である。77は長頸壺である。端部は上下に拡張されている。端面には3条の凹線が施されている。頸部は緩やかに外反している。残存部で5条の凹線が施されている。78の頸部は屈曲し、端部は斜め上方に折り曲げて拡張されている。端面には3条の凹線が施されている。外面には煤が付着している。79の端部は上方に擴み出されている。内面には明赤茶色の部分が見られる。丹塗りであろうか。80の端部は斜め上方に折り曲げて拡張されている。端面には2条の凹線が施されている。外面には赤変している部分が見られる。2次焼成を受けたのであろうか。81の端部も斜め上方に折り曲げて拡張されている。端面には1条の凹線が残存している。82は大型の甕である。端部は上下に拡張され、端面には3条の凹線が施されている。頸部には笠状工具による刻み目状の突帯を貼り付けている。83の端部は斜め下方に拡張されている。84の端部は斜め上

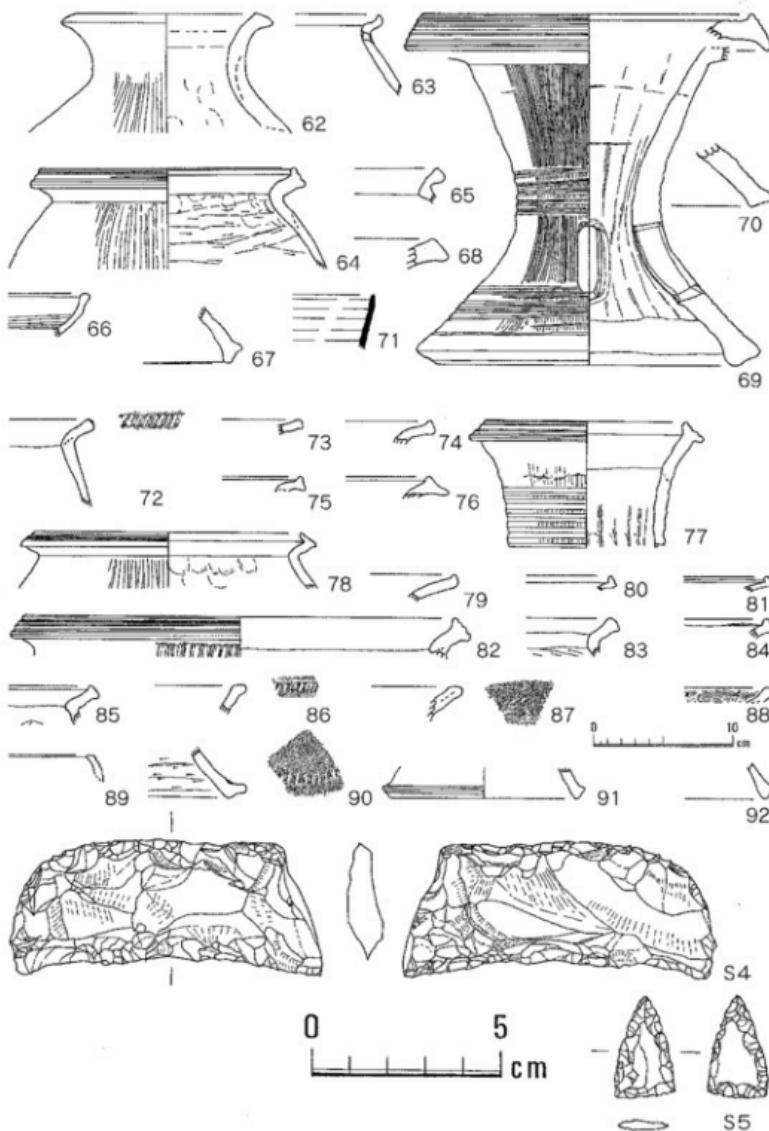


図20 I区下段出土遺物実測図

方に摘み出されている。端面には2条の凹線が施されている。85の頸部は屈曲し、端部は上下に拡張されている。端面には3条の浅い凹線状のものが施されている。86～87は鉢の口縁部であろうか。86の端部は外側へ水平に拡張されている。口唇部には刻み目が施されている。87の端部はやや肥大している。外面には籠状工具による押型文が施されている。88は口縁部である。端部は方形で、面を成している。89～92は高杯である。89は杯部の内湾する口縁部である。端部は内側へ水平に拡張されている。外面には3条の凹線が施されている。表面は明茶色を呈している。丹塗りであろうか。90～92は脚端部である。90の端部は水平に拡張されている。外面には籠状工具による刻み目が施されている。91の端部は水平に摘み出されている。92の端部も水平に摘み出されている。残存部上端に穿孔が見られる。孔の下に浅い刻み目が施されている。

S4は打製石包丁である。抉りは無く、刀部はやや内湾している。背部は外湾している。一端は欠損している。36.9gを測る。サスカイト製である。S5は平基式打製石鎌である。1.4gを測る。サスカイト製である。

## 8) 下段第2(最終) 遺構面

下段第2遺構面は、第2層である暗褐色系砂質土層を除いた面で、地山面である。検出面は北東へ傾斜している。レベルは64.4～65.2mである。

遺構は検出面の全面で土壤、ピットを検出した。

土壤は平面不定形で、深さも様々である。埋土からは弥生土器片が少量出土したものもあるが、図示できない。

ピットは平面凹形で、径0.1～0.4m、深さ0.15～0.65mである。埋土からは弥生土器片、サスカイト片が少量出土したものがある。SP525は調査区北西角で検出した。平面凹形で径0.4m、深さ0.5mである。褐灰色砂質土の埋土からは弥生土器片が出土した。93は後期終末期の甕の口縁部である。頸部は屈曲している。端部は上方に拡張されているが、欠損している。端面には凹線が1条残存している。SP527も調査区北西角で検出した。平面凹形で、径0.4m、深さ0.35mである。淡茶灰色砂質土の埋土からは弥生土器片が出土した。94は中期中葉の壺の胴部上半部である。外面には残存部で3条の刻み目突帯を貼り付け、その下に櫛描多条文、1条の串描波状文が施されている。95は高杯の脚端部である。端部は方形を成している。SP530は調査区北辺中央で検出した。平面凹形で、径0.4m、深さ0.65mである。灰褐色砂質土の埋土からは弥生土器片、サスカイト片が出土した。96は壺の底部である。



図21 I区下段第2造構面出土遺物実測図

### 3 II区の調査

II区は3トレンチである。平面は約7×約20mの長五角形である。

全体的に厚さ0.6mほどの盛土によって現在の平坦面を形成していた。調査区北西部は北へ大きく落ち込んでいる。2面の造構面を検出した。

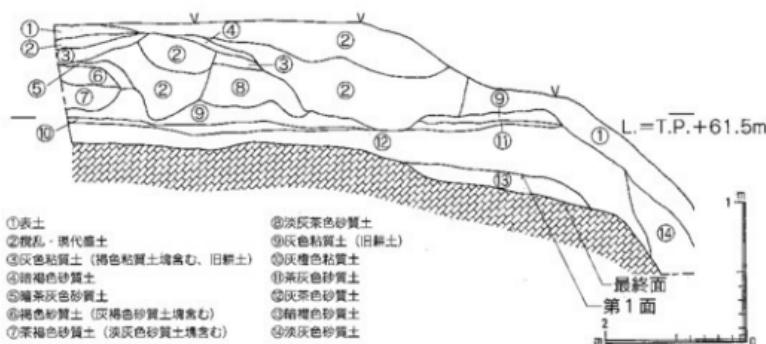


図22 II区西壁土層断面図

### 1) 第1層

第1層は調査区全面に堆積していた灰茶色砂質土層である。層厚は0.1mほどであるが、北側は地表面の落ち込みに対して平坦面を形成するために、0.4mほどに厚くなっていた。

弥生土器、土師器を主に、須恵器、瓦器、瓦質土器、備前焼、青磁、サスカイトが少量出土した。

97～109は中期中葉～後期中葉の弥生土器である。97～101は壺、甕の口縁部である。97の頭部は屈曲し、端部は方形を成している。98の端部はやや肥大している。口唇部には刻み目が施されている。99の端部は折り曲げて斜め上方に拡張されている。端面には3条の凹線が施されている。100の端部は水平に摘み出されている。101の頭部は屈曲し、端部はやや肥大している。102は鉢の口縁部であろうか。端部は外側へ水平に拡張されている。端面には2条の凹線が施されている。103は椀の口縁部であろうか。端部は肥大している。104～107は高杯で

ある。104～105は杯部である。104の口縁部はやや外反し、端部は丸く仕上げられている。105も104と同様の杯部の口縁部である。106～107は脚端部である。106の端部はわずかに摘み出されている。107の端部には断面三角形の粘土紐を貼り付けて拡張されている。108は器台の脚端部であろうか。端部はわずかに肥大している。外面には残存部で3条の浅い凹線状のものが残存している。109は脚端部である。端部はわずかに肥大し方形を呈している。端面は面を成している。110は備前焼の甕の口縁部である。頸部は外反している。端部は外面に折り返して、玉縁状を成している。14世紀中頃に位置付けられよう。

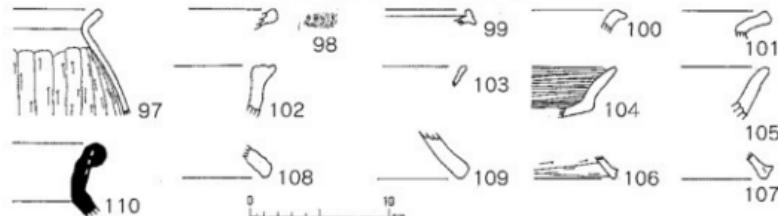


図23 II区第1層出土遺物実測図

## 2) 第1遺構面

第1遺構面は、第1層である灰茶色砂質土層を除いた面である。検出面は南半はほぼ平坦だが、北半は北西へ傾斜していた。レベルは南半は61.3m程度、北西辺は60.7mである。

遺構は上塙、ピット、掘立柱建物1棟を検出した。

土壤は平面不定形で、深さも様々である。SK304は調査区南角で検出した。灰褐色砂質土の埋土からは弥生土器片が1点出土したが、摩滅が著しく、図示できない。他の土壤からは遺物は出土しなかった。

ピットは調査区全面で検出した。平面ほぼ円形で、径0.15～0.4m、深さ0.1～0.5mである。埋土からは弥生土器の小片、サスカイト片が出土したものがある。SP321は調査区北東部で検出した。南辺は他のピットと切り合っていた。平面円形で、径0.4m、深さ0.5mである。灰褐色砂質土の埋土からは弥生土器片が5点出土した。111は後期前葉の高杯の脚端部である。端部は玉縁状に肥大している。

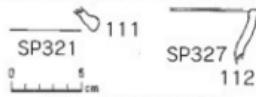


図24 II区第1遺構面  
出土遺物実測図

SB303は調査区北東部中央で検出した。2×2間の掘立柱建物である。柱間は0.9～1.5mである。柱穴は平面円形で、径0.25m程度、深さ0.1～0.35mである。南東角の柱穴、SP327の埋土からは弥生土器片が2点出土した。112は口縁部である。鉢の口縁部であろうか。内湾しながら立ち上がりっている。端部は外側へ水平に摘み出されている。

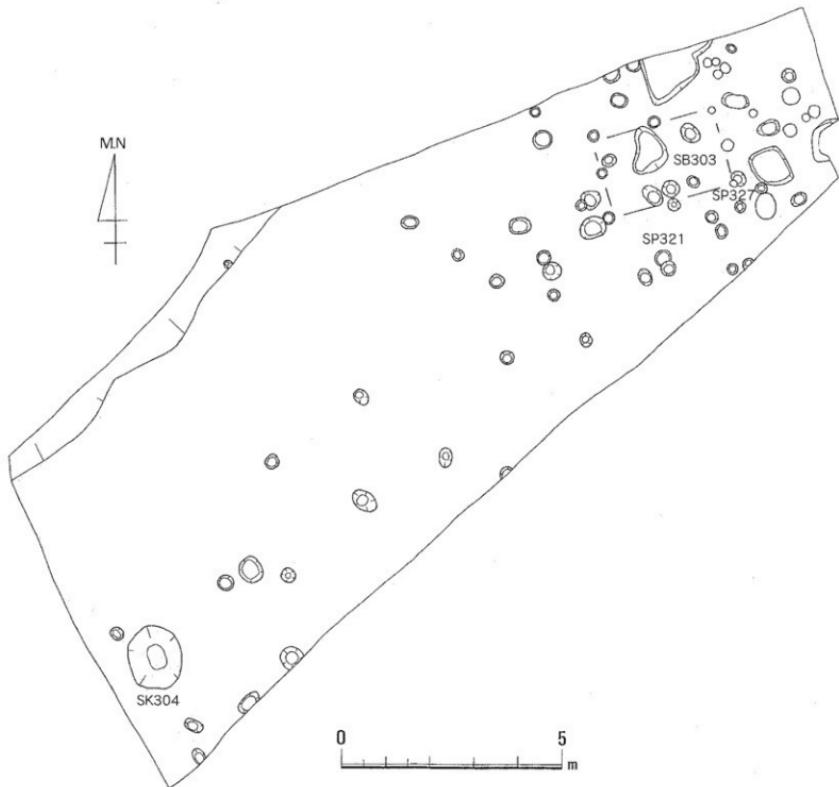


图25 II区第1造横面平面图

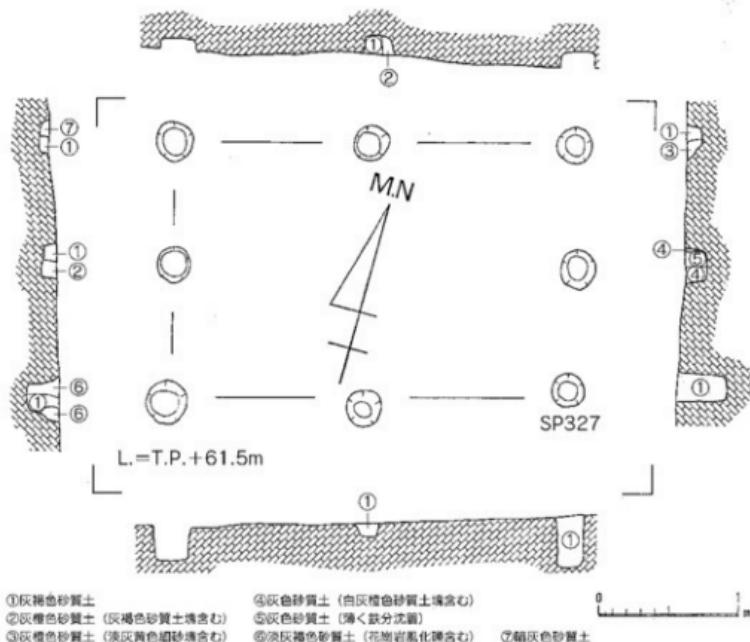


図26 SB303平・断・土層断面図

### 3) 第2層

第2層は調査区北西部に堆積していた暗褐色砂質土層である。層厚は0.1m程度である。弥生土器とサスカイト片5点が出土した。

113は後期前葉の甕の口縁部である。頭部は屈曲し、端部は上下に拡張されている。端面には2条の浅い凹線状のものが施されている。114は後期前葉の器台の口縁部である。端部は上下に拡張されている。端面には5条の凹線が施されている。115は中期後葉の高杯の脚部である。端部は水平に摘み出されている。細い三角形透かしが施されているが、貫通していない。

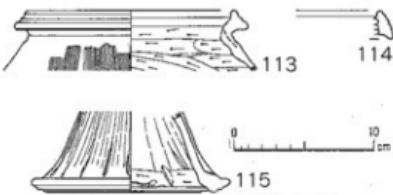


図27 II区第2層出土遺物実測図

## 4) 第2(最終)遺構面

第2遺構面は、第2層である暗褐色砂質土層を除いた面で、地山面である。検出面は北へ緩やかに傾斜している。レベルは60.6~61.2mである。

遺構は土壙3基、ピット6基、竪穴建物1棟を検出した。第2層は調査区北西部にのみ堆積していた。第1遺構面はその部分以外は地山面に形成されていた。地山面に形成され、第1遺構面の時期に属するものとして取り扱った遺構の中には、第2遺構面の時期に属するものもあるかもしれないが、遺物が出土した遺構は少なく、また、出土していても小片、少量のため、遺構の時期の分離はできない。

土壙は平面不定形で、深さも様々である。SK305は竪穴建物SB304と切り合って検出した。平面は不定形な長円形で、長径1.5m、短径0.5m、深さ0.1mである。暗褐色砂質土の埋土からは弥生土器片が8点出土した。116は甕の底部である。外面表面は剥離している。底部は突出し、底面は丸く、不安定である。SK306は調査区西角で検出した。平面隅丸方形で、一辺1.4m、深さ0.15mである。北角はさらに径0.4m、深さ0.3mのピット状に落ち込んでいた。暗褐色砂質土の埋土からは弥生土器片が1点出土したが、磨滅が著しく、図示できない。

ピットはSB304の南東で6基検出した。平面円形で、径0.4m、深さ0.15~0.35mである。遺物が出土したものはなかった。

SB304は調査区北辺西側で検出した。平面円形の竪穴建物である。検出したのは、ほぼ南半分で、北半分は後世に削平されていた。竪穴は径6.0m、深さ0.4mである。床面は平坦である。

埋土からは中期後葉～後期の弥生土器、サヌカイトと須恵器が1点出土した。117は甕である。口縁端部はわずかに上方に摘み出されている。胴部内面には炭化物が付着している。外面には煤が付着し、胴部は2次焼成を受けて変色している。118は甕である。頸部は屈曲し、端部は押圧などでによって丸く仕上げられている。119は甕である。器壁はやや厚い。口縁端部は上下に拡張されている。端面には2条の凹線が残存している。120は甕の口縁部である。端部はやや肥大している。端面は面を成している。121は器台の口縁部である。受部から大きく外反して、下方に拡張され、上方にも摘み出されている。端面には二重竹管文が2段に亘り施されている。122は台付鉢である。深いコップ状の体部である。内傾する口縁部外面には4条の凹線が施されている。肩部外面には煤が付着し、下半には2次焼成による表面剥離が見られる。内面下半には炭化物が付着している。123は須恵器の口縁部である。須恵器が1点だけ出土しているが、他の出土遺物と時期差がある。混入と考えて良いであろう。

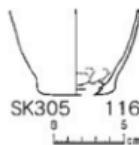


図28 II区第2  
遺構面出土遺物  
実測図

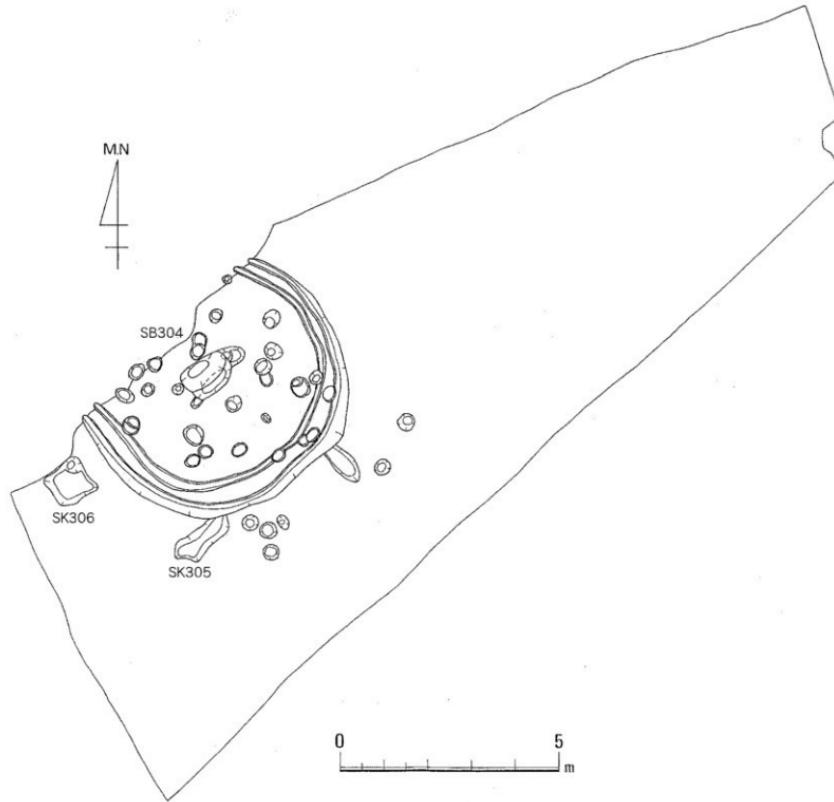


図29 II区第2(最終)遺構面平面図

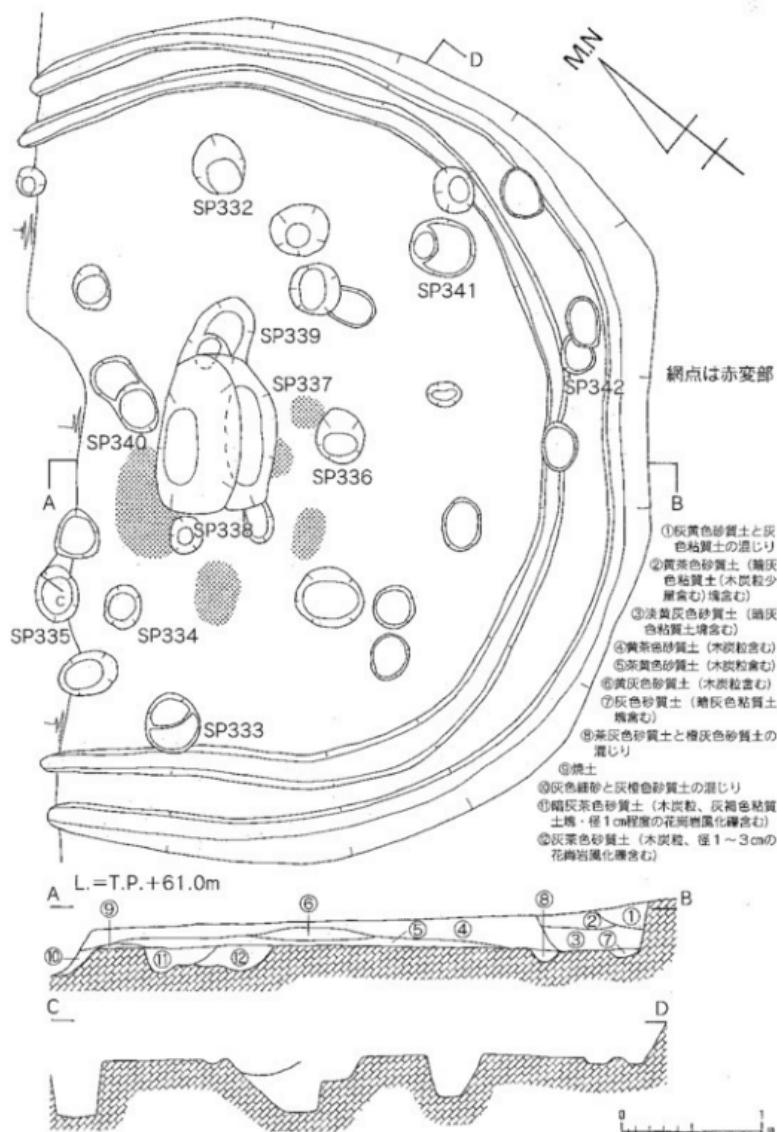


図30 SB304平・断・土層断面図

床面からは壁体溝、中央穴、柱穴を検出した。壁体溝は2条を検出した。内側のものは、幅0.15~0.3m、深さ0.1mである。埋土からはサスカイト片が1点出土した。外側のものは、幅0.15m、深さ0.05~0.1mである。遺物は出土しなかった。中央穴は切り合った3基を検出した。SP338は平面長円形で、長径1.15m、短径0.6m、深さ0.4mである。木炭粒を含む暗灰茶色砂質土の埋土からは弥生時代後期の土器片が3点出土した。SP337は北辺をSP338と切り合っていた。平面長円形で、長径1.05m、深さ0.35mである。木炭粒を含む灰茶色砂質土の埋土からは弥生時代後期の土器片が1点出土した。SP339は西辺をSP337・338と切り合っていた。平面長円形で、短径0.4m、深さ0.35mである。底面は2段に掘り込まれていた。木炭粒を含む淡灰褐色砂質土の埋土からは弥生時代後期の土器片が1点出土した。柱穴は平面ほぼ円形で、径0.25~0.5mである。埋土等から検討したが、まとまりはつかめなかった。SP332は平面橢円形で、長径0.45m、短径0.35m、深さ0.55mである。木炭粒を含む淡灰橙色砂質土の埋土からは弥生土器片が2点出土した。SP341は平面円形で、径0.4m、深さ0.4mである。底面は2段に掘り込まれていた。木炭粒を含む淡茶灰色砂質土の埋土からは弥生時代後期の土器片が1点とサスカイト片が1点出土した。SP342は平面凹形で、径0.25m、深さ0.1mである。木炭粒を含む暗灰色砂質土の埋土からは弥生土器片が2点出土した。125は底部である。器壁は厚い。底面はやや突出していて不安定である。SP336は平面橢円形で、長径0.4m、短径0.35m、深さ0.2mである。埋土からは弥生土器片が2点出土した。124は後期後葉の飾られた高杯の杯部である。口縁部と体部の境は突帯状に拡張されている。体部外面には残存部で3条の凹線が施されている。SP340は平面長円形で、長径0.6m、短径0.3m、深さ0.3mである。底面は2段に掘り込まれていた。灰茶色砂質土の埋土からはS6の打製石鐵の未製品が1点出土した。1.0gを測る。

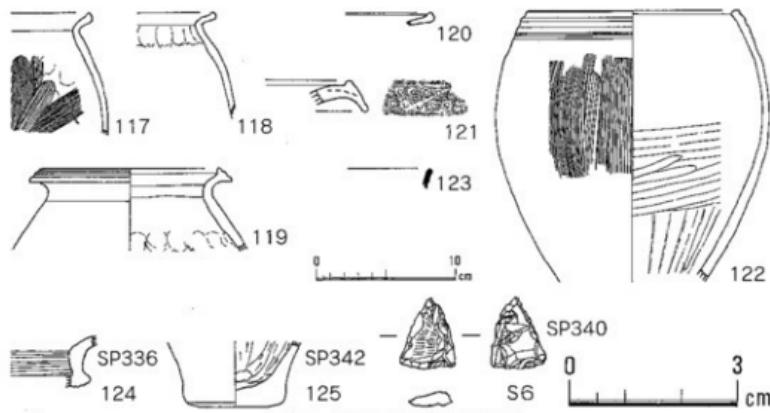


図31 SB304出土遺物実測図

サスカイト製である。SP335は平面楕円形で、長径0.4m、短径0.3m、深さ0.6mである。灰茶色砂質土の理土からは弥生土器片が1点出土した。SP334は平面楕円形で、長径0.3m、短径0.25m、深さ0.5mである。埋土からは弥生時代後期の土器片が8点出土した。SP333は平面円形で径0.4m、深さ0.4mである。底面は2段に掘り込まれていた。木炭粒を含む淡茶灰色砂質土の埋土からは弥生時代後期の土器片が7点出土した。

SB304は壁体溝や中央穴の様相から、SP337を中心穴として内側の壁体溝を用いる径5.1mの円形竪穴建物から、SP338を中心穴として外側の壁体溝を用いる径6.0mの円形竪穴建物へ拡張されている。さらに中央穴SP339の存在や柱穴の多さから、どちらかの時期に建て替えられたのであろう。中央穴の埋土に木炭粒を含み、柱穴の埋土にも木炭粒を含むものがある。中央穴の周辺の床面に赤変部も見られる。また、床面からは遺物は出土しなかった。これらのことより、SB304は火災に遇ったのではなく、廃棄時に焼却処分されたのであろう。

最終的な廃絶の時期は弥生時代後期後葉に位置付けられよう。

## 4 III区の調査

III区は4トレンチである。平面は約11×約19mの台形である。

全体的に厚さ0.3mほどの盛土によって平坦面を形成し、倉庫が建てられていた。調査区北辺は北へ大きく落ち込んでいた。II区との間には水路が存在し、調査時には農業用水路として機能していたため撤去できず、掘削土の排出や雨水の排水に悩まされた。3面の遺構面を検出した。

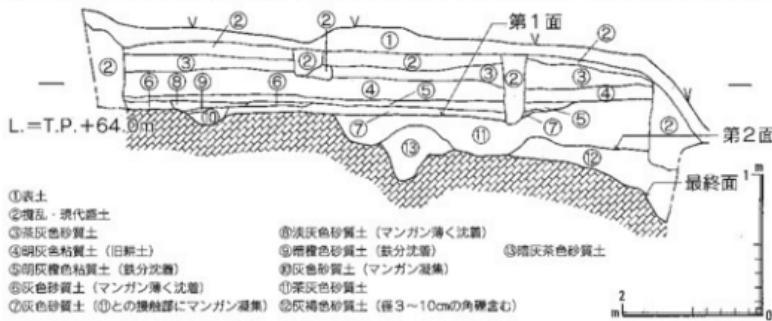


図32 III区西壁土層断面図

### 1) 第1層

第1層は調査区全面に堆積していた灰色砂質土層である。層厚は0.1mほどである。

弥生土器を主に、土師器、須恵器、備前焼、青磁、サスカイト、銅鏡と多様な遺物が出土し

たが、小片が多い。

126～132は中期後葉～後期中葉の弥生土器である。126～130は壺、甕の口縁部である。126の端部は斜め下方に抵張され、上方にも摘み出されている。表面磨滅のため、調整等は不明である。127は緩やかに外反している。端部は丸く仕上げられ、外面には残存部で3条の凹線が施されている。128の端部は上方に摘み出されている。端面には1条の凹線が施されている。129の端部は水平に摘み出されている。130の端部は上下にわずかに摘み出されている。131～132は高杯である。131は杯部の口縁部である。端部は左右に摘み出されている。端面は面を成している。132は脚柱部である。133は土師器である。椀の底部である。断面半円形の低い高台が貼り付けられている。134～140は備前焼の杯である。135は底部である。底面には回転糸切り痕が残存している。窯着物があり、不安定である。134と135は同一個体の可能性がある。136の口縁部はわずかに外反している。口唇部には薄く黒色の自然釉が付着している。137の口縁部は外反し、比較的開いている。口唇部には暗灰緑色の自然釉が付着している。138の口縁部はわずかに外反している。口唇部には灰白色の自然釉が付着している。139の口縁部はわずかに内弯している。底面には回転糸切り痕が残存している。140の口縁部はわずかに内弯している。口唇部には自然釉が付着し、光沢をもっている。

M2は至道元寶である。磨滅し、鋳造が著しい。

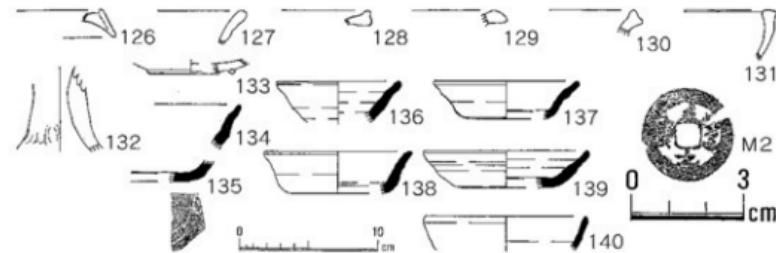


図33 Ⅲ区第1層出土遺物実測図

## 2) 第1遺構面

第1遺構面は、第1層である灰色砂質土層を除いた面である。検出面は北へ傾斜し、北辺はさらに落ち込んでいた。レベルは63.6～63.8mである。

遺構はピット7基と竪穴建物3棟を検出した。

ピットは主に調査区南東角で検出した。平面円形で、径0.3～0.4m、深さ0.2～0.4mである。SP402はSB403の南側で検出した。平面橢円形で、長径0.3m、短径0.2m、深さ0.1mである。埋土からは弥生時代後期の土器片が2点出土したが、磨滅が著しく、図示できない。

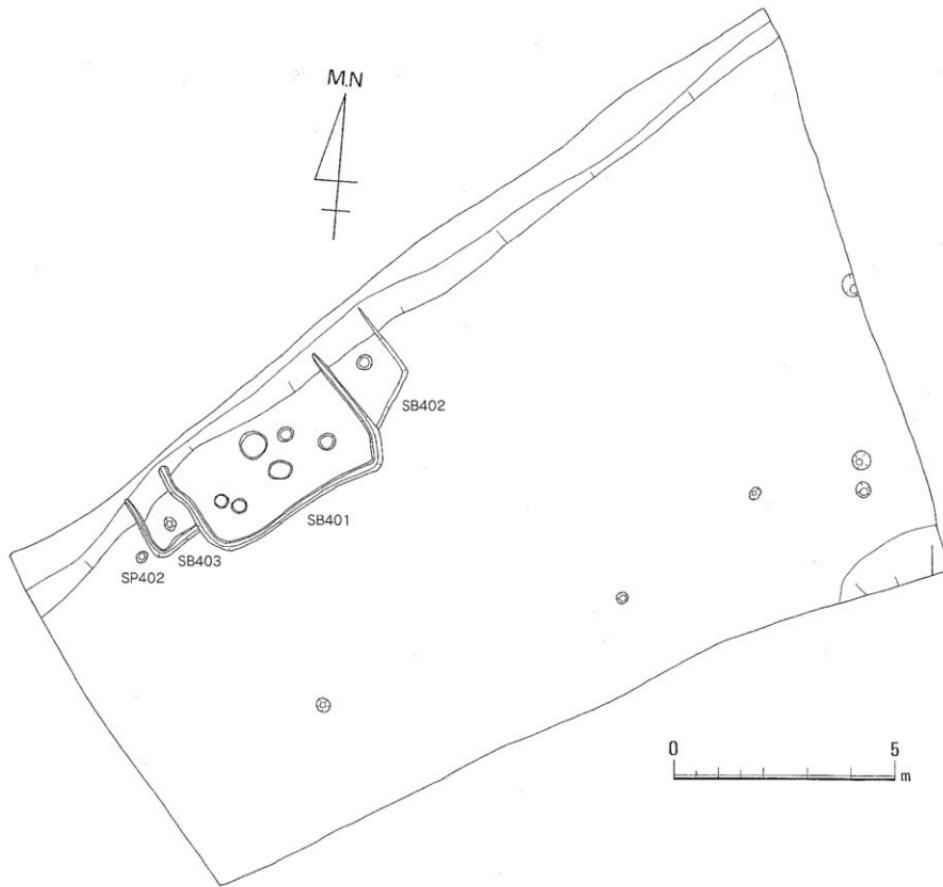


図34 III区第1道横面平面図

竪穴建物は調査区北辺西側で検出した。軸線を同じくする3棟が切り合っていた。検出したのは南半分で、北半分は後世に削平されていた。

SB401は3棟の中央で検出した。平面隅丸方形の竪穴建物である。竪穴は一辺4.3m程度、深さ0.15mである。床面はわずかに北へ傾斜している。

埋土からは弥生土器、土師器、サヌカイト片、混入と考えられる瓦器1点と青磁1点が出土した。いずれも小片で、磨滅が著しい。141～143は中期後葉～後期前葉の弥生土器の甕の口縁部である。141の端部は折り曲げて斜め上方に拡張されている。端面には4条の凹線が施されている。142の端部も141と同様に拡張されている。口唇部は欠損している。143の端部は上下に摘み出されている。端面には1条の凹線が施されている。144～145は古墳時代前期前半の土師器の口縁部である。144の頸部は屈曲している。端部はわずかに水平に拡張されている。端面は面を成している。145は直口壺であろう。端部は丸く仕上げられている。胎土は精良である。146～148は弥生土器の高杯である。146は杯部の口縁部である。体部は内湾している。端部は左右に拡張されている。147～148は脚端部である。147の端部は水平に摘み出されている。148の端部は斜め上方に摘み出されている。149は弥生土器の器台の口縁部である。斜め下方に拡張されている。上方にも摘み出されているが、欠損している。端面には浅い串描鋸歯文が施されている。150は土師器である。椀の底部である。断面半円形の低い高台が貼り付けられている。

床面からは壁体溝、中央穴、5基の柱穴を検出した。壁体溝は幅0.15m程度、深さ0.02mと極めて浅い。埋土からは後期の弥生土器の小片、土師器の小片が出土したが、磨滅が著しく、図示できない。中央穴、SP406は平面円形で、径0.6m、深さ0.1mである。埋土からは弥生土器の小片が出土した。154～155は甕の口縁部である。154の端部は斜め下方にわずかに拡張されている。外面は黒色を呈している。煤が吸着しているのであろうか。155の端部は上方に摘み出されている。柱穴は5基検出した。SP403は平面円形で、径0.4m、深さ0.1mである。埋土からは後期の弥生土器の小片が出土した。SP404は平面円形で、径0.35m、深さ0.1mである。埋土からは弥生土器片が1点出土した。SP405は平面梢円形で、長径0.5m、短径0.4m、深さ0.1mである。埋土からは後期の弥生土器片が出土した。151は甕の口縁部である。頸部は弯曲し、端部はわずかに肥大している。152～153は底部である。152の底面は上げ底である。SP407は平面円形で、径0.35m、深さ0.1mである。埋土からは素焼き土器片が2点出土した。SP408は平面円形で、径0.3m、深さ0.1mである。埋土からは弥生土器片が5点出土した。

SB402はSB401の北側で検出した。平面多角形と考えられる竪穴建物である。全体の1/4程度を検出した。竪穴は深さ0.2mである。床面は緩やかに北へ傾斜している。

- ①暗茶色砂質土  
 ②深茶色砂質土  
 ③淡褐色砂質土  
 ④暗褐色砂質土 (径1~2cmの灰色シルト塊含む)  
 ⑤暗灰茶色砂質土 (径1~4cmの灰色シルト塊含む)  
 ⑥淡褐色砂質土  
 ⑦褐色砂質土 (径1cmの灰色シルト塊含む)  
 ⑧暗茶色砂質土 (径1cmの褐色粘土塊含む)  
 ⑨深褐色砂質土 (径1cmの灰色シルト塊含む)  
 ⑩灰褐色砂質土  
 ⑪深茶色砂質土 (径1~2cmの灰色シルト塊含む)  
 ⑫灰褐色砂質土 (径1~2cmの灰色シルト塊含む)

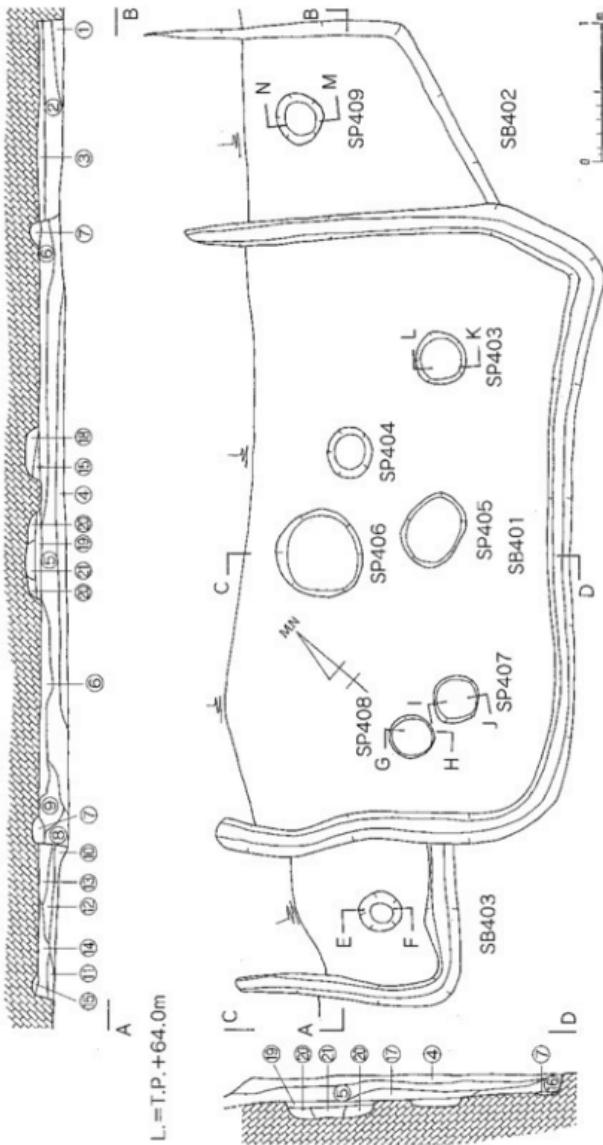


図35 SB401・402・403平・土層断面図

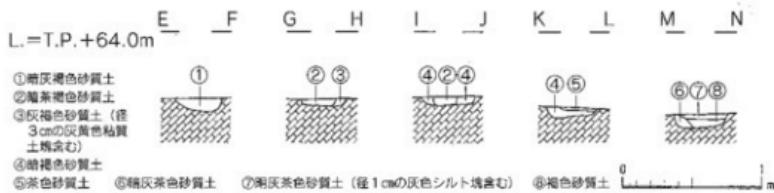


図36 SB401・402・403柱穴土層断面図

埋土からは弥生土器の小片3点とサスカイト片が出土したが、磨滅が著しく、図示できない。床面からは壁体溝は検出されなかった。1基の柱穴を検出した。SP409は平面円形で、径0.35m、深さ0.1mである。埋土からは後期の弥生土器の小片が4点出土した。156は壺の口縁部である。端部は上下に摘み出されている。端面は面を成している。

SB403はSB401の南側で検出した。平面方形の竪穴建物である。全体の1/4程度を検出した。竪穴は深さ0.2mである。床面はわずかに北へ傾斜している。

埋土からは後期の弥生土器の小片が9点出土した。157は底部である。158は高杯の脚柱部である。残存部外面の上端に3条、中央に4条の串状工具による細い沈線が施されている。さらに下方に向けて等間隔に沈線が施されているが、これは三角形透かしの上端であろう。

床面からは壁体溝、1基の柱穴を検出した。壁体溝は幅0.15m、深さ0.03mである。埋土からは素焼き土器片が1点出土したが、磨滅が著しく、図示できない。柱穴は平面円形で径0.3m、深さ0.1mである。埋土からは遺物は出土しなかった。

SB401・402・403は遺構が浅く、出土遺物も状態の良いものが少ない。この様な中で、建物の時期を考えるのは困難だが、あえてそれぞれの廃絶の時期を考察するならば、SB401は弥生時代後期後葉～古墳時代初頭、SB402は弥生時代後期後葉、SB403も同時期だが、多少前に位置付けられるかもしれない。

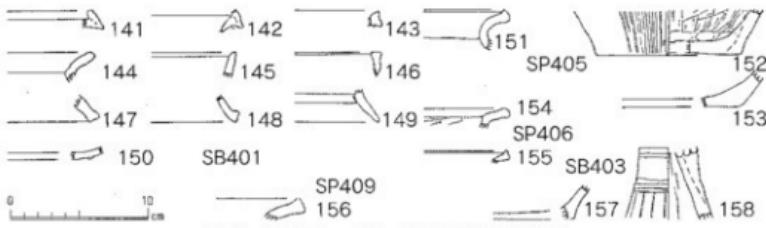


図37 SB401・402・403出土遺物実測図

### 3) 第2層

第2層は調査区南辺を除いて堆積していた茶灰色砂質土層である。層厚は0.3~0.4mである。弥生土器、土師器を主に、須恵器、瓦質土器、備前焼、青磁、サヌカイト片、銅錢と多様なもののが出土したが、小片ばかりである。

159~196は中期後葉~後期の弥生土器の壺、甕の口縁部である。159の端部は斜め上方に拡張されている。端面の上下に2条の凹線が施されている。160の端部は折り曲げて斜め上方に拡張されている。161の端部は折り曲げて上下に拡張されている。162の端部は斜め上方に摘み出されている。端面には2条の凹線が残存している。163の端部は上方に摘み出されている。164の頸部は外弯し、端部は水平に摘み出されている。165の端部は折り曲げて上下に拡張されている。端面には1条の凹線が施されている。166の端部は上下に拡張されている。167の端部も上下に拡張されている。168の端部は上下に拡張されている。端面には3条の凹線が施されている。169の端部も上下に拡張されている。端面には5条の凹線が施されている。器台の口縁部かもしれない。170の端部はやや拡張されている。171の端部は上下に拡張されている。端面には3条の凹線が施されている。172の端部は上下に拡張されている。端面には押圧なでによる1条の浅い凹線状のものが見られる。173の端部は上下に拡張されている。端面には2条の凹線が残存している。174は外反して大きく開いている。端部は上方に摘み出されている。175の頸部は屈曲し、口縁部は斜め上方に真っ直ぐに立ち上がっている。端部は上方にわずかに摘み出されている。外面には煤状のものが付着している。176の端部は水平に摘み出されている。端面には押圧なでによる1条の凹線状のものが見られる。177の端部は斜め下方に摘み出されている。端部の内外面には1条の凹線が施されている。焼成はやや軟質である。178の端部は上下にわずかに拡張されている。179の端部は肥大している。端部内面には1条の沈線状のものが施されている。180の端部は斜め下方へ拡張されている。端面には2条の凹線が施されている。焼成はやや軟質である。181の端部は方形を呈し、面を成している。182の頸部は弯曲し、端部は上方に摘み出されている。183の端部は上方に摘み出されている。端面には1条の凹線が施されている。184の端部は上下に拡張されている。185の端部は上方に拡張されている。端面には1条の凹線が残存している。186の端部は突堤状に貼り付けて、上方に拡張されている。端面は押圧なでによって凹線状を呈している。187の端部は上下にわずかに摘み出されている。188の端部は上下に拡張されている。189の端部は肥大している。外面には炭化物が付着している。190の端部は肥大している。内面は炭化物が付着したためか、黒色を呈している。191の端部は丸く仕上げられている。192の端部は肥大している。193の端部は上方に拡張されている。端面には2条の凹線が施されている。194の端部は肥大している。端

面には2条の浅い凹線状のものが残存している。195の端部は上方にわずかに摘み出されている。196の端部はわずかに水平に拡張されている。焼成はやや軟質である。197は弥生土器の口縁部であろうか。端部はわずかに肥大している。198～203は古墳時代前期初頭の土師器である。198は鉢である。口縁部はわずかに外反している。端部は丸く仕上げられている。199～201は壺である。球形の胴部とわずかに外反する口縁部をもつ。199の端部はわずかに上方に摘み出されている。200の器壁は薄い。端部は丸く仕上げられている。201の端部はわずかに上方に摘み出されている。202は広口壺の口縁部である。斜め上方に拡張されている。端部は丸く仕上げられている。203は壺の口縁部である。内傾し、端部は内側にわずかに肥大している。204～211は中期後葉～後期中葉の弥生土器の高杯である。204～207・209は脚端部である。

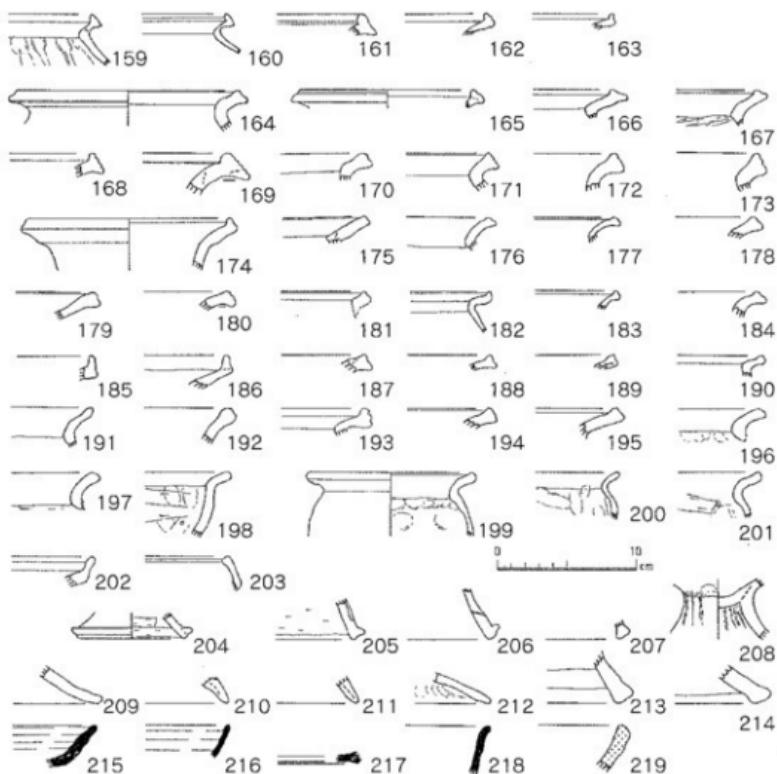


図38 Ⅲ区第2層出土遺物実測図

204の端部は突帯状に貼り付けて水平に拡張されている。205の端部は水平に拡張されている。外面には細い三角形透かしが施されているが、貫通していない。206の端部は斜め上方に摘み出されている。三角形透かし穴が施されている。207の端部は上下に摘み出されている。208は脚柱部上半である。杯部は円板充填技法で形成されている。209の脚裾部は外反しながら開いている。端部はわずかに水平に摘み出されている。210～211は杯部の口縁部である。斜め下方に拡張された部分である。端部は丸く仕上げられている。外面には浅い串描鋸歯文が施されている。212は古墳時代前期初頭の土器鋏の高杯である。脚裾部である。わずかに内湾している。端部は丸く仕上げられている。残存部で円形透かし穴が1ヶ所見られる。213～214は後期前葉の弥生土器の器台である。脚端部である。213の端部は肥大している。214の端部はわずかに上下に拡張されている。215～217は須恵器である。215は杯である。口縁端部は丸く仕上げられている。底面には回転糸切り痕が残存している。216は口縁部である。217は底部である。断面半円形の高台が貼り付けられている。218は青磁の椀である。口縁部は外反している。端部は丸く仕上げられている。219は瓦質土器の鉢である。口縁端部は方形を成している。

## 4) 第2遺構面

第2遺構面は、第2層である茶灰色砂質土層を除いた面である。検出面は北へ傾斜している。レベルは63.2～63.8mである。

遺構は調査区全面で溝、土壤、ピットを検出した。

SD405は調査区東半中央で検出した。検出した範囲では、平面「コ」の字形で、長さ南北4.3m、東西8.2m、幅0.2～0.35m、深さ0.2～0.3mである。東端は調査区外へ北東方向へ延びている。底面は南から北へ(図39の矢印方向)に傾斜している。暗黄灰色砂質土の埋土からは弥生土器の小片が出土した。220は後期中葉の甕の口縁部である。わずかに外反しながら大きく開いている。端部は上下に摘み出されている。SD405はその形状からは、現代の建物の基礎、あるいは耕作に伴うものとも考えられるが、第2層に完全に覆われていること、埋土からは小片とはいえ、弥生土器しか出土しないことから、第2遺構面に伴う遺構として扱った。

ピットは平面ほぼ円形で、径0.3～0.7m、深さ0.2～0.7mである。まとまりはつかめなかつた。SP417は調査区北辺西側で検出した。平面楕円形で、長径0.5m、短径0.35m、深さ0.25mである。埋土からは弥生土器の小片が8点出土した。SP418も調査区北辺西側で検出した。平面円形で、径0.4m、深さ0.2mである。埋土からは弥生土器の小片が6点出土した。SP419は調査区中央で検出した。平面円形で、径0.4m、深さ0.7mである。灰褐色砂質土の埋土からは弥生土器片が出土した。221は中期後葉の弥生土器である。甕の口縁部である。端部

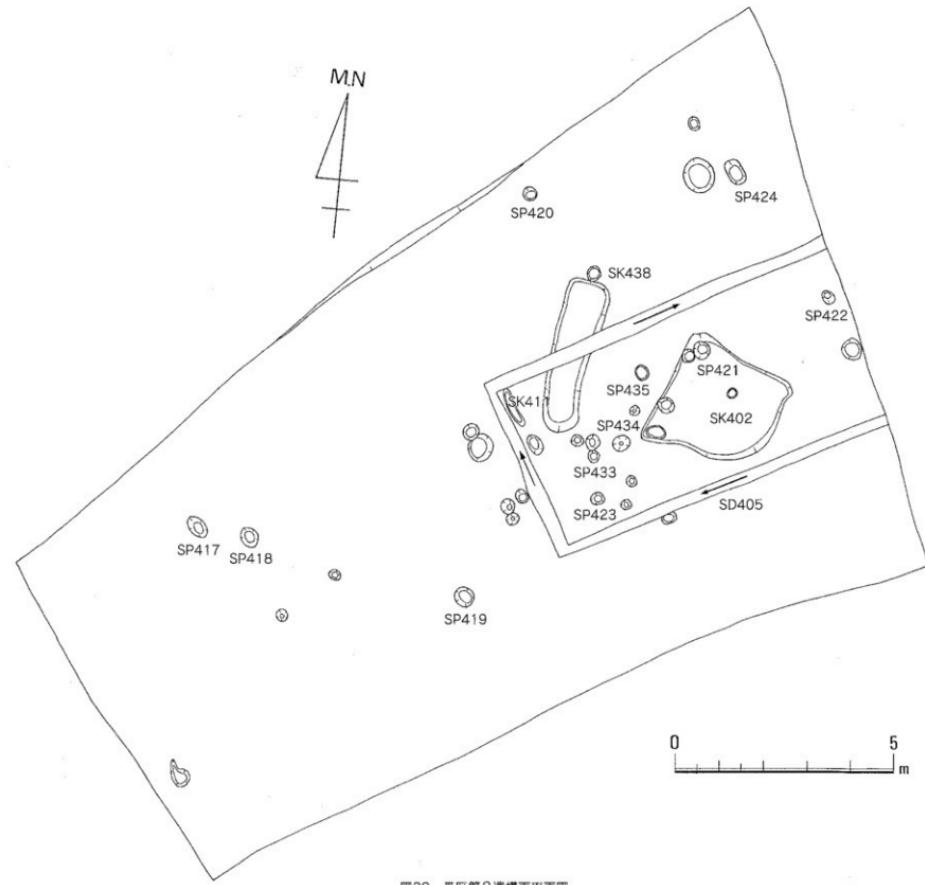


図39 III区第2階横面平面図

は折り曲げて、斜め上方に拡張されている。端面には5条の凹線が残存している。SP420は調査区北辺東側で検出した。平面円形で、径0.3m、深さ0.4mである。暗黄茶色砂質土の埋土からは弥生土器の小片が2点出土した。SP422は調査区東辺中央で検



図40 Ⅲ区第2遺構面出土遺物実測図

出した。平面橢円形で、長径0.3m、短径0.25m、深さ0.35mである。暗黄灰色砂質土の埋土からは弥生土器の小片が2点出土した。SP423はSD405に囲まれた南角で検出した。平面円形で、径0.3m、深さ0.1mである。暗灰色砂質土の埋土からは弥生土器の小片が1点出土した。SP424は調査区北角で検出した。平面長円形で、長径0.6m、短径0.35m、深さ0.15mである。埋土からは素焼き土器の小片が5点出土した。SP433はSD405に囲まれた西辺で検出した。平面円形で、径0.3m、深さ0.15mである。灰褐色砂質土の埋土からは素焼き土器の小片が1点出土した。SP434はSD405に囲まれた中央で検出した。平面円形で、径0.25m、深さ0.3mである。灰褐色砂質土の埋土からは後期の弥生土器の小片が3点出土した。SP435はSD405に囲まれた北辺中央で検出した。平面円形で、径0.3m、深さ0.5mである。灰褐色砂質土の埋土からは素焼き土器の小片が4点出土した。SP438は調査区北東部で検出した。平面円形で、径0.3m、深さ0.3mである。灰褐色砂質土の埋土からは弥生土器の小片が3点出土した。これら以外のピットからは遺物は出土しなかった。

土壤は平面不定形で、深さも様々である。SK402は調査区東半中央で、SD405に囲まれるように検出した。平面ほぼ隅丸方形で、一辺2.1~2.7m、深さ0.2mである。床面は平坦である。

埋土からは完形のものを含む後期の弥生土器とサヌカイト片が1点出土した。222は壺の上半部である。肩部は内傾しながら立ち上がっている。口縁部は肥大し、やや外反している。端部は丸く仕上げられている。外面には炭化物が付着している。223~224は口縁部である。223の端部は水平に拡張されている。224は外反しながら大きく開いている。端部は丸く仕上げられている。225は壺の下半部である。器壁は薄く仕上げられている。外面には煤が付着している。226は台付鉢の下半部である。台部の器壁は厚い。調整は粗く、整形痕が残存している。端部は丸く仕上げられている。227は手づくねの鉢の上半部である。全面に指頭圧痕が残存し、成形もいびつである。口縁部の対面の2ヶ所を把手状に外方へ折り曲げている。外面には炭化物が付着している。228~229は完形の高杯である。228の口縁部は斜め上方に真っ直ぐに立ち上がっている。短い脚柱部はわずかに上下がすぼまっている。口縁端部と脚柱部は丸く仕上げられている。細かい調整は表面磨滅のため不明である。口縁部外面には6~7条の、脚柱部上端には2条の凹線、脚柱部下端には5ヶ所の円形刺突文、脚裾部には6ヶ所の円形透かし穴が施されている。229の口縁部は屈曲しながら大きく開いている。脚柱部は極めて短く、体部

からすぐに脚部になる。脚端部は水平に拡張されている。成形は全体に粗く、口縁部も歪んでいる。脚部には3個一組で三角形に配された円形透かし穴が2ヶ所に施されている。

床面からはピットを5基検出した。ピットは平面ほぼ円形で、径0.25~0.45m、深さ0.1~0.4mである。SP421はSK402の北角で検出した。平面円形で、径0.4m、深さ0.4mである。木炭粒を含む黒黄灰色砂質土の埋土からは素焼き土器片が2点出土したが、図示できない。

SK402からはその規模に比して、完形品を含む、多くの土器が出土した。形状からも、単なる廃

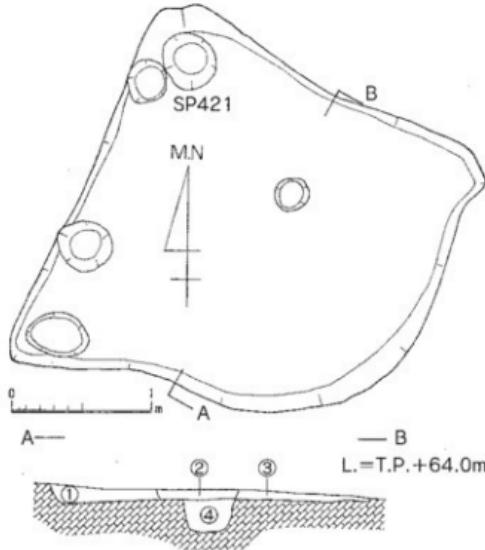


図41 SK402平・土層断面図

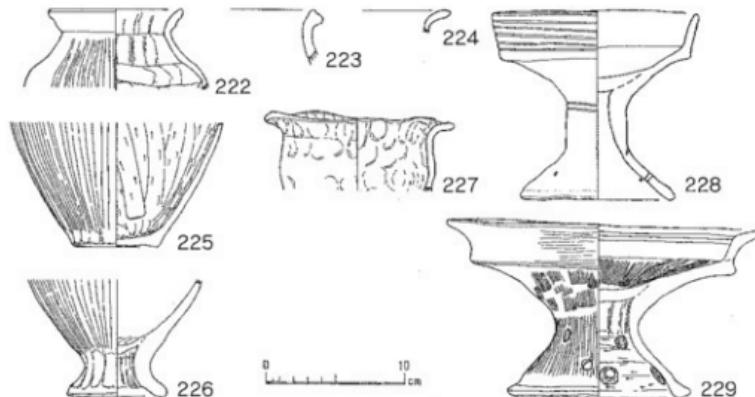


図42 SK402出土遺物実測図

棄壙とは考え難い。何らの祭祀に伴うものであろうか。

SK411はSD405に囲まれた西角で検出した。平面は弯曲した長円形で、長径1.0m、短径

0.2m、深さ0.2mである。灰褐色砂質土の埋土からは後期の弥生土器の小片が出土したが、図示できない。これら以外の土壤からは遺物は出土しなかった。

## 5) 第3層

第3層は調査区西側に堆積していた灰褐色砂質土層である。層厚は0.25mほどである。弥生土器、土師器、須恵器1点、サスカイト片4点が出土した。

230～255は中期中葉～後期中葉の弥生土器である。230～253は壺、甌の口縁部である。230の端部は上方に摘み出されている。231の端部も上方に摘み出されている。232の端部はわずかに肥大している。233の端部は折り曲げて斜め上方に拡張されている。端面には3条の凹線が施されている。234の端部も折り曲げて斜め上方に拡張されている。端面には1条の凹線が残存している。235の端部は折り曲げて上下に拡張されている。端面には4条の凹線が施されている。236の端部は折り曲げて斜め上方に拡張されている。端面には2条の凹線が残存している。口縁部から頸部の外面には煤が付着している。237の端部は上下に拡張されている。238は斜め上方に真っ直ぐに立ち上がる。端部は上方に摘み出されている。端面には2条の凹線が施されている。外面には炭化物が付着している。239の端部は水平に拡張されている。端面には2条の凹線が残存している。2次焼成のためか、表面は暗灰色、断面は黒色を呈する。

240の頸部は大きく外反している。端部は肥大している。端面には煤が付着している。241の端部は下方に拡張されている。端面には2条の凹線が施されている。胎土は精良である。242の端部は上方に摘み出されている。端面には3条の凹線が施されている。243の端部は上下に拡張されている。端面には3条の凹線を施し、さらに2個一組の円形押形文が施されている。

244の端部は下方に拡張され、さらに粘土を盛って上方にも拡張されている。端面には5条の凹線が施されている。245の端部は肥大している。方形を呈し、端面は面を成している。246の端部は上下に摘み出されている。端面には1条の凹線が施されている。247の端部はわずかに上方に摘み出されている。端面には1条の凹線が施されている。248の端部は上下に摘み出されている。端面には2条の浅い凹線状のものが施されている。外面には薄く煤が付着している。249の端部はわずかに上方に摘み出されている。250の端部は斜め上方に摘み出されている。端面は1条の凹線状を呈している。251の端部は上方に摘み出され、さらに粘土を盛って斜め下方にも拡張されている。端面には1条の凹線が残存している。252の頸部は屈曲している。端部は斜め上方に摘み出されている。残存部の胴部下半は煤が吸着しているのか、褐色を呈している。253の胴部の器壁は薄い。頸部は大きく外反しながら開いている。端部は上方に摘み出されている。外面から口縁部内面には煤が付着している。さらに、胴部外面には炭化物が付着している。254～255は鉢の口縁部である。254の端部は上方に摘み出されている。内面に

は成形時の圧痕が残存している。255の端部は内側へ水平に拡張されている。256は弥生土器の口縁部である。端部は斜め下方に拡張されている。端面下方に2条の凹線が残存している。257～262は古墳時代前期前葉の土師器である。257～261は小型壺の口縁部である。球形の肩部に大きく開く口縁部をもつ。257の口縁部は肥大している。258の端部は上方に摘み出されている。259の肩部の器壁は厚い。端部は丸く仕上げられている。260の端部も丸く仕上げられている。261の端部は上方に摘み出されている。262は壺の口縁部である。端部は水平に拡張されている。263～265は弥生土器の口縁部であろうか。263の端部は丸く仕上げられている。264の端部はわずかに肥大している。端面は面を成している。265の端部は上下に拡張されている。端面には2条の凹線が施されている。266～280は中期中葉～後期の弥生土器の高杯である。266～267は杯部の口縁部である。266の端部は内側へ水平に拡張されている。口唇部には刻み目が施されている。267は外反しながら開いている。端部は丸く仕上げられている。268～280は脚部である。268の端部は水平に拡張されている。外面には細い三角形透かしが施されているが、貫通していない。269は脚柱部である。残存部下端に復元で9ヶ所の円形透かし穴が施されている。270の端部はわずかに肥大している。三角形透かし穴が施されている。271の端部は水平に拡張されている。外面には三角形透かしが施されているが、貫通していない。272は外反しながら開いている。端部は肥大している。外面には円形と爪形の押形文が施されている。273は脚柱部上半である。杯部の底面は完全に充填されず、穴が開いている。充填された粘土が剥離したのか、非実用品なのであろうか。274は脚柱部である。上下はわずかにすぼまり、エンタシス状を呈している。275は脚部差し込み技法の脚部である。脚柱部はわずかに肥大している。276は低い脚部である。端部は丸く仕上げられている。円形透かし穴が復元で7ヶ所施されている。277の端部は丸く仕上げられている。278の端部は肥大している。外面には円形押形文が施されている。279は外反しながら開いている。端部は丸く仕上げられている。円形透かし穴が施されている。280の端部も丸く仕上げられている。焼成はやや軟質である。281は古墳時代前期前葉の土師器である。高杯の杯部の口縁部である。内窓しながら立ち上がり、端部は丸く仕上げられている。表面には赤色粘土による丹塗りが施されている。282～286は中期後葉～後期前葉の弥生土器の器台である。282は口縁部である。端部は折り曲げて斜め上方に拡張されている。端面には3条の凹線が施されている。283は脚部である。ゆるやかに外反しながら開いている。端部は丸く仕上げられている。脚柱部外面には11条以上の凹線が施されている。284は脚部である。端部はわずかに肥大している。端面は面を成している。復元で4ヶ所の隅丸長方形の透かし穴が施されている。285～286は脚端部である。285の端部は水平に摘み出されている。外面には2条の凹線が施されている。286の端部は上下に拡張されている。

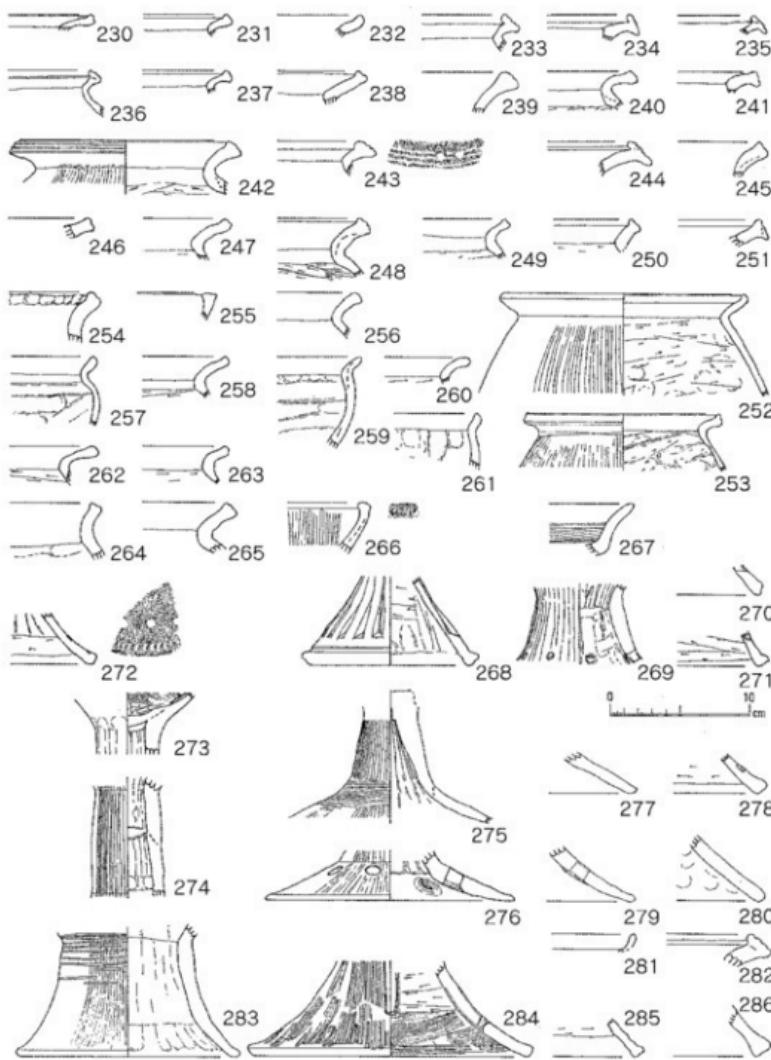


図43 Ⅲ区第3層出土遺物実測図

## 6) 第3(最終) 遺構面

第3遺構面は、第3層である灰褐色砂質土層を除いた面で、地山面である。検出面は北へ傾斜している。レベルは63.0~63.8mである。

遺構は調査区北半で土壤、ピット、堅穴建物3棟を検出した。

土壤は4基検出した。SK403は調査区北角で検出した。平面円形と考えられる南半部を検出した。検出した範囲で、径2.4m、深さ0.5mである。灰色系砂質土の埋土からは中期後葉～後期後葉の弥生土器が出土した。287は壺の口縁部である。端部は上下に摘み出されている。端面には2条の凹線が施されている。288は壺の頭部である。外反しながら立ち上がっている。胴部との境には1条の押圧による低い突帯状のものが施されている。289は高杯の脚部である。端部は水平に拡張されている。SK407は調査区西辺中央で検出した。平面方形と考えられる東半部を検出した。検出した範囲で、一辺1.5m、深さ0.3mである。暗灰茶色砂質土の埋土からは後期の弥生土器が出土した。290は口縁部である。端部は丸く仕上げられている。SK408は調査区西半中央で検出した。平面楕円形で、長径0.8m、短径0.6m、深さ0.5mである。灰褐色砂質土の埋土からは中期後葉～後期の弥生土器が出土した。291は甌の口縁部である。端部は折り曲げて斜め上方に拡張されている。端面には4条の凹線が施されている。SK409は調査区北辺中央で検出した。平面長円形で、長径1.5m、短径0.7m、深さ0.15mである。灰褐色砂質土の埋土からは素焼き土器の小片が2点出土したが、磨滅が著しく、図示できない。床面の南側2/3ほどの範囲に最厚部で0.08mの厚さに木炭を検出した。木炭の方向は一定していなかった。後述するSB404・SB405と関連があるのだろうか。

ピットは4基検出した。SP431は調査区中央で検出した。平面楕円形で、長径0.5m、短径0.35m、深さ0.5mである。灰褐色砂質土の埋土からは弥生土器の小片2点が出土した。SP432も調査区中央で検出した。平面円形で、径0.35m、深さ0.45mである。灰褐色砂質土の埋土からは292が出土した。292は後期中葉の弥生土器である。甌の口縁部である。端部は水平に拡張されている。SP436は調査区北辺中央で検出した。平面円形で、径0.3m、深さ0.4mである。灰褐色砂質土の埋土からは素焼き土器の小片が1点出土した。SP437は調査区北辺中央で検出した。平面円形で、径0.4m、深さ0.4mである。暗黄灰色砂質土の埋土からは弥生土器の小片が3点出土した。



図44 III区第3遺構面出土遺物実測図

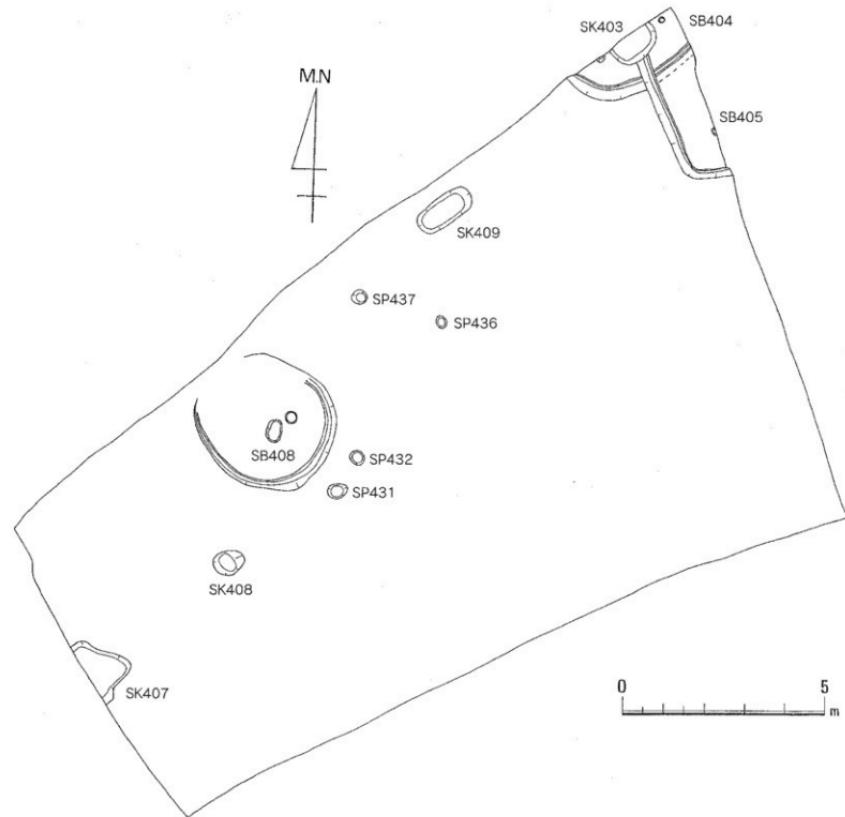


図45 III区第3 (最終) 道構面平面図

堅穴建物は調査区北角で切り合ったSB404・405の2棟を、北辺中央でSB408を検出した。

SB405は平面隅丸方形と考えられる堅穴建物である。全体の南西部を検出した。検出した範囲で、堅穴は深さ0.5mである。床面は平坦である。

埋土からは弥生土器とサスカイト片1点が出土した。298は中期中葉の甕の口縁部である。端部はわずかに上方に摘み出されている。端面には1条の凹線が施されている。

床面直上からは炭化材を検出した。炭化材の平面形状は様々だが、厚さは3cm程度であった。南側で検出したものは主に南北方向に、北側で検出したものは東西方向を示していた。建物の中央へ向けて柱が倒壊した様子がうかがわれる。

床面からは壁体溝と1基の柱穴を検出した。壁体溝は幅0.1~0.15m、深さ0.05mである。

埋土からは遺物は出土しなかった。柱穴は調査区東辺で検出した。平面橢円形と考えられる西半部を検出した。検出した範囲で、長径0.2m、深さ0.4mである。掘り方は南へ傾斜している。

埋土からは遺物は出土しなかった。

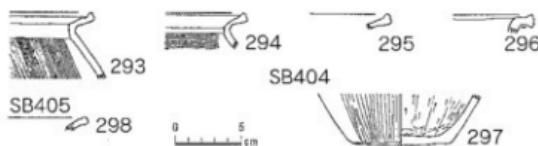


図46 SB404・405出土遺物実測図

SB404は平面円形と考えられる堅穴建物である。全体の南西部を検出した。堅穴は深さ0.35mである。床面は平坦である。SB405の方が後に構築されたのだが、平面でSB405との前後関係を捕らえそこね、SB404の方が後に構築された様に掘削してしまった。検出範囲の中央は床面までSK403による擾乱を受けていた。

埋土からは弥生土器とサスカイト片3点が出土した。293~295は中期中葉の甕の口縁部である。293の端部は上方に摘み出されている。端面には1条の凹線が施されている。294の端部も上方に摘み出されている。端面には1条の凹線が施されている。外面には煤が付着している。295の端部も上方に摘み出されている。端面には1条の凹線が施されている。296は後期中葉の甕の口縁部である。水平に開いている。端部は上下に拡張されている。端面には3条の凹線が施されている。2次焼成を受けたのか、表、断面共に黒灰色を呈している。

床面直上からは炭化材を検出した。炭化材の長さは様々だが、幅5cm前後、厚さ3~5cmであった。炭化材は堅穴の中心方向を示すものが多い。建物の中央へ向けて柱が倒壊した様子がうかがわれる。

床面からは壁体溝と2基の柱穴を検出した。壁体溝は幅0.1~0.15m、深さ0.05mである。埋土からは遺物は出土しなかった。柱穴は調査区北辺で検出した。東側のものは、平面円形で、径0.15m、深さ0.2mである。埋土からは遺物は出土しなかった。西側のものは、平面円形と考

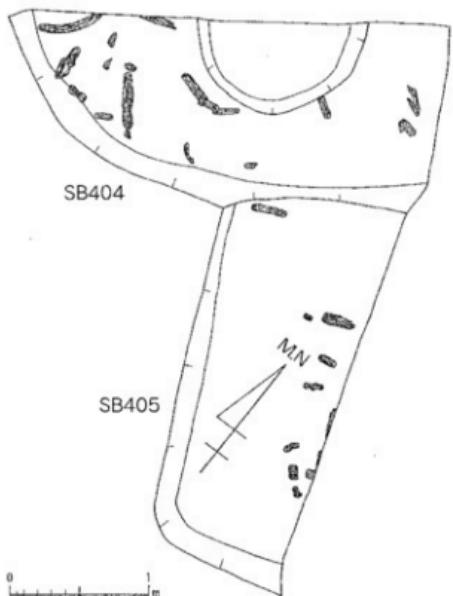


図47 SB404・405炭化材出土状況図

下側は平らになっていた。これは下側の方が良く燃焼したため脆くなり、埋没時の土圧で潰れ<sup>1)</sup>て平らになったのである。つまり、炭化材は内側から火を受けたことを示している。

しかし、SB404・405からの出土遺物が少なく、出土したものも破片ばかりであることから、火事の様な偶発的な事情により焼失したとは考えられ難い。何らの理由で不要となった建物を焼却処分したと考えられる。SB404を焼却後に、整地してSB405を構築し、さらにSB405も焼却したと想定できる。

えられる南半部を検出した。検出した範囲で、径0.2m、深さ0.3mである。埋土からは遺物は出土しなかった。

SB404の床面で297が出土した。後期の弥生土器であろう。甕の底部である。胴部はやや内湾しながら立ち上がっている。底面はやや突出していて、不安定である。

SB404・405の廃絶の時期は、これらの後に掘削されたSK403から後期後葉の弥生土器が出土し、初めに構築されたSB404の床面から後期の弥生土器が出土していることから、弥生時代後期、中でも後期後葉以前に位置付けられよう。

SB404・405で検出された炭化材について、その断面を観察すると、上側は丸く、丸太の様に円弧を描き、

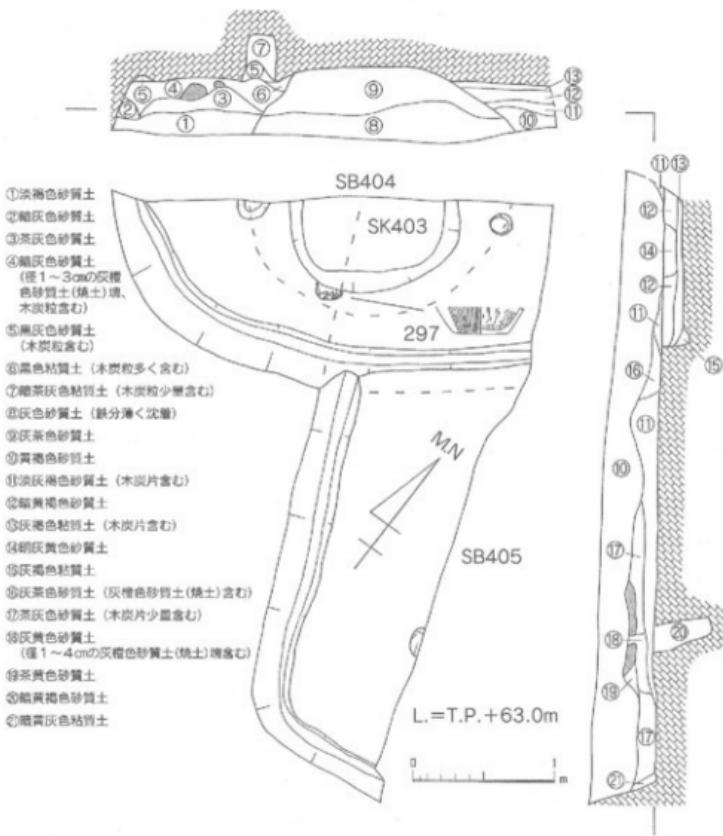


図48 SB404・405・SK403平・土層断面図

SB408は平面円形の豎穴建物である。北辺は削平されていた。豎穴は径3.5m、深さ0.35mである。床面は平坦である。

埋土からは弥生土器片とサヌカイト片2点が出土した。299～301は甕の口縁部である。299の端部は上下に摘み出されている。端面は1条の凹線状を呈している。300の端部は斜め下方に拡張されている。301の端部はわずかに肥大している。端面は1条の凹線状を呈している。302は高杯の脚部である。端部は斜め上方に摘み出されている。

床面からは甕体溝と2基の柱穴を検出した。甕体溝は幅0.1～0.15m、深さ0.03～0.05mである。埋土からは遺物は出土しなかった。柱穴は、東側のものは平面円形で、径0.3m、深さ

0.1mである。埋土からは遺物は出土しなかった。西側のものは平面瓶單形である。2基の平面円形で、径0.35mの柱穴が切り合ったものであろう。深さ0.1mである。埋土からは遺物は出土しなかった。

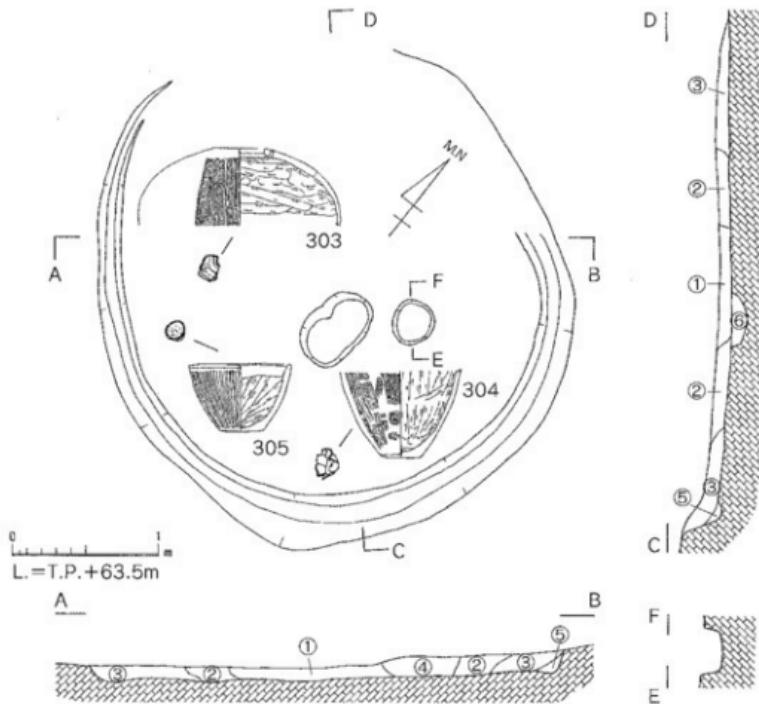


図49 SB408平・土層断面図

床面からは完全品を含む弥生土器が出土した。303は無頸壺の上半部である。偏平な球形の胴部である。口縁部はわずかに外反している。口縁端部は方形を呈している。内面には成形痕が残存している。口縁端部近くに残存部で1ヶ所の穿孔が施されている。304は甕の下半部である。底面はやや突出し、不安定である。外面上半部には煤が付着している。305は完全品の楕形の鉢である。全体的に器壁は厚く、どっしりとしている。口縁部はわずかに外反し、やや

波打っている。端部は丸く仕上げられている。底面はわずかに突出し、不安定である。

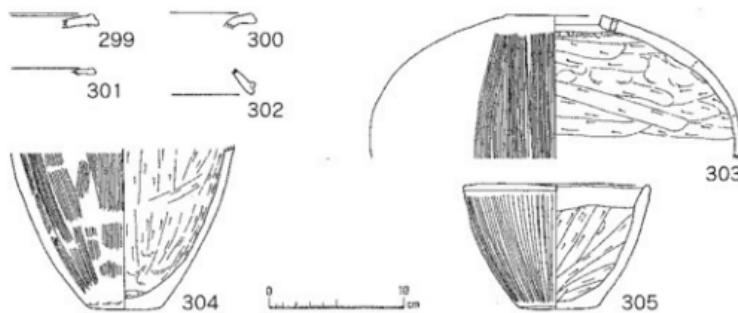


図50 SB408出土遺物実測図

SB408は検出された柱穴の数も少なく、検出されたものも浅い。床面も地山に含まれる角礫が露出し、活動面というには難しい。このように、竪穴建物とするには疑問もあるが、ここでは建物として扱った。

SB408の廃絶の時期は弥生時代後葉に位置付けられよう。

1) 岡山市北消防署御津山集所の柏谷茂氏（現 御津山役所長）に調査時に現場でご教示頂いた。

## IV まとめ

III 調査成果で検出した遺構、遺物について報告した。調査区別に記述してきたので、ここでそれらをまとめてみる。

調査地を中心に、上伊田遺跡の変遷を時代を追って見てみたい。

### 弥生時代中期前葉以前

中期前葉以前に位置付けられる遺物は出土しなかった。遺跡範囲の中央を調査しているので、この時期には、まだ人跡は印されていなかったのであろう。

### 弥生時代中期中葉

中期中葉に位置付けられる遺物はⅠ、Ⅲ区から出土したが、遺構は検出されなかつた。この時期には、遺跡の高位部で集落が営まれ始めたのであらうが、まだ、積極的には利用されていなかつたのであらう。

### 弥生時代中期後葉

中期後葉に位置付けられる遺物は全ての調査区から出土した。この時期には、遺跡の全域に集落が拡大したのであらう。

### 弥生時代後期前葉

堅穴建物SB101が廃絶した時期である。この時期以降、建物跡が見られるようになる。

### 弥生時代後期後葉

堅穴建物SB304・402・403・404・405・408が廃絶した時期である。調査地で最も多くの建物跡が見られる時期である。しかし、これらの建物が同時併存していたわけではない。遺構の重複状況、出土遺物から勘案すると、SB404→405→408→403→402の順に構築されたことになる。

SB404・405は後期中葉から営まれていた可能性がある。

SB402・403はSB408の覆土に掘り込まれていた。さらにSB401が重複していた。4棟の堅穴建物が短期間にうちに建替えられることになり、1棟の在続期間は短いことになる。あるいは、SB402・403は平面方形で、一辺7mの一棟の堅穴建物のそれぞれ北、南角部で、ここでは4棟の建物が建替えられたのかもしれない。

また、SB304は最低3回の建替えが考えられる。柱穴の出土遺物から、後期を通じて営まれていたのであらう。

### 弥生時代後期後葉～古墳時代初頭

堅穴建物SB401が廃絶した時期である。

## 古墳時代以降

古墳時代以降もこの地で人々の生活は続いているようであるが、明確な時期の判明する遺構は検出されなかった。

掘立柱建物SB202・507・303が営まれているが<sup>1)</sup>、調査面積に比して、建物の数は少ない。

集落は現在の集落のあるより低位部へ移動し、上伊田遺跡の地は主に耕作地として利用されていたのであろう。

上伊田遺跡は営林署の事業に伴い遺物が出土していたように、かなりの痛手を被っている。今回の調査地も同様である。そのため、出土遺物は小片が多く、遺構面が削平されている部分もあった。

今回の調査成果は注目を浴びるようなものではないが、上伊田遺跡の一端を明らかにし得たものである。

上伊田遺跡の地は、2005年4月から岡山県動物愛護センターとして生まれ変わる。そこを訪れた人々が<sup>2)</sup>、ここに眠る2000年に及ぶ先人の蔵に思いを馳せて頂けたら幸いである。

## 竪穴建物について

本書においては、一般に『竪穴住居』と呼ばれている遺構に対して『竪穴建物』という名称を用いてきた。その理由については、以前にも述べたが<sup>1)</sup>、遺構がどのように使用されていたのか明らかでない状況で、それを住居という一つの使用方法を示す名称で呼称するのは疑問である。『掘立柱建物』という名称との整合性もとれない。

最近では『竪穴建物』という名称も広まってきたようではあるが<sup>2)</sup>、『竪穴住居』の方が一般的である。用言について検討が必要なのではないだろうか。

1) 長谷川一英 「まとめ」『御津町埋蔵文化財発掘調査報告⑨ 犬治屋谷遺跡』(1998)

2) 2005年2月1日にインターネットの検索システムの一つであるYahoo!JAPANで『竪穴住居』、『竪穴建物』を検索したところ、前者は16,095件、後者は166件が表示された。重複もあるが、竪穴住居の方が一般的であることを示している。

## V 立会調査の成果

2003年度からの工事では、岡山県教育委員会からの指示に従い、施設の建築に伴う掘削時に御津町教育委員会の職員が立ち会い、遺物包含層の有無を確認し、出土遺物がある場合は採集した。1991年の確認調査によって遺跡の範囲が判明しており、遺跡に影響を及ぼさないよう設計されたこともあり、⑤を除いて、遺物の出土は少なかった。

### ①地点

動物愛護センター用地の南西端である。2003年10月22日に、道路下にヒューム管を埋没するための掘削時に立ち会った。

地表下0.4～0.7mで確認した灰色粘質土層から弥生土器が1点出土した。土器は磨滅が著しい。遺跡範囲の南西隅であることから流入したものであろう。

### ②地点

動物愛護センター用地のほぼ中央である。03年9月22日に、愛護館の基礎杭を打設するための事前の掘削時に立ち会った。

地表下1.2～1.5mで確認した暗茶色粘質土層から弥生土器の小片が出土した。暗茶色粘質土層は2次堆積である。

### ③地点

谷を挟んで北側の斜面である。04年8月12日に須恵器片を1点表面採集した。

### ④地点

北広場のほぼ中央である。04年8月12日に包含層の位置を確認するために掘削した。

地表下0.4mで確認した暗赤茶色砂質土層から弥生土器が出土した。

### ⑤地点

北広場の西辺である。北広場の西半を掘削して全体を平坦にする計画のため、04年10月28日に、事前に包含層の位置を確認するために掘削した。

地表下0.3～0.9mで確認した灰褐色砂質土層から弥生時代後期の土器が出土した。

良好な包含層が存在することから、掘削深度を浅くするよう設計変更を依頼し、対応して頂いた。

### ⑥地点

北広場の南側斜面である。04年8月12日に斜面整形のための掘削時に立ち会った。

遺物は出土しなかった。

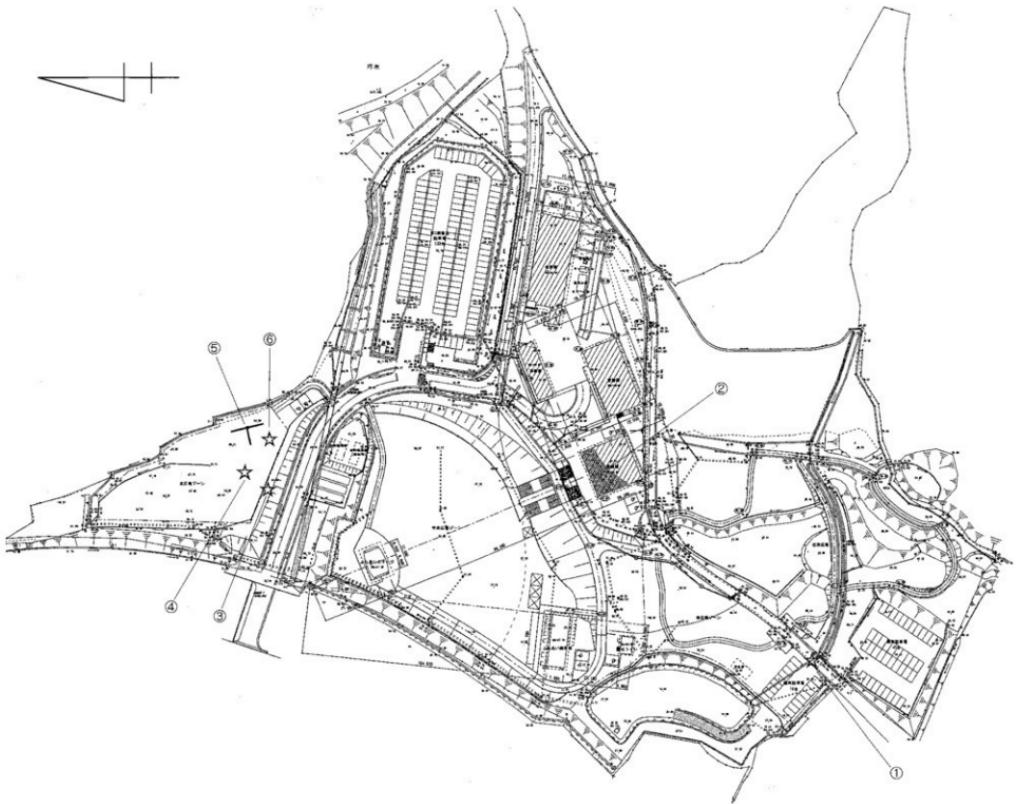


図51 立会調査位置図

土器観察表

番号	種別	器種	調査		胎土	色調			備考 法量(cm)
			外面	内面		外面	内面	断面	
1	弥生	甕	よこなで	へらみがき	よこなで	なで	0.5mm以下砂粒少	灰肌	灰茶 黒 口徑15.2 外面爆
2	弥生	甕	よこなで		よこなで		0.5~1mm粗礫	灰肌	淡灰褐色 白肌
3	弥生	甕	よこなで		よこなで		0.5mm以下砂粒少	灰肌	暗灰褐色
4	弥生	壺	不明		不明		0.5~3mm粗礫多	灰褐色	灰肌 黑灰
5	弥生	甕	よこなで	へらみがき	よこなで	へら削り	0.5mm以下粗礫少	灰肌	肌灰 黑 口徑14.2
6	弥生	甕	よこなで		よこなで		0.5~2mm粗礫	淡肌灰	白肌灰 暗灰
7	弥生	甕	よこなで		よこなで		0.5~2mm粗礫	明灰褐色	灰褐色 明茶
8	弥生	甕	よこなで		よこなで		0.5mm以下粗礫	灰褐色	灰肌 明灰褐色
9	弥生	甕	よこなで		よこなで		0.5mm以下砂粒少	灰褐色	明灰褐色
10	弥生	甕	不明		不明		0.5~3mm粗礫	淡灰	暗灰 灰
11	弥生	高杯	よこなで	へらみがき	よこなで	へらみがき	1mm以下砂粒極少	淡褐色	淡灰茶 黑
12	弥生	高杯	よこなで	不明	よこなで	へらみがき	0.5~3mm粗礫	灰褐色	暗茶 黑
13	弥生	高杯	不明		無調整		0.5mm粗礫少	肌灰	暗灰 黑
14	弥生	高杯	不明		不明		0.5~3mm粗礫多	灰褐色	明褐色 暗褐色
15	弥生	高杯	不明		不明		0.5mm砂粒少	淡灰褐色	淡灰褐色 黑
16	弥生	口縁	よこなで		よこなで	なで	0.5~2mm粗礫	灰褐色	灰褐色 褐
17	弥生	口縁	よこなで		よこなで		0.5~1mm粗礫少	灰茶	淡褐色 暗灰
18	弥生	口縁	よこなで		よこなで		0.5~1mm粗礫	黄褐色	淡灰褐色 黑灰
19	土師	甕	よこなで	はけ目	よこなで	はけ目	0.5mm砂粒極少	暗肌灰	灰肌 暗灰 外面爆付着
20	土師	皿	よこなで		よこなで		0.5mm以下砂粒少	淡灰茶	淡灰茶 黑
21	須恵	壺	ヨコナデ		ヨコナデ		0.5mm以下砂粒少	暗灰	暗灰 灰
22	須恵	壺	ヨコナデ		ヨコナデ		0.5mm砂粒極少	暗灰	暗灰 灰
23	備前	杯	ヨコナデ	糸切り	ヨコナデ ナデ		0.5~3mm粗礫極少	灰茶	暗灰茶 明灰
24	備前	杯	ヨコナデ		ヨコナデ 糸切り		1mm以下砂粒極少	暗茶	灰褐色 口徑9.9 器高2.4
25	備前	杯	ヨコナデ		ヨコナデ		0.5mm砂粒少	明茶	明茶 暗灰
26	備前	壺	ヨコナデ		ヨコナデ		0.5mm以下砂粒少	暗灰	黑灰 灰
27	備前	握鉢	ヨコナデ		ヨコナデ		0.5mm以下砂粒極少	暗赤茶	暗灰茶 淡灰褐色
28	瓦質	鉢	よこなで	無調整	よこなで		0.5mm以下砂粒極少	黑灰	黑灰 白灰
29	瓦質	口縁	よこなで	なで	よこなで		0.5~1mm砂粒少	黑	黑灰 明灰
30	瓦質	盤	よこなで	なで	よこなで		0.5mm以下砂粒極少	暗灰	暗灰 白灰
31	陶器	楕	施釉		施釉		砂粒含まず	淡灰褐色	淡灰褐色 白
32	上師	口縁	不明		不明		0.5mm砂粒多	淡灰褐色	淡灰褐色 白
33	弥生	底部	へらみがき	なで	無調整		0.5~2mm粗礫多	淡肌灰	暗褐色 暗褐色
34	瓦質	鉢	よこなで	無調整	よこなで		0.5mm以下砂粒極少	黑	暗灰 黑
35	弥生	壺	よこなで		よこなで		0.5mm以下砂粒極少	暗黄灰	暗肌灰 明灰
36	弥生	甕	よこなで		よこなで		0.5~1mm粗礫少	灰肌	淡肌 黑
37	弥生	壺	よこなで	へらみがき	よこなで	へらみがき	0.5~2mm粗礫少	暗茶	暗灰茶 黑灰 黑
38	弥生	甕	よこなで		よこなで		0.5~2mm粗礫多	蒸灰	灰肌 明灰
39	弥生	口縁	不明		不明		0.5~3mm粗礫	暗灰褐色	黑 黑灰
40	弥生	口縁	よこなで		よこなで		0.5~2mm粗礫	白灰褐色	暗黄灰 黑
41	弥生	鉢	よこなで	へらみがき	よこなで		0.5~1mm粗礫	暗灰褐色	淡茶 暗灰褐色
42	弥生	高杯	よこなで		よこなで		0.5~1mm砂粒少	肌灰	肌灰 黑
43	弥生	高杯	よこなで		よこなで		0.5~2mm粗礫少	灰茶	肌灰 淡灰褐色
44	弥生	高杯	よこなで		よこなで		0.5~1mm粗礫	淡灰褐色	淡灰褐色 黑
45	弥生	高杯	へらみがき	よこなで	へら削り	よこなで	0.5~2mm粗礫	淡灰茶	淡灰褐色 淡橙
46	弥生	漆台	よこなで		よこなで	不明	1~3mm粗礫	淡褐色	淡肌 黑
47	土師	壺	よこなで	はけ目	よこなで	へら削り	0.5~1mm砂粒少	灰褐色	淡灰茶 明灰褐色 口徑20.0
48	弥生	壺	不明		不明		0.5mm以下砂粒多	灰茶	灰褐色 黑
49	弥生	壺	よこなで		よこなで		0.5~2mm粗礫	暗灰褐色	暗灰褐色
50	弥生	壺	よこなで		よこなで	へら削り	0.5~5mm粗礫	拔褐色	灰茶 茶 口徑13.7

番号	種別	器種	調 整		胎 土	色 調			偏 考 法量 (cm)
			外 面	内 面		外 面	内 面	断面	
51	弥生	壺	よこなで	よこなで	0.5~3mm細繊多	或灰禮	灰禮		2次燒成
52	弥生	壺	よこなで 不明	よこなで へら削り	0.5~3mm細繊多	明茶	橙灰		口径11.3
53	弥生	壺	へらみがき よこなで	へら削り 無調整	0.5~1mm細繊少	暗茶	暗反茶	茶灰	
54	弥生	壺	へらみがき よこなで	へら削り 無調整	0.5~3mm細繊少	白茶灰	明茶		外面旋化物付着
55	弥生	高杯	不明		0.5~3mm細繊	白茶灰	灰茶		口径12.2
56	弥生	壺	へらみがき よこなで	へら削り 無調整	0.5~2mm細繊少	灰禮	灰茶	明灰禮	
57	弥生	壺	よこなで はけ目	よこなで へら削り	1~3mm粗繊	淡灰茶	淡反茶	黑	口径17.1
58	弥生	壺	はけ目 へらみがき	へら削り なし	0.5~5mm細繊	暗茶	暗反茶	灰禮	
59	弥生	壺	よこなで はけ目	よこなで へら削り	0.5~2mm細繊	淡茶灰	暗茶灰	灰茶	口径14.9 壶高25.2
60	弥生	壺	よこなで はけ目	よこなで 無調整	0.5~5mm細繊多	反禮	白黃灰	淡灰禮	口径11.6 壶高32.3
61	弥生	壺	よこなで へらみがき	よこなで へら削り	0.5~1mm砂粒少	暗茶	暗禮	黃禮	口径16.2
62	弥生	壺	よこなで へらみがき	よこなで 不明	0.5~2mm細繊	灰肌	暗茶	暗灰	口径12.8
63	弥生	壺	よこなで 不明	よこなで なし	0.5~5mm細繊	明灰肌	肌灰	灰	
64	弥生	壺	よこなで へらみがき	よこなで へら削り	0.5~3mm細繊	暗灰禮	暗反茶	灰茶	口径17.9
65	弥生	口縁	よこなで	よこなで へら削り	0.5~1mm細繊	淡肌	白反肌	白肌	
66	弥生	高杯	よこなで 不明	よこなで へらみがき	0.5~5mm細繊少	淡茶灰	肌灰	灰	
67	弥生	高杯	不明 よこなで	なし よこなで	0.5mm以下砂粒	灰肌	淡灰肌	黑	
68	弥生	器台	よこなで	よこなで	0.5~3mm細繊	明灰禮	禮	淡灰禮	
69	弥生	器台	よこなで はけ目	よこなで 無調整	0.5~2mm細繊	暗禮	明灰禮	淡灰禮	口径23.2
70	弥生	器台	へらみがき よこなで	なし よこなで	0.5~2mm細繊多	灰禮	暗灰禮	暗灰肌	
71	須惠	拂	ヨコナデ	ヨコナデ	0.5mm以下砂粒少	淡灰	明灰	灰	
72	弥生	壺	よこなで はけ目	よこなで なし	0.5~1mm砂粒少	暗灰茶	明灰茶	明灰肌	外面塗付着
73	弥生	壺	よこなで	よこなで	0.5mm砂粒多	茶灰	暗茶灰	茶灰	
74	弥生	壺	よこなで	よこなで	0.5~2mm細繊多	灰禮	暗反禮	暗黃灰	
75	弥生	壺	よこなで	よこなで	0.5mm砂粒少	灰禮	明灰茶	茶灰	
76	弥生	壺	よこなで	よこなで	0.5~1mm細繊	明灰禮	明灰禮	黃禮	燒成歎
77	弥生	壺	よこなで へらみがき	よこなで なし	0.5~1mm砂粒	淡灰肌	灰肌	黑灰	口径14.1
78	弥生	壺	よこなで へらみがき	よこなで なし	0.5~1mm砂粒	暗灰茶	茶肌	白灰	口径16.8 外面塗
79	弥生	壺	よこなで	よこなで	0.5~1mm細繊多	反灰	灰黃	黑灰	丹塗り?
80	弥生	壺	よこなで	よこなで	0.5~1mm砂粒	茶褐色	暗反茶	黑	2次燒成?
81	弥生	壺	よこなで	よこなで	0.5mm砂粒多	明灰肌	淡反茶	淡黃灰	
82	弥生	壺	よこなで	よこなで	0.5~2mm細繊多	暗灰茶	灰茶	黑灰	口径30.4
83	弥生	壺	よこなで	よこなで へら削り	0.5~2mm細繊	淡灰肌	灰肌	黑灰	
84	弥生	壺	よこなで	よこなで	0.5mm砂粒	灰禮	淡反禮	淡灰茶	
85	弥生	壺	よこなで	よこなで へら削り	0.5mm砂粒多	灰禮	暗反禮	暗茶	
86	弥生	鉢	よこなで	よこなで	0.5~2mm細繊	白肌	白反肌	黃灰	
87	弥生	鉢	よこなで	よこなで	0.5~1mm細繊多	暗肌灰	茶灰	淡灰肌	
88	弥生	口縁	よこなで	よこなで へらみがき	0.5~2mm細繊少	灰禮	明茶	暗禮	
89	弥生	高杯	よこなで	よこなで	0.5~2mm細繊多	明茶	茶	暗黃灰	丹塗り?
90	弥生	高杯	へらみがき よこなで	へら削り よこなで	0.5~1mm細繊少	灰肌	反禮	暗黃灰	
91	弥生	高杯	不明	不明	0.5~2mm細繊	灰肌	白反禮	黃灰	脚端径13.3
92	弥生	高杯	不明	不明	0.5mm以下砂粒多	肌	淡反禮	暗黃灰	
93	弥生	壺	不明	不明	0.5~1mm細繊	灰肌	淡反肌	黑	
94	弥生	壺	よこなで へらみがき	なし はけ目	0.5~2mm細繊	白黃灰	淡灰肌	白黃	
95	弥生	高杯	不明	不明	0.5~2mm細繊多	暗灰黃	灰黃	反禮	
96	弥生	壺	不明	不明	0.5~2mm細繊	灰肌	暗反	茶灰	
97	弥生	壺	よこなで へらみがき	よこなで へら削り	0.5mm以下砂粒少	暗灰茶	茶灰	白黃灰	
98	弥生	壺	よこなで	よこなで	0.5mm以下砂粒	灰肌	白反肌	白灰禮	
99	弥生	壺	よこなで	よこなで	0.5~2mm細繊	灰肌	灰禮	明灰禮	
100	弥生	壺	よこなで	よこなで	0.5~3mm細繊	灰禮	淡反禮	明禮	

番号	種別	器種	調査		胎土	色調			備考 法量(cm)
			外観	内面		外面	内面	断面	
101	弥生	口縁	不明	不明	1~2mm細緻多	暗黄灰	淡灰黄	灰	
102	弥生	口縁	よこなで 不明	よこなで 不明	0.5~1mm細緻	暗灰黄	暗灰體	灰肌	
103	弥生	口縁	よこなで	よこなで	0.5mm以下砂粒極少	暗黄灰	暗肌灰	黑	
104	弥生	高杯	へらみがき	へらみがき	0.5~2mm細緻少	灰黄	淡體灰	灰體	
105	弥生	高杯	不明	不明	0.5~1mm細緻	淡灰肌	灰肌	黄灰	
106	弥生	高杯	よこなで	へら削り よこなで	0.5mm以下砂粒	明灰體	明灰體	暗灰	
107	弥生	高杯	よこなで	よこなで	1mm以下砂粒少	淡體	淡體	淡灰黃	
108	弥生	器台	よこなで	へら削り よこなで	0.5~1mm砂粒多	淡體	淡灰茶	明灰體	
109	弥生	脚端	よこなで	なで よこなで	0.5~2mm細緻少	淡肌	白肌	淡黃灰	
110	偏前	盤	ヨコナデ	ヨコナデ ヘラ削り	1~3mm細緻多	明灰	淡灰	灰肌	
111	弥生	高杯	よこなで	へら削り よこなで	0.5~2mm細緻多	灰茶	灰褐色	暗體灰	
112	弥生	鉢	よこなで	よこなで	0.5mm以下砂粒多	淡體	淡灰肌	黑	
113	弥生	甕	よこなで はけ目	よこなで へら削り	0.5~1mm砂粒	暗茶	淡褐	茶褐	口径14.6
114	弥生	器台	よこなで	よこなで	0.5~2mm細緻	暗灰體	暗灰體	灰體	
115	弥生	高杯	へらみがき よこなで	無調整 よこなで	0.5~1mm細緻	淡體	淡體	口徑12.0	
116	弥生	甕	不明	不明	0.5~1mm細緻少	淡灰茶	暗灰茶	灰肌	
117	弥生	甕	よこなで へらみがき	よこなで はけ目	0.5~2mm細緻	淡灰體	肌灰	暗灰黃	外面側内面炭化物
118	弥生	甕	不明	不明	0.5mm砂粒多	茶灰	暗灰茶	淡體	
119	弥生	甕	よこなで 不明	よこなで 不明	0.5~3mm細緻	淡茶灰	灰肌	淡黃灰	口径12.5
120	弥生	甕	よこなで	よこなで	0.5~2mm細緻	淡肌	淡體	白肌	
121	弥生	器台	よこなで	よこなで へらみがき	0.5~1mm砂粒	灰體	暗赤茶		
122	弥生	鉢	よこなで なで	よこなで なで	0.5~2mm細緻	淡茶灰	茶灰	黑	口径14.8 台付鉢
123	須恵	口縁	ヨコナデ	ヨコナデ	0.5mm以下砂粒極少	黑灰	暗灰		
124	弥生	高杯	へらみがき	へらみがき	0.5~3mm細緻	淡體	暗體	黑	裝飾高杯
125	弥生	底部	不明	なで	へら削り 無調整	淡灰體	暗灰茶	暗茶灰	
126	弥生	甕	不明	不明	0.5~2mm細緻	灰體	灰體	白灰黃	
127	弥生	甕	よこなで	よこなで	0.5~3mm細緻	淡黃灰	淡灰體	灰黃	
128	弥生	口縁	不明	不明	0.5~1mm細緻	灰肌	灰肌	灰	
129	弥生	口縁	よこなで	よこなで	0.5mm以下砂粒少	灰肌	暗灰體	明灰黃	
130	弥生	口縁	よこなで	よこなで	0.5~5mm細緻	灰體	暗灰體	褐	
131	弥生	高杯	よこなで 不明	よこなで 不明	0.5~1mm細緻	淡灰肌	淡茶灰	黑	
132	弥生	高杯	不明	不明	0.5~4mm細緻	明灰體	灰體	暗赤紫	
133	土師	瓶	よこなで	よこなで	0.5~1mm細緻	淡灰肌	淡灰肌	明灰肌	
134	偏前	杯	ヨコナデ	ヨコナデ	1mm以下砂粒少	淡灰體	明灰體	口徑10.3 高2.0	
135	偏前	杯	ヨコナデ 細切り	ヨコナデ	0.5mm以下砂粒少	淡灰體	灰體	口徑11.6 高2.6	
136	偏前	杯	ヨコナデ	ヨコナデ	0.5mm以下砂粒極少	暗灰	黑灰	灰	口径8.8
137	偏前	杯	ヨコナデ ナテ	ヨコナデ	0.5mm以下砂粒極少	暗茶灰	灰茶	口徑10.2 高2.7	
138	偏前	杯	ヨコナデ ナテ	ヨコナデ	0.5mm以下砂粒	暗灰體	明灰體	口徑10.3 高3.0	
139	偏前	杯	ヨコナデ 細切り	ヨコナデ ナテ	0.5~2mm細緻	茶灰	暗體	暗茶灰	
140	偏前	杯	ヨコナデ	ヨコナデ	0.5mm砂粒	暗赤茶	暗灰體	暗茶	口徑11.6
141	弥生	甕	よこなで	よこなで	0.5mm砂粒極少	淡灰體	灰肌	灰	
142	弥生	甕	よこなで	よこなで	0.5mm砂粒	灰茶	灰茶	黄灰	
143	弥生	甕	よこなで	よこなで	0.5~5mm細緻	灰褐色	茶灰	黑	
144	土師	口縁	よこなで	よこなで	0.5~3mm細緻	橙灰	灰體	淡體灰	
145	土師	甕	不明	不明	0.5~2mm細緻極少	淡體	暗體	淡灰肌	直口壺
146	弥生	高杯	不明	不明	0.5~1mm細緻	暗黃灰	暗體灰	黑灰	
147	弥生	高杯	よこなで	よこなで	1mm以下砂粒極少	暗灰茶	暗灰茶	暗茶	
148	弥生	高杯	よこなで	不明	0.5~2mm細緻多	淡體	淡灰體	暗灰	
149	弥生	器台	よこなで	よこなで	0.5~3mm細緻	白灰肌	白灰肌	暗灰	
150	土師	甕	よこなで	よこなで	1mm以下砂粒極少	淡灰肌	白灰肌	白灰	

番号	種別	留樣	調整		胎 土	色 調			備 考 法量 (cm)
			外 面	内 面		外 面	内 面	新 面	
151	弥生	甕 不明	不明	0.5~3 mm細礫少	暗灰茶	灰鼠	黑黃灰		
152	弥生	底部 はけ目 なで	へら削り	0.5~2 mm細礫	淡灰茶	明灰橙	暗黃灰		
153	弥生	底部 へら磨き なで	へら削り なで	0.5~2 mm細礫多	淡灰橙	茶褐	黑		
154	弥生	甕 よこなで	よこなで	0.5~2 mm細礫少	黑	暗灰鼠	灰茶	外面爆付着?	
155	弥生	甕 よこなで	よこなで	0.5~2 mm砂粒少	茶	淡赤茶	灰黃		
156	弥生	甕 不明	不明	0.5~2 mm細礫多	淡茶灰	淡茶灰	黑		
157	弥生	底部 不明	不明	0.5~2 mm細礫多	淡灰橙	茶褐	黑		
158	弥生	高杯 不明	不明	0.5~3 mm細礫多	淡茶黃	淡灰褐	灰鼠		
159	弥生	甕 よこなで なで	よこなで 不明	0.5mm以下砂粒極少	淡灰橙	灰黃	黑		
160	弥生	甕 不明	不明	1 mm以下砂粒	淡灰橙	淡灰橙	明灰黃		
161	弥生	口縁 よこなで	よこなで	0.5~2 mm細礫少	灰橙	灰橙	白灰		
162	弥生	口縁 よこなで	よこなで	0.5~2 mm細礫	灰鼠	灰茶	白灰黃		
163	弥生	口縁 よこなで	よこなで	0.5~3 mm細礫	灰橙	灰橙	黃灰		
164	弥生	甕 よこなで	よこなで	1~3 mm細礫少	淡灰茶	淡灰茶	暗黃灰	口径15.6	
165	弥生	甕 よこなで	よこなで	0.5~1 mm細礫極少	灰茶	灰茶	灰鼠	口径12.2	
166	弥生	甕 よこなで	よこなで	1 mm以下砂粒	灰橙	明灰橙	暗黃灰		
167	弥生	甕 よこなで へら削り	よこなで へら削り	0.5~3 mm細礫	茶灰	暗茶灰	暗黃灰		
168	弥生	甕 よこなで	よこなで	0.5~1 mm砂粒多	灰茶	暗灰橙	明白橙		
169	弥生	甕 よこなで	よこなで	0.5~4 mm細礫	明灰茶	灰茶	明灰橙		
170	弥生	口縁 よこなで	よこなで	0.5~3 mm細礫	淡灰茶	褐	淡灰茶		
171	弥生	口縁 よこなで	よこなで へら削り	1 mm前後砂粒少	灰鼠	淡肌灰	暗灰		
172	弥生	甕 不明	不明	0.5~1 mm細礫	淡灰茶	灰鼠	黑灰		
173	弥生	甕 よこなで	よこなで 不明	0.5~1 mm細礫	暗肌灰	灰鼠	暗灰		
174	弥生	甕 よこなで	よこなで	0.5~3 mm細礫少	茶灰	茶灰	暗灰	口径14.4	
175	弥生	甕 よこなで なで	よこなで なで	0.5~2 mm細礫	灰茶	暗肌灰	暗灰	外面塗?付着	
176	弥生	甕 よこなで	よこなで へら削り	0.5~2 mm細礫	灰鼠	暗灰茶	黑		
177	弥生	甕 不明	不明	0.5~1 mm細礫少	淡灰茶	灰鼠	黑灰		
178	弥生	口縁 よこなで	よこなで	0.5~1 mm細礫	淡灰茶	灰橙	灰黃		
179	弥生	甕 よこなで	よこなで	1 mm以下砂粒	暗灰橙	灰橙	黑		
180	弥生	口縁 よこなで	よこなで	0.5~2 mm細礫少	灰鼠	明灰鼠	淡肌	施成款	
181	弥生	口縁 よこなで	よこなで	0.5mm砂粒少	灰茶	灰鼠	黑		
182	弥生	甕 よこなで 不明	よこなで 不明	0.5~2 mm細礫少	灰鼠	暗黃灰			
183	弥生	甕 よこなで	よこなで	0.5mm以下砂粒多	灰茶	白灰	白灰黃		
184	弥生	甕 不明	不明	3 mm以下細礫	淡灰橙	灰鼠	黑灰		
185	弥生	甕 よこなで	よこなで	0.5mm以下砂粒	茶茶	赤灰	白灰		
186	弥生	甕 よこなで	よこなで	0.5~2 mm砂粒	灰鼠	淡灰茶	黃灰		
187	弥生	口縁 よこなで	よこなで	1 mm以下細礫少	弱灰茶	灰橙	黑灰		
188	弥生	甕 よこなで	よこなで	0.5~1 mm砂粒極少	暗灰鼠	暗灰茶	暗灰		
189	弥生	甕 よこなで	よこなで	0.5mm以下砂粒極少	暗茶	灰鼠	黑灰	外面炭化物付着	
190	弥生	甕 よこなで	よこなで	0.5~1 mm砂粒	暗灰茶	黑	茶灰	内部炭化物付着?	
191	弥生	口縁 よこなで はけ目	よこなで	0.5~2 mm細礫	淡灰鼠	暗灰鼠	灰		
192	弥生	口縁 よこなで	よこなで	0.5mm以下砂粒	暗橙	暗茶	橙		
193	弥生	口縁 よこなで	よこなで	0.5~1 mm細礫少	暗灰鼠	灰鼠	灰褐		
194	弥生	口縁 よこなで	よこなで	0.5~1 mm細礫	淡灰茶	灰橙	灰黃		
195	弥生	甕 よこなで	よこなで	0.5~1 mm砂粒極少	暗灰鼠	暗灰鼠	淡黃灰		
196	弥生	口縁 よこなで	よこなで なで	0.5mm砂粒極少	明灰鼠	明灰鼠	灰黃		
197	弥生	口縁 よこなで	よこなで へら削り	0.5mm以下砂粒極少	灰鼠	灰鼠	灰黃		
198	土師	甕 よこなで なで	よこなで へら削り	0.5~2 mm細礫少	暗灰鼠	淡灰茶	灰		
199	土師	甕 よこなで 不明	よこなで 不明	0.5~3 mm細礫	暗灰茶	暗鼠	黑灰	口径11.6	
200	土師	甕 よこなで 不明	よこなで 无調整	0.5~2 mm細礫少	明灰鼠	明灰鼠	肌灰		

番号	種別	器種	調 整		胎 土	色 調			備 考 法量 (cm)
			外面	内面		外面	内面	断面	
201	土師	壺	よこなで 不明	よこなで へら削り	0.5~3mm細礫	灰肌	明灰肌	暗黄灰	
202	土師	壺	よこなで	よこなで	0.5~2mm細礫	明灰礫	灰礫	淡灰肌	広口壺
203	土師	甕	不剥	よこなで	0.5~3mm細礫多	灰肌	暗灰肌	灰	
204	弥生	高杯	よこなで	へら削り	0.5mm砂粒	黒茶	黒茶	灰肌	脚端径7.5
205	弥生	高杯	よこなで	へら削り	0.5mm砂粒極少	明灰礫	明灰礫	淡黄褐	
206	弥生	高杯	不明 よこなで	不明 よこなで	0.5mm砂粒極少	灰橙	淡灰橙	灰黄	
207	弥生	高杯	よこなで	よこなで	0.5mm砂粒多	暗褐	暗褐	明灰茶	
208	弥生	高杯	なで	なで	0.5~1mm砂粒多	灰橙	灰橙	淡灰茶	杯内面灰橙色
209	弥生	高杯	不剥	不明	0.5~1mm細礫	灰橙	灰橙	暗黄灰	
210	弥生	高杯	よこなで	よこなで	0.5~2mm細礫	白肌	白灰肌	白灰黄	
211	弥生	高杯	よこなで	よこなで	0.5~1mm細礫	白肌	淡肌	白肌	
212	土師	高杯	なで よこなで	なで よこなで	0.5~1mm砂粒少	肌灰	白灰肌	黑灰	
213	弥生	器台	よこなで	よこなで	0.5~1mm白色砂粒	暗茶灰	暗灰橙	暗黄灰	
214	弥生	器台	不明 よこなで	なで よこなで	0.5mm砂粒多	淡茶灰	淡灰橙	茶灰	
215	須恵	杯	ヨコナデ 系切り	ヨコナデ	0.5mm砂粒極少	白黄灰	黄灰	白灰黄	
216	須恵	口縁	ヨコナデ	ヨコナデ	0.5mm以下砂粒極少	灰	灰	灰	
217	須恵	底盤	ヨコナデ	ナデ	0.5mm白色砂粒極少	刺灰	黄灰	灰	
218	青磁	柄 施釉	施釉	施釉	砂粒無	灰綠	灰綠	白灰	
219	瓦質	鉢	よこなで なで	よこなで	0.5mm以下砂粒極少	黒灰	淡灰	白灰	
220	弥生	甕	よこなで	よこなで へら削り	0.5~5mm細礫多	灰橙	明灰茶	暗灰肌	
221	弥生	甕	よこなで	よこなで	0.5~3mm細礫	淡黃橙	灰肌	暗黃灰	
222	弥生	甕	よこなで へらみがき	よこなで なで	0.5mm以下砂粒極少	暗茶	暗灰肌	淡灰茶	径9.3 外面炭化物
223	弥生	口縁	不明	0.5~2mm細礫	黄灰	暗黃灰	灰橙	灰	
224	弥生	甕	よこなで	よこなで	0.5mm以下砂粒	淡灰橙	淡灰茶	明灰黃	
225	弥生	甕	へらみがき なで	へら削り なで	0.5mm以下砂粒極少	暗茶	暗灰肌	灰黃	外側縦付着
226	弥生	鉢	へらみがき なで	なで	0.5mm以下砂粒極少	暗茶	淡灰肌	黃灰	台付鉢
227	弥生	甕	無調整	無調整	0.5~2mm細礫極少	灰茶	淡灰肌	灰	手づくね
228	弥生	高杯	不剥	不明	0.5~3mm細礫	灰茶	灰肌	灰綠	口径14.2 高さ13.6
229	弥生	高杯	みがき はけ みがき	へら削り よこなで	0.5~2mm細礫多	淡灰橙	暗灰肌	淡灰肌	口径22.4 高さ12.5
230	弥生	甕	よこなで	よこなで	0.5~2mm細礫	暗黃灰	暗黃灰	淡橙	
231	弥生	口縁	よこなで	よこなで	0.5~1mm砂粒	茶灰	灰肌	暗灰	
232	弥生	口縁	よこなで	よこなで	0.5mm以下砂粒極少	淡灰橙	灰肌	墨	
233	弥生	甕	よこなで	よこなで	0.5~1mm細礫少	明灰黃	茶灰	黑灰	
234	弥生	甕	よこなで	よこなで へら削り	0.5~2mm細礫多	灰橙	灰橙	暗灰橙	
235	弥生	甕	よこなで	よこなで	0.5mm以下細礫	暗黃灰	暗灰橙	茶灰	
236	弥生	甕	よこなで 不明	よこなで 不明	0.5~3mm細礫	明灰肌	灰肌	灰黃	外側縦付着
237	弥生	甕	よこなで	よこなで	0.5~2mm細礫	暗黃灰	灰肌	淡灰肌	
238	弥生	甕	よこなで	よこなで	0.5~1mm細礫極少	暗茶	暗肌	茶灰	外側炭化物付着
239	弥生	甕	よこなで	よこなで	0.5~2mm細礫多	暗灰	暗灰	黑	2次焼成?
240	弥生	甕	よこなで 不明	よこなで へら削り	0.5~3mm細礫多	明灰肌	淡灰肌	暗灰	端部縦付着
241	弥生	甕	よこなで へらみがき	よこなで へら削り	砂粒無	明灰礫	灰肌	淡灰黃	
242	弥生	甕	よこなで へらみがき	よこなで へら削り	0.5~3mm細礫	暗灰肌	灰礫	明灰礫	口径14.7
243	弥生	甕	よこなで	よこなで	0.5~2mm細礫	暗肌灰	灰肌	明灰肌	
244	弥生	甕	よこなで	よこなで	0.5mm以下砂粒少	灰橙	灰橙	暗灰	
245	弥生	甕	よこなで	不明	0.5~2mm細礫	淡灰肌	明灰肌	白灰肌	
246	弥生	甕	よこなで	よこなで	0.5mm以下砂粒	淡茶灰	黄灰	黑灰	
247	弥生	甕	よこなで	よこなで へら削り	0.5mm以下砂粒極少	淡灰橙	灰礫	淡肌灰	
248	弥生	甕	よこなで はけめ	よこなで 無調整	0.5~5mm細礫	灰橙	灰橙	暗黃	
249	弥生	甕	よこなで 不明	よこなで へら削り	0.5~3mm細礫	灰橙	淡灰茶	暗黃灰	外側縦付着
250	弥生	口縁	よこなで	よこなで へら削り	0.5mm以下細礫少	淡灰肌	灰礫	灰黃	

番号	種別	樹種	調 整		胎 土	色 調			備 考 法量 (cm)
			外 面	内 面		外 面	内 面	断 面	
251	寄生	桑	よこなで	よこなで	0.5~2mm細縫	明灰肌	灰肌	淡肌	
252	寄生	桑	よこなで へらみがき	よこなで へら割り	0.5mm砂粒少	暗茶	淡茶	暗灰	口径17.0 外面深
253	寄生	桑	よこなで へらみがき	よこなで へら割り	0.5mm以下砂粒少	明灰茶	灰茶	暗灰	口径13.5 煙塵化物
254	寄生	鉢	よこなで はけ目	よこなで なで	0.5~1mm細縫	暗黃灰	暗黃灰	暗灰	
255	寄生	鉢	よこなで 不明	よこなで	0.5mm以下砂粒少	淡茶灰	暗黃灰	暗灰肌	
256	寄生	口縁	よこなで 不明	よこなで	0.5~2mm細縫多	灰茶	暗灰禮	明灰肌	
257	土師	壺	よこなで なで	よこなで 無調整	0.5~2mm細縫	灰禮	明灰禮	灰	
258	土師	壺	よこなで	よこなで へら割り	0.5~2mm細縫多	淡灰肌	淡肌	暗黃灰	
259	土師	壺	よこなで 不明	よこなで 無調整	0.5~1mm細縫少	茶灰	暗灰肌	暗灰	
260	土師	壺	よこなで	よこなで へら割り	0.5~1mm細縫少	淡灰肌	淡灰肌	灰肌	
261	土師	壺	よこなで 不明	よこなで 不明	0.5~5mm細縫	灰肌	淡灰茶	暗灰	
262	土師	壺	よこなで	よこなで へら割り	0.5~2mm細縫少	暗肌灰	暗茶灰	灰黃	
263	寄生	口縁	よこなで	よこなで へら割り	0.5~1mm砂粒	灰肌	淡灰茶	暗灰	
264	寄生	口縁	不明	不明	0.5~1mm砂粒少	灰禮	明禮		
265	寄生	口縁	よこなで 不明	よこなで へら割り	0.5~5mm細縫	暗禮灰	暗肌	灰黃	
266	寄生	高杯	よこなで へらみがき	よこなで へらみがき	0.5mm以下砂粒	灰禮	暗禮	暗茶	
267	寄生	高杯	へらみがき	へらみがき	2mm以下砂粒少	黑灰	灰茶	明灰肌	
268	寄生	高杯	不明 よこなで	へら割り よこなで	0.5mm以下細縫少	肌灰	肌灰	灰	脚端径11.3
269	寄生	高杯	へらみがき	無調整	1mm以下細縫少	茶灰	茶灰	暗灰	
270	寄生	高杯	不明 よこなで	なで	0.5mm砂粒少	暗肌	淡灰茶	白灰	
271	寄生	高杯	よこなで	へら割り よこなで	0.5~1mm砂粒少	灰茶	暗黃灰	淡黃灰	
272	寄生	高杯	不明 よこなで	へら割り よこなで	0.5~2mm細縫少	茶灰	黃灰	暗灰	
273	寄生	高杯	不明	無調整	0.5~2mm細縫多	暗禮灰	明灰禮	橙	杯内面はけ目
274	寄生	高杯	へらみがき	無調整	0.5~3mm細縫少	淡灰禮	灰肌	明灰肌	
275	寄生	高杯	へらみがき	無調整 なで	0.5mm以下砂粒少	灰茶	暗茶	黃灰	
276	寄生	高杯	へらみがき よこなで	無調整 なで	1mm以下砂粒少	灰肌	灰肌	灰禮	脚端径17.5
277	寄生	高杯	不明	無調整 よこなで	0.5mm以下砂粒少	肌灰	暗灰	淡灰禮	
278	寄生	高杯	へらみがき よこなで	へら割り よこなで	0.5~5mm細縫	暗黃灰	明灰肌	暗灰	
279	寄生	高杯	へらみがき よこなで	なで よこなで	0.5mm以下砂粒少	灰禮	灰禮	明灰肌	
280	寄生	高杯	不明	不明	0.5~3mm細縫	暗黃灰	灰肌	黒灰	焼成歎
281	土師	高杯	よこなで	よこなで	0.5mm以下砂粒	赤茶	赤茶	暗灰	丹塗り
282	寄生	器台	よこなで	よこなで	0.5~1mm砂粒	暗肌灰	暗肌灰	暗灰	
283	寄生	器台	へらみがき よこなで	無調整 なで	0.5~2mm細縫	灰肌	淡灰禮	暗灰	脚端径15.2
284	寄生	器台	はけ目 よこなで	へら割り よこなで	0.5~3mm細縫少	淡灰禮	灰禮	淡灰肌	脚端径19.6
285	寄生	器台	よこなで	へら割り よこなで	0.5~1mm細縫少	灰肌	灰肌	灰	
286	寄生	器台	へらみがき よこなで	なで よこなで	0.5~2mm細縫少	暗灰肌	灰肌	黃灰	
287	寄生	壺	よこなで	よこなで	2mm以下細縫多	淡灰肌	肌灰	黒灰	
288	寄生	壺	よこなで はけ目	へらみがき なで	0.5mm以下砂粒	淡灰禮	淡茶灰	明灰肌	
289	寄生	高杯	不明	不明	0.5~3mm細縫	灰肌	灰肌	肌灰	
290	寄生	口縁	よこなで	よこなで	0.5mm以下砂粒多	明灰肌	灰禮	明肌	
291	寄生	壺	よこなで	よこなで	0.5mm以下砂粒少	灰禮	灰禮	淡茶	
292	寄生	壺	よこなで	よこなで へら割り	0.5~2mm細縫	暗灰	明灰禮	灰禮	
293	寄生	壺	よこなで はけ目	よこなで はけ目	1mm以下砂粒少	灰禮	灰禮	灰禮	
294	寄生	壺	よこなで はけ目	よこなで はけ目	0.5mm以下砂粒少	淡灰肌	淡灰禮	黒灰	
295	寄生	壺	よこなで	よこなで	0.5mm以下砂粒多	暗茶	暗茶灰	暗灰茶	
296	寄生	壺	よこなで	よこなで	0.5~2mm細縫	黑灰	黒灰	黒灰	2次焼成?
297	寄生	壺	へらみがき なで	へら割り	0.5mm砂粒	暗灰禮	暗茶	暗灰	
298	寄生	壺	よこなで	よこなで	0.5~2mm細縫多	暗茶灰	暗灰肌	暗禮	
299	寄生	壺	よこなで	よこなで	0.5mm以下砂粒少	淡灰肌	淡茶灰	淡肌	
300	寄生	壺	よこなで	不明	0.5~2mm細縫	暗茶灰	灰禮	灰黃	

番号	種別	器種	調 整		胎 土	色 調			備 考 法量 (cm)
			外 面	内 面		外 面	内 面	断 面	
301	弥生	縫	よこなで	よこなで	0.5mm以下砂粒	暗灰	淡灰灰	暗灰	
302	弥生	高杯	不明	不明	0.5mm以下砂粒多	灰黄	榄灰	淡灰黄	
303	弥生	壺	よこなで へらみがき	よこなで へら削り	0.5mm砂粒少	淡灰灰	茶灰	淡灰橙	口径7.1 無調査
304	弥生	縫	はけ目 なで	へら削り 無調整	0.5~1mm細粒	暗灰茶	灰茶	暗灰	外面葉付磨
305	弥生	鉢	よこなで へらみがき	よこなで へら削り	0.5~2mm細粒多	茶灰	暗茶灰		口径13.5 高9.2

石 器 觀 察 表

	器 種	長cm	幅cm	厚cm	重g	石 材	備 考
S1	打製石鎌	2.4	1.6	0.3	1.3	サスカイト	先端欠損
S2	打製石錐	2.0	1.3	0.4	0.6	サスカイト	自然面残存
S3	磨製石包丁	4.3	11.2	1.0	37.1	頁岩	一部欠損
S4	打製石包丁	3.7	8.5	1.0	36.9	サスカイト	一部欠損
S5	打製石鎌	2.8	1.5	0.3	1.4	サスカイト	
S6	打製石鎌	1.9	1.5	0.4	1.0	サスカイト	未製品

## 報告書抄録

ふりがな	かみいたいせき						
書名	上伊田遺跡						
副書名							
卷次							
シリーズ名	御津町埋蔵文化財発掘調査報告						
シリーズ番号	11						
編著者名	長谷川一美						
編集機関	御津町教育委員会						
所在地	〒709-2121 岡山県御津郡御津町宇垣1629 TEL0867-24-1711						
発行年月日	西暦 2005年2月28日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東緯	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
上伊田遺跡	岡山県御津郡 御津町 大字 伊田 字大谷	33301	— 81分	32度 53分	19941104 ～ 19950228  19970116 ～ 19970331	840	岡山県動物愛護センター建設に伴う事前調査
收集遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
上伊田遺跡	集落	弥生	竪穴建物 9棟 掘立柱建物 3棟	弥生土器、石器	弥生時代から近世までの複合遺跡		



写真1 調査地周辺航空写真（1992年7月27日撮影 1:12,500 上が北）



写真2 調査地遠景（北東から）



写真3 調査地遠景（南西から）



写真4 I区（1トレンチ）上段調査前（南東から）



写真5 I区（1トレンチ）下段調査前（北東から）



写真6 I区（2トレンチ）上段調査前（南から）



写真7 I区（2トレンチ）上段調査風景（北西から）

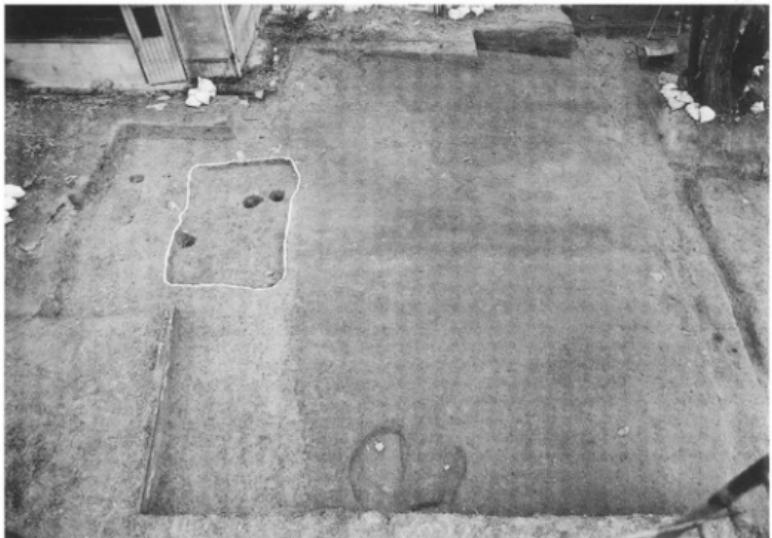


写真8 I区（1トレンチ）上段第1遺構面（北東から）

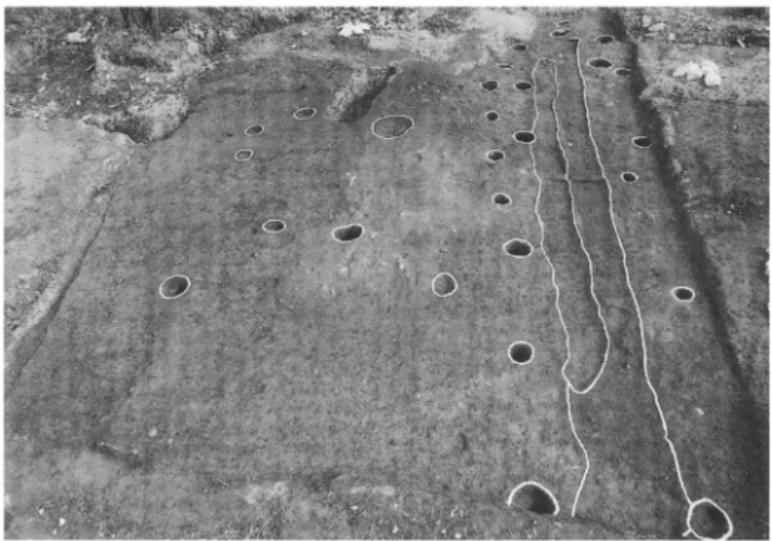


写真9 I区（5トレンチ）上段第1遺構面（南西から）



写真10 I区（2トレンチ）上段第1遺構面（西から）

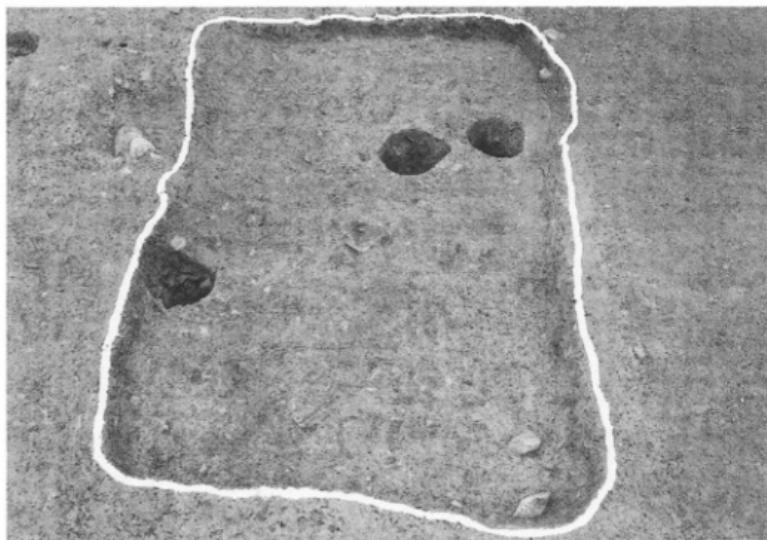


写真11 I区（1トレンチ）上段 SK101（北東から）

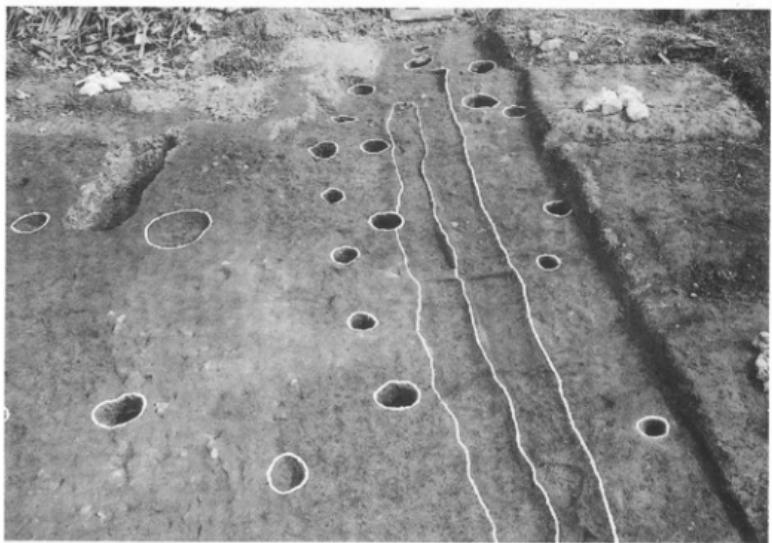


写真12 I区（5トレンチ）上段 SA501（南西から）

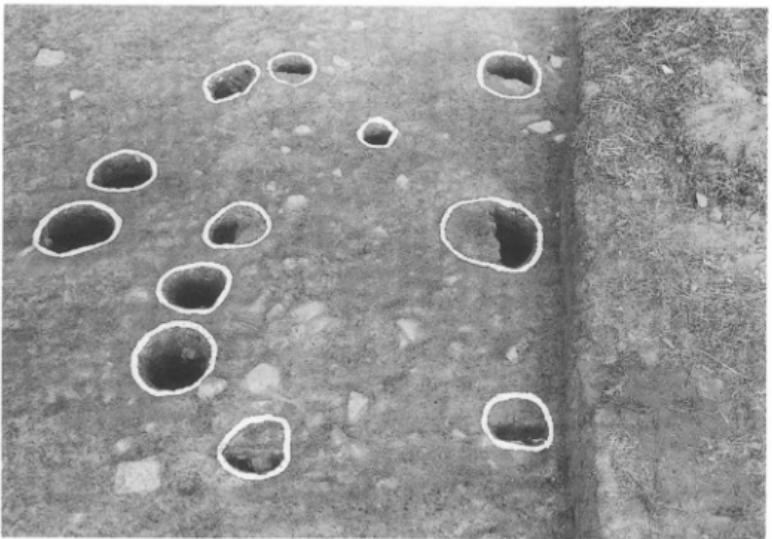


写真13 I区（2トレンチ）上段 SB202（南西から）



写真14 I区（1トレンチ）上段第2（最終）遺構面（北東から）



写真15 I区（5トレンチ）上段第2（最終）遺構面（南西から）



写真16 I区（2トレンチ）上段第2（最終）遺構面（西から）

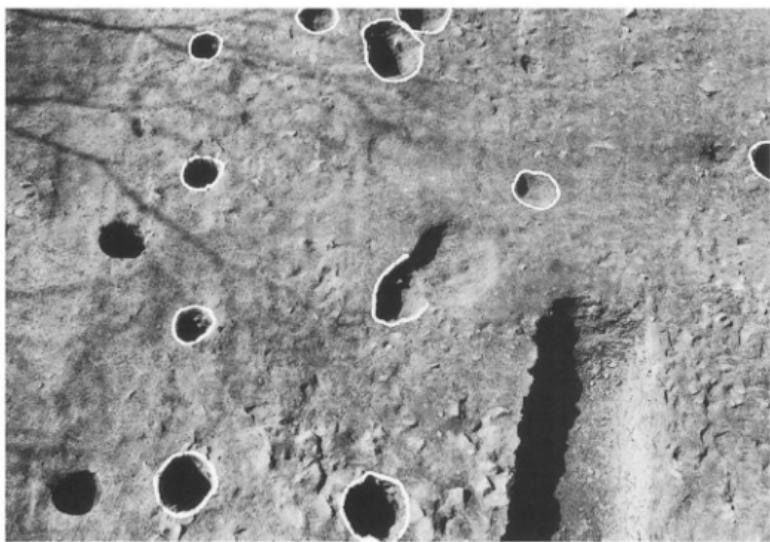


写真17 I区（5トレンチ）上段 SA502（北東から）

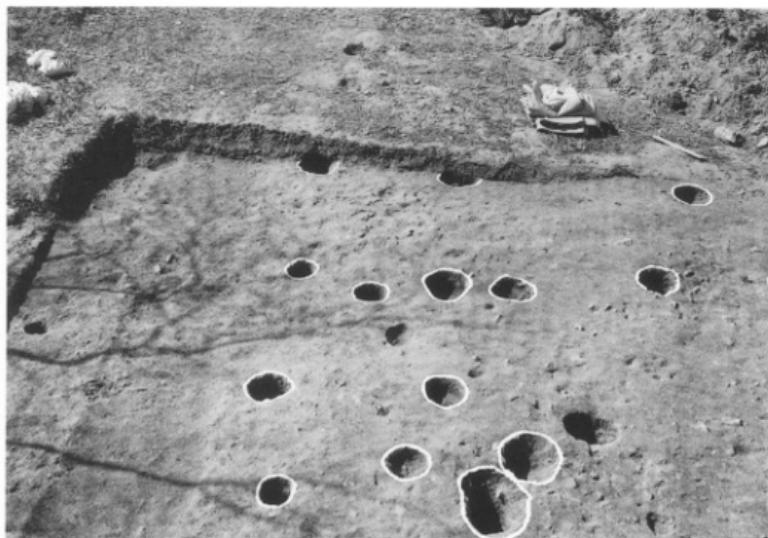


写真18 I区（5トレンチ）上段 SB507（北東から）



写真19 I区（1トレンチ）上段調査風景（南西から）



写真20 I区（1トレンチ）上段 SB101（南から）

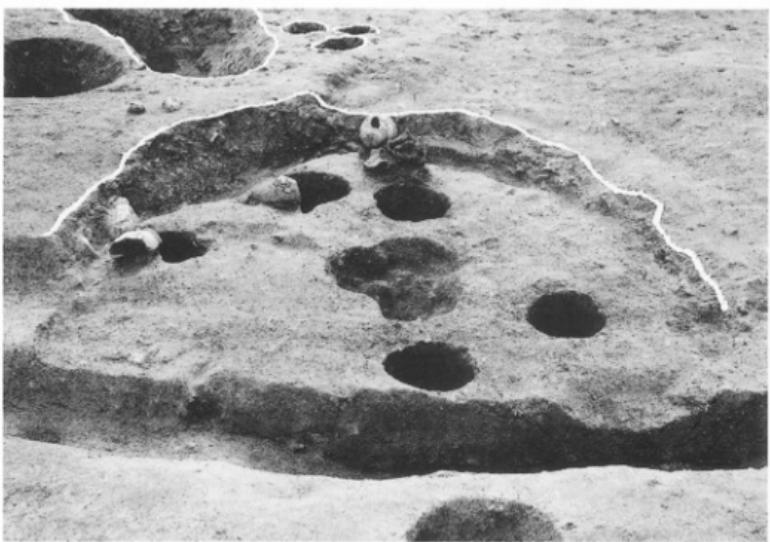


写真21 I区（1トレンチ）上段 SB101（北から）



写真22 I区（1トレンチ）上段 SB101（南西から）



写真23 I区（1トレンチ）上段 SB101土器出土状況（北西から）



写真24 I区（1トレンチ）下段第1遺構面（北東から）



写真25 I区（1トレンチ）下段第2（最終）遺構面（北東から）

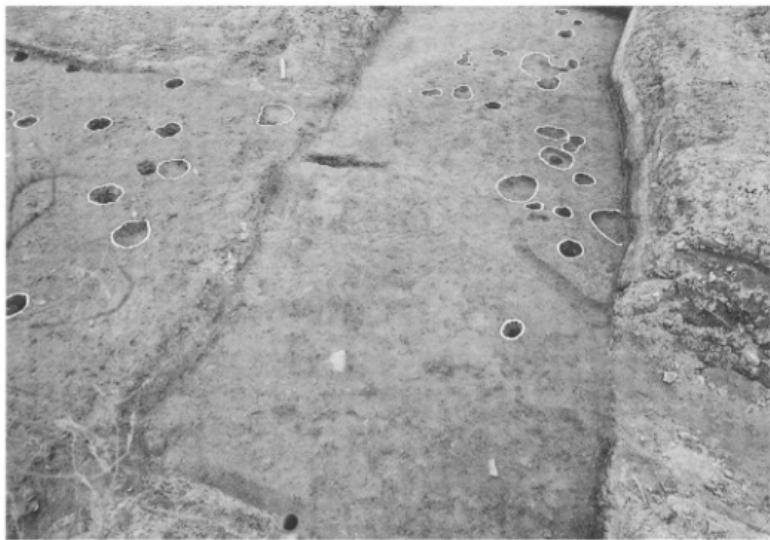


写真26 I区（6トレンチ）下段第2（最終）遺構面（北東から）



写真27 II区（3トレンチ）調査前（南から）



写真28 II区（3トレンチ）第1還構面（南西から）

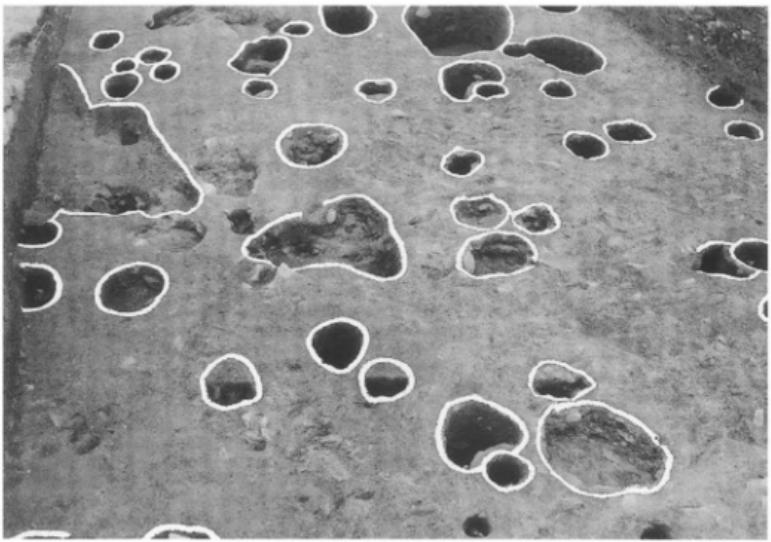


写真29 II区（3トレンチ）SB303（西から）



写真30 II区（3トレンチ）第2（最終）遺構面（南西から）

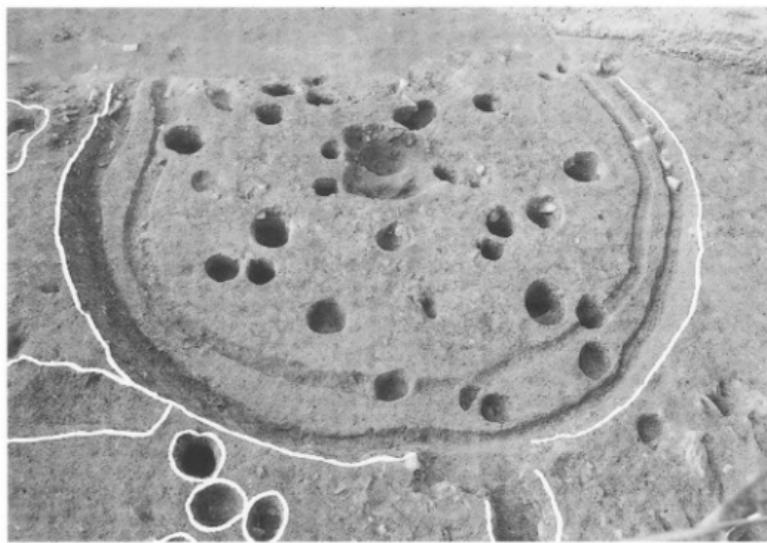


写真31 II区（3トレンチ）SB304（南東から）

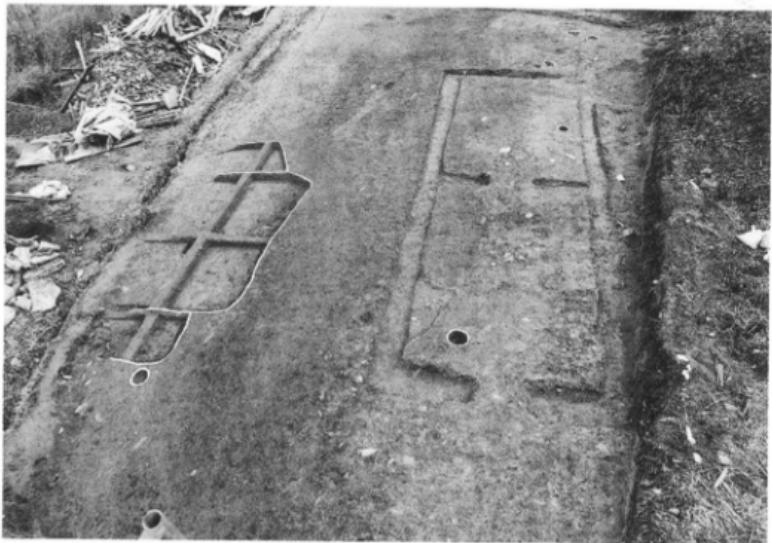


写真32 III区（4トレンチ）第1遺構面（南西から）

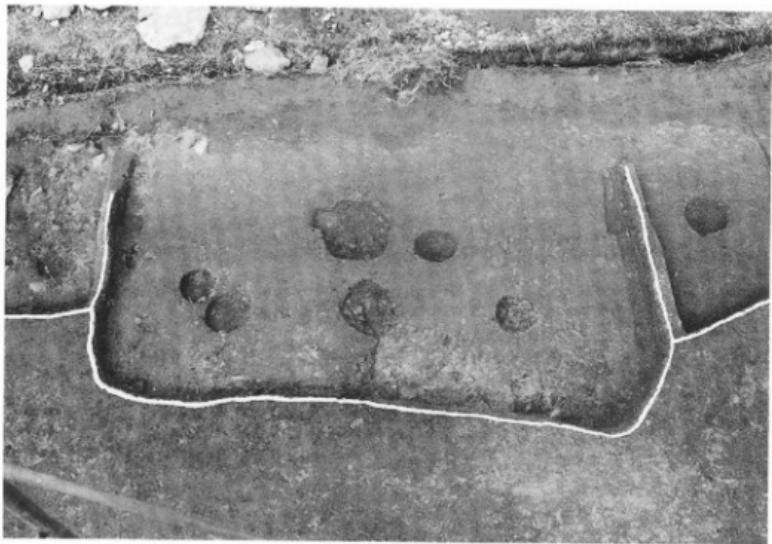


写真33 III区（4トレンチ）SB403・401・402（南東から）



写真34 Ⅲ区（4トレンチ）第2遺構面（南西から）

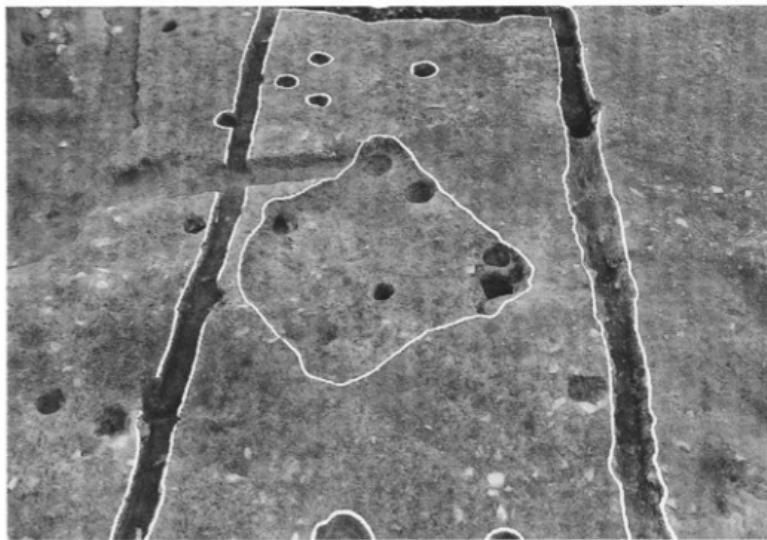


写真35 Ⅲ区（4トレンチ）SD405・SK402（北東から）



写真36 Ⅲ区（4トレンチ）調査風景（北西から）



写真37 Ⅲ区（4トレンチ）第3（最終）遺構面（南西から）



写真38 III区（4トレンチ）SB404炭化材出土状況（南西から）



写真39 III区（4トレンチ）SB404炭化材出土状況（東から）